青鞜

5

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜 五月號內容

櫻の園……(戯曲)……一……アントン、チエホフ 瀬沼夏葉譯

新らしき幸ある國へ(小說)……二三……シエンキウツチ 增田初譯

未來の王國……(小說)……四一……アナトール、フランス 淺野友譯

銀笛の悲しみ……(小說)……五四……人見直

響の影……(小說)……八五……マッコア 伊藤野枝譯

河岸……(小說)……一二一……小林歌津

うすずみ……（短歌）……一三〇……三ヶ島葭
死に行く道……（短歌）……一四〇……柴田かよ
鬚のびし男……（短歌）……一四四……原田琴
青鞜社詠草……一四七……同人
編輯室より……

附録

戀愛と道德……エレン、ケイ　伊藤野枝譯

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

戯曲 櫻の園（四幕物）――チエホフ作――

第四幕

舞臺面は第一幕の通りで、たゞ窓にはもう窓掛はなく、額もなく、僅か計りの家具が、一方の隅に寄るかのやうに積まれてある、何となくガランとしてゐる趣き。出入りする戸の邊や、舞臺の奥の方やらには、もう梱られた鞄や、旅行の包や、其の他のものが散らばつてゐる。左の方の戸は開放（あけはな）してあつて、其處からアーニャとワーリャの聲が聞える。ロパーヒンは立つて待つてゐる。ヤシャは三鞭酒を注いだ盃を載せた盆を持つて立つてゐる。玄關の間（ま）ではエピホードフが箱を縛つてゐる。舞臺の奥の蔭からは、がやがやといふ人聲、これは農民等が大勢お別れに來たので、ガーエフの聲がする。「有難う、皆様どうも有難う。」

ヤシャ。百姓どもがお別れに遣つて來た。ねえエルモライ・アレクセエヰチ様（さん）、奴等は氣が好いには好いが、どうも譯の解らない人間どもでしてなあ。

がやがやと云ふ騒は止む。玄關の間（ま）を通つて、リュボヒ・アンドレエウナと、ガーエフとが出て來る。彼はもう泣かないが、顔色は蒼褪めて、身を顫はして、碌に物を云ふことが出來ない。

ガーエフ。お前彼等に自分の夾侑（かみいれ）を遣つたね、リューバ、そりや可けないよ！そりや可けないよ！

リュボヒ●アンドレエウナ。だつて私出來ないもの！　私出來ないよ！（二人は退場。）

ロパーヒン。（彼等の行つた月の所に行つて云ふ。）　どうぞ貴方々！　一盃お別れに遣つて下さい、つい氣が着かずに市から買つて來ないで、停車場でたつた一本見付けて來ました、さあ、どうぞ！（間。）　奈何です皆樣！　お遣りになりませんか？（月の所から畜の所に歸りながら。）さうと知つたら買はなかつたものを、ぢや私も飮まなくも可い。（ヤシャは大事に盃を椅子の上に置く。）ヤシャお前でも遣つてくれ。

ヤシャ。旅立を祝し、健康を祈る！（飮む。）　これは本統の三鞭酒ぢやありませんな、如何でせう。

ロパーヒン。八圓だ一本。（間。）　寒いなあ、馬鹿にどうも。

ヤシャ。今日は煖爐を焚きませんかね、もうどうせ立つて了ふのですから。（笑ふ。）

ロパーヒン。何だいお前は？

ヤシャ。嬉しいのです

ロパーヒン。戸外は十月だが、日が當つて、靜で、夏のやうだ。建築をするにやいゝなあ。（時計を見て月の方に云ふ。）　皆樣氣を着けて下さい、汽車の出るまでに、もう四十六分ですよ。するともう二十分過ぎれば、停車場に出掛けなければ可けません、お急ぎなさい。

トロヒモフは外套を着て外から入つて來た。

トロヒモフ。もう僕等は出掛ける時間だらう、馬ももう附けたし。えゝい、何處へ行つた、僕の雨靴は。(戸の方に云ふ。)アーニャ樣、僕の雨靴が見えんですよ!見付からんのです!

ロパーヒン。私もハリコフに行くのだ、貴方々と同じ列車で、さうしてハリコフに冬中を過ごさうよ。もう私も君達と一所に、懲うぶら〳〵して仕事も爲ずにゐるのは、退屈で閉口して了つた。仕事なしぢやゐられないよ、この手の遣り場がない、懲うしてぶら下げてゐるばかりだと、何だか他人の手のやうな氣がしてねえ。

トロヒモフ。今もう立つよ。さうしたら後で君は、其の好きな所謂その仕事をうんと遣り給へ。

ロパーヒン。飲まないか一杯?

トロヒモフ。飲んでも仕樣がない。

ロパーヒン。ぢやモスクワへ行くのかね?

トロヒモフ。さうさ。皆を市まで見送つて、明日モスクワへ行く意りだ。

ロパーヒン。ふうむ……大方教授達は講義を遣らないで、君の歸るまで待つてゐるのだ

らう。

トロヒモフ。餘計なお世話さ

ロパーヒン。何年君は大學にゐるのか？

トロヒモフ。何かもつと他のことでも考へ給へ、もう那樣ことは舊いよ、さうして又面白くもないさ。（雨靴を探す。）なあ、もう我々はお互にこれきり逢はんかも知れん、でだ、僕は君にお別れに敢て一言するがね、さう君は手を振り廻し給ふなつてことだ！　手を振り廻す癖を止め給へ。まあそれと同樣にね、別莊を經營して、其の避暑客等がさ、將來に於て、各々の一家を構へる人の出來ると云ふ目算を立てるなんぞも、矢張その手を振り廻すと云ふものだ……だが左に右、僕は君を好きさ、君の細い優しい指なんぞ、まるで俳優のやうだよ、さうして君は心持も優しい男だ……

ロパーヒン。（彼を抱く。）まあ御機嫌よう、左樣なら、いろ〳〵失敬したよ。だが若し金が要るならあげやう、道中の費用に。

トロヒモフ。何にしに僕に？　要りやしないさ。

ロパーヒン。だつて君は金が無いぢやないか！

トロヒモフ。有るよ、有難う。飜譯をして取つたのが、そら此處の隱にね。（落着かないで。）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あ、雨靴がない僕の！
ワーリャ。（隣の室から。）さあ、持つてゐらつしやい、貴方のこのいやなものを！（護謨の雨靴を一足舞臺に放り投げる。）
トロヒモフ。何を怒つてゐるんですかワーリャ樣？　いや……こりや僕のぢやない！
ロパーヒン。私は春に罌粟の種子を千デシャチナ蒔き附けたが、それが今四萬圓の儲になつた。でね、その罌粟の花の皆咲いた時にハ、君。其麽に綺麗だつたと思ふ！　それで其の四萬圓も儲けたのだからさ、君にも金を持つて行けと云ふのだ。何んだつて君は又那樣に威張るのさ？　私は百姓だ……飾なしだ
トロヒモフ。君の親父樣は百姓で、僕の親父は藥屋だ、だがそれが爲に別に何と云ふことが有るものか。（ロパーヒンは夾帋を取り出す。）止し給へ、止し給へ……たとへ君が僕に二十萬圓呉れたつても取りやしないよ、僕は自由の人間だ。さうして、君等、まあ金の有るものにも、貧乏なものにも總ての人に、其れ程に價値のある、尊いところのものでも、僕の上には何等の威力をも有つちやゐない、まるで空中に飛び舞ふ鵞毛のやうなものさ。僕は君がなくつても、濟まされるんだ、僕は君等の側を素通りにすることが出來るんだ。僕にや力があり、誇があるんだ。詰り人間は、地上に於て出來得る限りの、尤も高尚な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

義と、尤も高尚な幸福とに向つて、進行しつゝあるのだ。さうして僕はその先鋒の第一列なのだ！

ロパーヒン。で、行き着くのかね？

トロヒモフ。行き着くさ。（間。）自分が行くか、或は他のものに行く道を敎へるかさ。

（遠くで木を斧にて伐り倒す音がする）

ロパーヒン。ぢや左樣なら、君、もう時だよ。だがね、我々はお互に恁う威張り合ふが、然しね、生活と云ふものは我々には構はず、自然に過ぎて行くよ。私はよくね、疲れたのも知らずに、もう長時間働き通した時などは、却つて思想が輕くなり、其上自分が何の爲に存在してゐるかゞ解るやうだ。ねえ君、この露西亞中に假りにも、自分の存在を何の爲だか解してゐる人間が幾人あるだらう。だが尤も那樣ことは奈何でもいゝのさ。人の話にね、レオニード・アンドレエヰチ君は仕事が見付かつたとかつてことだが、銀行の勤の口が、年に六千圓の俸給で…………だがどうも長く續くか奈何か、隨分懶惰ものだからなあ……

アーニャ。（戸口に來て。）お母樣が貴方にね、まだ出立ない中は、どうぞ庭園の木を伐らないで下さいつて。

トロヒモフ。勿論のことさ、奈何して氣が利かないぢやないか……（玄関を通つて行く。）

ロパーヒン。はい今直ぐさう云ひます、今直ぐに……仕様のない奴等だ。（彼の後からついて退場）

アーニャ。ヒルスを病院に遣つて？

ヤシャ。私は今朝さう申し付けました、多分遣りましたでせう。

アーニャ。（広間を通りかけたエピホードフに。）セミヨン●パンテレエキチ樣、些とざうぞ訊いて見て頂戴な。ヒルスを病院に遣つたか奈何か。

ヤシャ。（むつとして。）朝、私はエゴールにさう言付けました、何で那樣に十度も二十度もお聞きになるのです。

エピホードフ。老年のヒルスは、私の考へぢや、詰りどうも恢復は難かしいものでせう、彼れはその先祖達の所に行くのでせう。いや、私は羨しいですよ、彼れが。（鞄を帽子箱の上に載せたが、箱が毀れる。）おや／＼、さうだ、さうも覺悟はしてゐるのだ。（退場。）

ヤシャ。（冷笑して。）二十二度の不幸が……

ワーリャ。（戸の陰から。）ヒルスを病院に遣つたの？

アーニャ。遣りましたつて。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ワーリャ。奈何して醫者の處へ手紙を持たせて遣らなかつたらう？
アーニャ。ぢや後から遣らなけりや可けないわね……（退場。）
ワーリャ。（隣の室から。）ヤシャは何處？云つて頂戴、あのお母親さんがヤシャにお別れに來たつて。
ヤシャ。（手を振つて。）いやになつちまう。

ヅニャシャは荷物の傍でまごまごと立働いてゐたが、今ヤシャが一人になつたのを見て、つと其傍に駈け寄つた。

ヅニャシャ。よう、まあ、些と位私を見て下すつても可いわ、ヤシャ様よう、貴方行つて了ふんですつて………え、貴方、私を棄てる氣なの………（泣きながら彼の頸に兩手を卷く。）
ヤシャ。何を泣くのさ？（三鞭酒を飲む。）六日經ちやもう私は巴里だ。明日は急行に乘つて、もうすつと早く行つて了ふ。何だか嘘のやうさ。あゝ佛蘭西萬歳！………這麼處で俺が暮されるものかよ………仕様がないさ、下らん奴ばかりでもう飽き飽きした、もう御免だよ。（三鞭酒を飲む。）何を泣くのさ？少し自分をちやんとなさい、さうすりや何にも泣くことはないんだ。
ヅニャシャ。（懷中鏡を見ながら、白粉を顔につける。）どうぞ手紙を巴里から寄越して下さいね、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私は貴方を愛してるのぢやありませんか、これ程に貴方を！　私はほんとうに氣が小さいんだわ、ヤシャさん。

ヤシヤ。誰か來る。（鞄の傍をうろ〱して小聲で歌つてゐる。）

リュボヒ・アンドレエウナ、ガーエフ、アーニヤ、シヤルロツタ・イワノウナ登場。

ガーエフ。もう出掛けなけりやなるまい、もう時間が僅だ。（ヤシヤを顧みて。）誰か鯡の臭がするな！

リュボヒ・アンドレエウナ。もう十分したら馬車に乘らなけりやならない………（室を眴す。）左樣なら、可い家や、舊い私の家や、冬が過ぎて、春が來れば、あゝもう其の時はお前はなくなるのだよ、お前は毀されて了ふのだよ、この壁や、ねえお前もいろ〱のことを見たのだらう！（熱い接吻を娘にする。）あゝ私の寶、お前はまあ何んだか輝いてるやうだよ、そのまあ兩方の眼と云つたら、まるで二つの寶石のやうに輝いてゐるの、お前は滿足なのねえ？大變にね？

アーニヤ。えゝ大變によ！新しい生活が初まるのですもの、お母樣！

ガーエフ。（愉快に。）　勿論だ、今ぢや皆よくなつたさ。さうさ櫻の園が賣られるまでは、皆案じたり、苦んだりしたが、もう愆う悉皆かたがついて了つたので、却つて皆の氣が

落着いた、愉快になつた……俺は銀行員になるし、今俺はさうさ理財家だ……黄色の眞中だ。あ、リューバ、さう云へばお前も一時より、ずつと具合がよさゝうになつたよ。

リユボヒ●アンドレエウナ。神經が餘程靜まりました、そりや本統。（彼女に帽子を渡し、外套を着せる。）私はよく寢ますもの、ヤシャ、私の荷を持つて來ておくれ、もう出掛けるのだよ。（アーニャに。）ねえ、アーニャ、直きに又逢はれるからね……私は巴里に行つて、さうして彼地で暮すそのお金はね、あのお前のヤロスラウリの大叔母樣が、お前に所有地を買ふ爲に寄越したそのお金でする意だよ。さうして、どれ大叔母樣の御健康を祈りませう！　だがそのお金も、どうも長くはもたないでせう。

アーニャ。ですがお母樣、直きにお歸りになりますねえ……さうでせう？私勉强して、女學校の試驗を卒つて了ひます、さうしてから私働きますわ、お母樣のきつとお手助け致しますよ。さうしてね、お母樣、私等はいろ〳〵の書物を讀みませうね……ね、さうでせう？（母の手に接吻する。）私等は秋の夜に、澤山書物を讀みませう、さうして新しい、可い世界を眼の前に開きませう……（空想する。）お母樣早くお歸り遊ばしてよ……

リユボヒ●アンドレエウナ。歸るよ、可い娘や。（娘を抱く。）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ロパーヒン登場。シャルロッタは靜に歌ふ。

ガーエフ。シャルロッタさんは歌つてゐる美しいなあ！

シャルロッタ。（赤子をくるんだやうな包を取つて。）私の赤ちやん、ねん〱よ………赤子の泣聲。おぎやあ！　おぎやあ！　おゝよし〱、可哀さうに！　可哀さうに！（包を器の處へ置く。）どうぞ貴方ね、私に勤口を探して下さいよ、私何にもしないぢやゐられないのですからね。

ロパーヒン。見付けますよ、シャルロッタ・イワノウナ樣、御安心なさい。

ガーエフ。皆が我々を棄てゝ行くのだ、ワーリャも出るのだし………我々は急に皆に用のないものになつて了つた。

シャルロッタ。市に行つても、私何處でも暮されませんもの、仕方がなしに出ますのさ……（歌ふ。）奈何でもいゝですわ………

ピシチク登場。

ロパーヒン。こりやお珍らしい！

ピシチク。（息を反跳まして。）おゝ、まあどうも、少し息まして下さい………あゝ苦しい……皆樣、いやまあ、水を一杯下さい………

ガーエフ。また乾度錢だらう？　駄目だよ、逃げやう、逃げやう………（退場。）

ピシチク。暫く貴方へ御無沙汰したした………奥樣………（ロパーヒンに。）お前樣もこゝか………そりやよかつた………才物………さあ、取つて下さい………受取つて下さい………（ロパーヒンに金を渡す。）四百圓………で、未だ私のの方に八百四十圓のお借りが殘つてゐるのだ………

ロパーヒン。（驚いて肩を縮める。）こりや何だか夢のやうだ………貴方は何處から錢を掘り出しました。

ピシチク。お待ちなさいよ………あゝ暑い………何ね、ふいな出來ごとでね、ある英吉利人が尋ねて來てさ、私の土地から陶器の粘土を見着けたと云ふものだ………（リュボヒアンドレエヴナに。）さうして貴方に四百圓………奥樣………（金を渡す。）あとの殘りは又後にな。（水を飲む。）今ね、一人の若い男が汽車の中での話だが、何處かの………偉い哲學者ださうだが、屋根からその飛下りることを敎へるのださうでね………『飛び下りなさい』だつてさ、それでよ、たゞこれが生活の問題だと云ふのぢやないか、奈何ですな！（水を下さい！）

ロパーヒン。甚麽英吉利人がね？

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ピシチク。その人間にな二十四年間、土地を貸したのさ、その粘土質の地所を………だが、今は免して下さい、時がないんだ………まだ是から用があるのでね………ズノイコフの所に行かなけりやならないし………カルダモノフの所へも………皆借金濟しに………(飲む。) どうぞまあ御機嫌よう………木曜日にはまた參りますだ………

リュボヒ●アンドレエウナ。私等は今宵市に引拂ます、さうして私だけ明日外國へ參ますの。

ピシチク。はあ？ (不安心らしく。) 奈何して市に？ うむ、さうか、それで呑込めた、這麼に家具が彼方此方に………其方には鞄もあるしよ………ふむ、さうかい………(涙を溜める。) さうかい………うむあの英國人はね………利口な奴だよ………さうかい………まあ、それぢや切角仕合せでね………神様のお佑助で………まあ、い丶さ………何にでも此の世の中ぢや終があるものだからな………(リュボヒ・アンドレエウナの手に接吻する。) あ、さうしてな、若し貴方の所へ私の死んだことが知れた時にや、思出して下さい、その………馬のことを。でさう有仰つて下さいよ。『あ丶前に這麼人間があつた………ジミノフ●ピシチクと云ふ男があつたつけ………天國に安息を、』と………何とも好いお天氣だよ………さうさ (酷く心が擾ぐさまで入つて行つたが、又忽に引返して來て、戸から顏を出し。) 私どものダーシェンカから宜しく申し上げました！ (退場。)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

リュボヒ・アンドレエウナ。さあ、もう出掛けられる。だか私はまだ二つ氣になることがある、第一はヒルスの病氣のことだが。（時計を見る。）まだあと五分ゐられる……

アーニャ。お母樣、ヒルスは今朝もう病院に遣りました。ヤシャが遣りましたさうですよ。

リュボヒ・アンドレエウナ。第二の心懸りはね、ワーリャのことなのさ、彼娘（あれ）は朝も早く起きて、もう一日中よく働くことに慣れてゐるのだが、今もう何にもしないで、まるで魚が水の無くなつたのも同樣でね……（間。）貴方ねえ、エルモライ・アレクセエキチさん、貴方はこれをようく御存じでせう、私はさう空想を書いてゐましたのさ………彼女（あれ）を貴方に娶（めあは）せやうとね、さうして皆にもさう見えてゐましたのですよ、貴方がお貰ひなさるものとね　（彼女はアーニャに何かそつと云ふと、アーニャはシャルロッタを首で招き、二人は出て行く。）彼女は貴方を愛してゐますの、で貴方にもお氣に入つてゐるでせう、だのに奈何してあの、今もつて埒（らち）の明かないのは、本統に譯が解らないぢやありませんか、さうして何だかまるで知らないやうな風を兩方で爲てゐるのですもの、譯が解らないのねえ！

ロパーヒン。私も自分で分りません、實を云ふとです。何だか變なのです……若し時があれば、私は今でも極めて了ふのですが……さうしてすつかりお終ひにして了ふのです。だが、若し貴方無しぢや、どうも何時までたつても、屹度結婚の申込なんぞはしな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いでせうと思ひます。

リュボヒ・アンドレエウナ。ぢや丁度いゝでせう。たゞ一分間でも出來て了ひますわね、私今直ぐにワーリャを此處へ招びますよ………

ロパーヒン。ぢや序に三鞭酒を遣りませう。（盃を見返る。）空ぽうだ、誰か皆飮んで了つた。（ヤシャは咳拂をする。）これこそ皆嘗めて了つた、と云ふのですな。

リュボヒ・アンドレエウナ。（快活に。）可うござんす、私達出ませう………ヤシャallez!（戸の方に。）ワーリャ、其處はおいて大急ぎで些とお出で私は彼女を招びますよ………

よ！（ヤシャと共に出て行く。）

ロパーヒン。（時計を見る。）さうさ。

戸の陰で無理に抑へた笑聲。囁き。ワーリャは出て來る

ワーリャ。（荷物をぢつと見てゐる。）おや、變だ、奈何しても見着からない………

ロパトヒン。何を貴方は探してお出でゝす．

ワーリャ。自分で置いて奈何したか譯が分りませんの。（間。）

ロパーヒン。ワルワラ・ミハイロウナ樣、貴方は今これから何處へ？

ワーリャ。私、ラグーリンの所へ………家政を引受けますことに致しましたの………經濟の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

方を、とか。

ロパーヒン。あゝそれヤシネヲ村の、此處から七十露里(ウエルスタ)計りありませう。（間。）もうとう／＼此の家の生活も是切りですな………

ワーリャ。（荷物を胸す。）何處へ遣つたらう………でなければ、ひよつと私は箱の中へでも入れやしないかしら………さうですねえ、もう此の家の生活もお終ひになりました……………もう是切で御座いますわ………

ロパーヒン。で私はこれからハリコフに行きます、今直ぐに………矢張りこの汽車で、澤山要事があるのでしてね、さうして此處はあのエピホードフに留守居をさせる意(つもり)です、もう私は彼(かれ)を雇(やと)いました。

ワーリャ。はあ、さうですか！

ロパーヒン。去年の丁度此の時分は、もう雪が降りましたつけが、憶(おぼ)えておゐですか。奈何うか。然し今は穩う靜で、日がよく當つて可い鹽梅です。だが寒さは隨分强いですな………三度と云ふ嚴寒ですよ。

ワーリャ。私見ませんでした。（間。）えゝさう、毀れましたの、家の寒暖計は………（間。）

外から聲。エルモライ●アレクセエキチ樣！………

ロパーヒン。（其聲を待つてゐたと云はぬ許りに。）　只今！（急いで出て行く。）

ワーリャは床にばつたりと座つて、着物を入れた包の上に頭を投げて靜かに泣く。其時そつと戸を開けてリュボヒ・アンドレエウナが氣着けながら入つて來た。

リュボヒ●アンドレエウナ。何うして？（間。）さあ、もう行かなけりならない。

ワリャ。（もう泣くのを止めて眼を拭ふ。）　えゝ、お母樣もうお出掛けにならなければ可けません、私、ラグーリンの所へ行きますのは、若し汽車に間に合へば、今日中には行かれますから………

リュボヒ●アンドレエウナ。（戸の方に。）アーニャもうお着なさいよ。

アーニャと、ガーエフと、シャルロツタ・イワーウナとが登場。ガーエフは頭巾の附いた温い外套を着てゐる。召使等や、馭者も登場。エヒホードフは荷物の邊でまごまごしてゐる。

リュボヒ●アンドレエウナ。さあ、もう出掛けられます。

アーニャ。（喜ばしげに。）　さあ、行きませう！

ガーエフ。あゝ我が友等、あゝ愛すべき、貴き我が友等！　余は今や永劫この懐しきわが家を棄つるに當つて、如何で默然としてゐられやうか、余は余が滿腔の感情を絞つて汝に告別の辭を述べずして居られやうか………これを抑へて居られやうか………

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

アーニャ。（頼むやうに。）叔父様！

ワーリャ。叔父様お止し遊ばせ！

ガーエフ。（悲しげに。）二度突で黄色が眞中だ……默らうよ……

　　トロヒモフ登場。續いてロパーヒンも。

トロヒモフ。さあ、皆様、もう行く時間ですぞ！

ロパーヒン。エピホードフ、俺の外套をくれ！

リュボヒ・アンドレエウナ。私もう一分だけ恁うしてゐますよ。先にはいつもまるで見なかつたやうなこの家、この壁、まあこの天井、今更に私は本統に堪らなく懐かしく、つくぐ〵と見ますよ……

ガーエフ。思ひ出すがね、俺の六才の時さ、聖三者祭の日で、私はこの窓に掛けてね、丁度父親がこゝを通つて聖堂に行つたのを見てゐたつけ……

リュボヒ・アンドレエウナ。皆荷物を取りましたの？

ロパーヒン。皆取つたでせう。（外套を着ながら、エピホードフに。）おい、エピホードフ、お前なあ、ようく萬事に氣を着けてな。

エピホードフ。（嗄聲で云ふ。）どうぞ御心配なく、エルモライ・アレクセエヰチ様！

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ロバーヒン。お前の聲は奈何したのだ？
エヒホードフ。只今水を飲みましたら、何かをその、一所にこう飲み込みましてな。
ヤシャ。（輕蔑するやうに。）下らねえ……
リュボヒ●アンドレエウナ。さあ、出掛けませう此處には誰も殘つちやゐないのね……
ロバーヒン。春までは。
ワーリャ。（包の中から傘をすつと勢よく、恰も振り廻したやうに拔き取つた。ロバーヒンは喫驚したやうな樣子をする。）奈何なさいまして、え、奈何なさいまして……私、那樣氣ぢやないのですわ。
トロヒモフ。さあ、皆樣參りませう、馬車に……もう時ですよ！　もう今汽車が來ませう！
ワーリャ。ペーチャ樣、それ貴方の雨靴、鞄の傍にありましたの。（涙を浮べる。）何てまあ、この汚い、さうして古い……
トロヒモフ。（雨靴を穿きながら。）さあ、皆樣參りませう！……
ガーエフ。（酷く苦しんで、また泣くまいと無理に抑へて。）汽車……停車場……接觸で眞中だ。白を二度突で隅だ……
リュボヒ●アンドレエウナ。行きませう！

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ロパーヒン。皆此處ですか？　誰も彼方(むかふ)にもうゐないのかね？（左手の横の戸を閉める。）此處にいろ〳〵の品物が入れてあるから、鍵を懸けなけりや、ごれ行かう！

アーニャ。私の家や、左樣ならよ！　私の舊い生活や左樣ならよ！

トロヒモフ。新生活の門出を祝しますー！（アーニャと共に退場。）

ワーリャはもう一應室の中を眴して、緩りと出て行く。あとからヤシャと、犬を曳いたシャルロッタとが尾いて退場。

ロパーヒン。ぢや春まで。さあ行きませう皆樣(さん)……はい、左樣なら！（退場。）

リュボヒ・アンドレエウナとガーエフとが恰もさうしたかつたやうにたゞ二人殘る。彼等は互に飛び着いて、抱き合つて、周圍(まはり)に聞えぬやうに聲を呑んで靜に泣く。

ガーエフ。（失望に沈んで。）妹……妹……

リュボヒ・アンドレエウナ。あゝこの可い、この懷しい、この綺麗な私の庭園(には)！……私の生活も、私の若かさも、私の幸福も、過ぎて了つた！……過ぎて了つた！……過ぎて了つた！……

アーニャの聲。（元氣よく呼ぶ。）お母樣！

トロヒモフの聲。（愉快らしく興奮したやうに。）おーい！

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

リュボヒ●アンドレエウナ。さあ、お終ひにもう一度、この壁も、この窓も見て………さう、なくなつたお母様がこの室を歩くのが好きだつたつけ………

ガーエフ。おゝ妹!………おゝ妹!………

アーニャの聲。お母様!

トロヒモフ。おーい!

リュボヒ●アンドレエウナ。さあ、行きませう!………(退場。)

舞臺は空となる。鍵を掛けては方々の戸を閉める音がする。間もなく、馬車の軋り出す音。次第にひつそりと靜まり返る。この森しんとした靜けさの中に、時にたゞ樹々を伐り倒す冴えない斧の音が、哀切な響をつたえ來るかばりで跫音が聞える。右手の戸からヒルスが現れる。平常の通りの姿で、背廣服に白いチョツキ、上靴を突いてゐる。彼は病氣なのだ。

ヒルス。(戸口の方に歩み寄つて、引手を握る。)閉めて了つた。立つたのだ………(長椅子に掛ける。)俺のこと忘れたゞ………なにいゝだ………どうれ、まあ、こゝにゐやう………だがさ、レオニード●アンドレエヰチ様を、大方毛皮の外套でねえ、他の外套で行かつしやつたゞらうの………(氣に掛るやうに太息をして。)俺、顔出さねえだもんだから………若いからなあ!(何かごさくさと譯の解らぬことを呟く。)あゝゝ、俺の生涯ももう過ぎたゞが、何だか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

まるで、何の生涯もなかつたやうだ………（横になる。）俺橫にならう………もう力も俺にやねえ、何もねえだ、何にも………えいこの………出來損め！………（もう寢たまゝで動かぬ。）

遠い天からでも響いたやうに樂器の糸の弾裂た音がして、悲しく、音が沈み行きつゝ消える。その後はまたも森閑となつて、たゞ遠い方の庭園の邊で木を打つ斧の響ばかり。

幕

歐文註解　allez！　行きなさい！

――完――

瀬沼夏葉譯

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

新らしき幸ある國へ——シエンキウツチ——

一の二

烟突から上る煙は赤く　帆や、濡れてる綱などは淡紅く光つてる、水夫達は歌ひ初めた。

眞紅に輝く太陽は悠つくりと海の中に沈んで行くに從つて益々大きく見えて來た。間もなくその姿が濤の上に半分しか見えなくなつて、西の方一帶に偉大な光彩を浴びせた、その光りの中では濤の輝きが何處まで續いてるのか、空が何處から初まつてるのか、全く見定めが付かない。皆此の射るやうな光の爲めに混然としてゐた。それも次第に鈍い柔い光となつて行くと大洋は夕の祈禱を呟くが如くに長い低い聲で凱歌をつぶやくのであつた。

此の如な時には追憶は胸に起るものである。記憶してゐねばならない事は思ひ出す、慕はしく思つてる事は尚一層烈しく慕はしくなる。熱望してる事に向つて心は飛び行くロレ

ンツもメリーも恁んな事を思ふのであつた。

風は、自分等を樹を離れた木の葉のやうに、どん〳〵運び行くが、自分等の行かうとしてる土地は、自分等を生んで呉れた元の幹ではない。その幹は反つて自分等が出立して來た其の土地なんだ。

「ポーランドの地」

其處には木の實みのり、穀物の金波は野にひるがへり、緣りなす森は茂り、茅葺きの屋根は散見し、至る所、胡蝶戲る、錦の野あり、水青き湖邊には鶴燕の類群れ遊び、菩提樹の間には狹き四辻や白き別邸の窺ふ、その邊りで人々は天主の惠あれ、いつ迄も永久に、と挨拶を交はす、あの最も尊き、最も温き、正しき、愛すべき、世界に比なき母國なのである。

斯んな風にして此の農夫の頭に、前には感じないでゐた事までが今は感ぜられる。

ロレンツは帽子を脫つた。

日沒の光は其の灰色の髮の上に落ちた。其の考へてる事は非常に忙がしく、此の哀れな人は、自分の思つてる事を娘に聞かせる術を知らなかつた。けれ共、彼は遂に口を切つた。

「メリーや私は何か忘れ物をして來たやうな氣がするよ。」

「運を忘れて來たの、愛を忘れて來たのよ。」
娘は祈りの時のやうに目を見上げながら徴かに答へた。
日は暮れて來た。客達は次第に甲板を捨てゝ行くので、船の上は一渡り騒がしかつた。美しい日没を送つた後の夜は、屹度平靜だといふ譯には行かない。運轉手の笛は始終鳴り、水夫等は綱を曳つぱつた。
最後の紫色の輝きは海の上に消え去つて霧が水から立ち上つた。星が二つ三つ空に瞬いて、そして見えなくなつた。霧は見てる間に厚くなつて行つて、空を包み、地平線を包み、船自身をも包んで終つた。烟突と大帆柱だけは尙ほ見えてゐた。乘組員の姿は影のやうに浮んだ。一時間後には總ての光は帆柱の頭に揭げられた燈火や、烟突が呼吸する爲めに出す火花までも白い霧の中に隱されて見えなくなつた。船は動かない、濤はその力を弱くして滑かに深い霧の下に滑り去つた。
夜は音もなく靜かに更けて行つた。果然、彼方の地平線の靜寂を破つて襲ひ來る巨人の重き鼻息の如き不思議な音が反響して來た時には、闇を通じて誰か呼び立てゝるやうにも思へた。
遠方から云はれなく悲しい寂しげな聲の合唱が私語くやうに、又嘆くやうに傳はつて來

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。その聲は灰色の夜の計るべからざる無限の境から出て來るやうに思はれた。

水夫等は此のやうなつぶやきを聞くときは、「あれは嵐の神が地獄から風を呼んでるのだ」と云ふ。暴風雨の前兆は時々刻々明かになつて行つた。船長は合羽を身につけ洞油の帽子を頭にかぶつて、一番高い船橋に立つてゐた。

運轉士は指針を手にして平常の位置に立つた。甲板にはもう一人も客は見えない。

ロレンツとメリーも三等室に下つて居た。沈默は其處らあたりを支配して居た。低い天井に下げられたランプは鈍く光つてた。移住者たちは寢床の傍にかたまつて座つて居た。船房は廣いけれ共、下等室らしく陰氣であつた。寢臺は天井の直ぐ近く迄層をなして居て動物の暗い巢のやうに見えた。其の全體の光景は暗い陰鬱な酒藏のやうな感じを思ひ出さすのであつた。その空氣は帆布や、タールを塗つた繩や、水桶やの濕氣ある臭ひで充たされてゐた。此處にあるものは何れだつて上等船客の立派な房のものとは及びもつかぬものばかりであるのだ。斯んな穴の中に二週間も居れば肺はその不潔な空氣で害せられ、皮膚は病人のやうに蒼白となり、終ひには敗血病にまでなつてしまふのだ。

ロレンツとメリーは此處にまだ四日しか居ないのだ。それでも薔薇のやうに生き／＼して居た。

リビンツに居る時のメリーと、今の瘦せ蒼くなつたメリーとを並べて見たら、到

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

底も同じ人とは思へないだらう。老ひたるロレンツも蠟のやうに黄色くなつて終つた。二人は乘り込んだ最初の二日間甲板に出なかつたので、その容子が一層ひどいやつれやうであつた。二人は出てはならぬのだと思つて居たのである。何々はしてもよい、何々は爲てはならぬのだ、といふ事などを何うして二人が知る事が能きやう。身動きする事も、荷物を置いたまゝ立つ事も恐れて居たのだもの。

今自分等も他の客等も、各自の荷物の傍に座つてゐる。其處等一面移住者等の荷物で取り散らされて亂雜と、失神したやうな人の顏とは一層甚だしい。寢床や、衣類や、食物器具、錫、コップなどのかたまりや、皿鉢の類が床の上に積まれてある。殆ど獨乙人ばかりの移住者たちは、各自の荷物の上に座してゐた。烟草を噛んでる奴もあり、煙管をくわへてる奴もある。烟草の煙は天井につかへて、それから四方に擴がつて、ランプの光を愈鈍くした。

小供が二三人隅の方で泣いたが、人々は平常のやうな騷ぎをしなかつた。霧が總てのものを不安と心配とで包んでゐるのだ。少し旅慣れてる人達には之は暴風雨の前兆だなと分るのだ。危險が、否な死の時が近附きつゝあるといふ事は分りきつて居る。ロレンツとメリーは何も解らないでゐた。けれ共、昇降口が急に開かれた時、遠くの方に

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

其の氣味の惡い音を確かに聞いたのであつた。

二人は船尾の近くの狹い所に座つてゐた。船の嫌やな動搖は此處では一層激しく感ずるので、乘り合ひの人々は彼方に群集つてゐるのであつた。

老人はリピンツから持參したパンで腹をかためたため、娘は何をするにも倦き果て、徹夜髮をまざぐつてゐた。

時々小供の泣く聲がする外全く平常と異つて靜かなので、娘は驚いて尋ねた。

「何うして獨乙人達は斯んなに默つてゐるのでしやう」

「俺が知るものか、彼奴等の聖い日か何かなんだらう。」とロレンツは答へた。

突然、船は何か怖ろしいもの丶前に來たやうに、激しく搖れた。錫の器はガチリ〳〵打突かり合つた。ランプの炎は飛び上つて一層明るく輝いた。そして二人三人恐ろしそうな聲で尋ねるのであつた。

「あれや何だ、何うしたんだ」

けれ共何も答はなかつた。

二度目の動搖は初めよりも激しく船中を搴かした。船尾は急に空に飛び上つた。そして直ぐ亦海の中に突き入つて行つた。濤は風上の帆柱穴に激しく衝突した。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「嵐が來るのよ。」

メリーは恐ろしさうに囁いた。間もなく暴風が森を通して吹く旋風のやうに吠えたてる。狼の群に責められるやうに、船の周圍に吼り立つた鋭い風は、幾度となく突き當つて、船を傾け、濤頭の上に突き上げ、又深い底に投げ落した。寢臺道具、錫の器、荷物などは一方の隅から一方の隅へ投げ出された。二三の人々は足をはらはれた。枕の羽が飛び散つてランプの烟突はガチリ〳〵動いた。それから甲板の上に突き當る濤の叫び、船の動搖、振動、女小供の泣き叫ぶ聲などが空氣に響き渡つた。

此混亂の間に船員の裂くやうな笛子の聲、頭の上に走り交ふ水夫等の足音が聞えて來るのであつた。

「輝く山の女神さま。」

メリーは低く叫んだ。

人々が身を避けて居る船の艇尾は、狂のやうに上つたり下つたりした。皆寢臺にしつかりと捕まつて居たのだが、幾度となく側へ投げ出された。暴風の吼りは増して來て、梁や閂の軋む音は激しく、今にもちぎれ〳〵に碎けて終ひさうに見へた。

「メリーしつかり捕まつておいで、」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

暴風の音に打消されまいとして、大きな聲で父は叫んだ。けれ共もう直ぐ怖ろしさが喉元まで迫つて來て居た。その怖ろしさに小供達は泣き止み、女共は啜り泣きの聲を止めた。皆呼吸を速くし、手は何かしつかりしたものを握りしめてゐた。嵐は其威を一層强くした。霧は闇の中に溶け、雲は水と混じ、風は水煙の中に吹き廻した。浪は彈丸のやうに船に當つて震動させ、今右へと思ふと亦左へ、濤の頂から大洋の海底迄船を搖り上げ、搖り動かした。時とすると泡立つ浪の鬣は船の頭から尾まで洗ひ去つた。巨大な濤の壁は、げにも怖ろしそうに聳え立ち音を立てた。石油ランプの炎はゆらめいて一つ〳〵消えて去つた。だん〳〵暗さは增して來るばかりで、ロレンツとメリーには死の黑き影が近附いて來るやうに思はれるのであつた。

「メリー、汝を死にに連れて來た私を許してお吳れ。最後の時はもう來たんだもう二度と私等は此世をこの罪深き目で眺める事は出來ない。私等にはもう臨終の告白もない最後の塗油式もない、眠るべき墓もない、只最後の日に水から出て天へ登るばかりなんだ」と農夫は息も自由に出來ないので切れ〳〵に云ひきつた。

斯う云はれてメリーはもう助かるべき望みのない事が了解つた。千々の思が女の頭の中に往來した。そして女は心でかう叫んだ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「ジョンさん、あの優しい心の、あの慕はしいジョンさん。貴方は――リヒンツに居て――今私の云ふ事が聞えますか。」

殘酷な悲哀が強く襲ふて來たので女は聲を上げて泣き出した。女の啜泣の聲は死んだやうに靜まつて居た場所を通して響くのであつた。

「靜かにしろッ。」隅の方から誰か叫んだ。そして自分のその聲で驚ろかされたやうに口を噤んだ。殘つてるランプのほやが床の上に落つこツて、ランプは消えた、四邊は一層暗くなつた。人々は互に近く依り添はうとして入り亂れた。恐怖と沈默は其處ら隈なく行き渡つた。少し經つとロレンツの聲が聞えた。

「Kyrie eleison」

「Christe eleison エス樣御願ひが御座います」と啜り泣きながらメリーは答へた。

「神樣、在天の父樣、どうぞ吾等の上に惠を垂れ給へ。」

二人は祈禱の句を繰り返した。此の暗い狹い房の中では、老人の聲と涙に妨げられて切れ／＼になる娘の答の言葉とはいとも嚴かに響くのであつた。乘り合ひの或る者は脫帽さへした。次第に娘の啜泣きも止むで來て、二人の聲は一層靜かに明晰になつて來て外に打ち騷ぐ暴風雨は之に伴奏するやうであつた。

怖ろしげな叫び聲が昇降口の傍の群から突然起つた。大きな濤が入口から浸入して來てその房に一杯になつてきた。水は隅々にしぶきの音を立てゝ突き當つた。女達は泣きながら寢臺箱の上に登つた。總ての人はもう最後の時が來たと思はぬものはなかつた。

間もなく一人の船員が手に夜燈をさげて入つて來た。その服からは水が滴り顔は燃ゆるやうであつた。

彼は、水は偶然入つて來たまでゞあると簡單に云つて女達を靜めてから、船は大洋の眞中にあるんだから危險はない事を云ひ足した。

斯くして一二時間過ぎた。暴風雨は尙ほ荒れ狂うて居た。船はきしいだり鳴つたり、滑つたり傾いたりしたが、依然濤の上に乘つて居た。船客の恐れは和らいで、中には眠つて終つた者もあつた。二三時間亦過ぎて暗い房の中までもうすら白い曉の光が格子のはまつた窓を通して漏れて來た。曉は大洋の上に恐ろしい悲しい將た陰氣なやうに蒼白く破れて來た。それでもそれは幾らかの悅び、幾分の希望を齎して來た。ロレンツとメリーは心に記憶えてる限りの祈禱を皆繰り返して終つてから寢臺へ登つて深き眠に陷ちた。

二人は朝食を報知するベルの音に目を覺ました。然し何も喰へなかつた。頭が鉛のやうに重く、老人はメリーよりも一層重かつた。彼の亂れた頭に何も纒つた考が浮べられなか

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つた。自分をアメリカへ渡るやうに誘ふたかの獨逸人は海を超えねばならぬと云つた。けれ共海が斯んなに廣いとは思はなかつた、斯んなに多くの日夜を費して渡るのだとは思はなかつた。よく河を超す時乘るあの渡し船で超えられるのだと思つて居たのだ。海が斯んなに大きいと知つたならリピンツに止まつてる筈であつたのに。尙ほもう一つ他の考が彼を惱まして居た。自分は自分の靈と娘の靈とを地獄へ落しはしなかつたらうか。主なる神樣を試みて海の地獄に自ら進み行き、もはや此處に五日間を費し、尙ほ、全く存在しないのかも知れない對岸を目がけて進んで行くのは、リピンツ出の此の舊敎徒としての自分には罪惡ではなかつたらうか。彼の疑惑と恐怖とは未だ七日の間增大して行かねばならないのだ。

暴風雨は四十八時間荒れ狂うてそして靜まつた。彼とメリーとは再ば甲板へ登る勇氣を得た。けれ共尙ほ黑く怒りて逆卷ける大濤や船を襲ひ來る大なる水の山々、その下の谿底などを眺めた時、二人は神の力か或る他の人間以上の力より外には自分等を此底から救ひ出して呉れる事は能きないのだと亦も思ふのであつた。

漸く嵐は晴れた。日は每日過ぎて行つた。そして二人は只水のみ――或時は綠りに或時

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は青く常に空に接してる果てしなき水のみ——の外には何も見る事は能きなかつた。空には時々少さな美はしい雲が浮んで居て、夕方には赤く輝き、遠く西方に眠らんとする如く横はつて居た。船は水の上から雲を追うて行つた。海はたゞぶん果てがないんだらうとロレンツは全くの所思つたのだ、けれ共思ひ切つて誰かに尋ねて見ようと心に定めた。

或る時彼は通りすがりの一人の水夫に帽子を脱つて低く叩頭をしてから云つた、

「もし貴方樣、私達はもう直き着くのでしやうか。」

その水夫がいゝいゝ吹き出さないで反つて立ち止まつて耳を傾けたのは寧ろ不思議であつた。彼の日に燒けた顏には今云つた事を思ひ起そうとしてる容子がありありと見えた。それから獨逸語で云つた。

「何ですか」

「私達はもう直き着くんですか。」

「二日——二日。」水夫は漸つとポーランド語で斯う云ひながら指を二本出して見せた。

「何うも誠に有難う御座います。」

「貴方がたは何處から來られたのですか」

「リビンツからで御座います。」

「リビンツて何處です」(獨逸語)

話しの半ばに進んで來たメリーは深く顔を赤くして、いとも耻かし氣に見上げながら愼ましげな聲で云つた。

「私達はポーランドから參つたので御座います。」

水夫は沈默つて手摺の眞鍮の釘を眺めて居たが、娘に目を移してその輝ける麻色の髮までも見入つた、その青銅色の顔には心の傾いてる事がありありと讀まれた。少し經つてから彼は眞面目に云つた。

「私はダンジックのものです、ポーランド語は知つて居ますよ、――私はカシュブ族(西部プロシアに移住せしスラブ族の一種)なんだ――昔は貴方がたと同胞だつたのです、今はもう獨逸ですが。」

斯う云つて終つて彼は向ふを向いた、そして綱の端を持ち上げながら水夫のするやうに「ヨーホイ」とかけ聲してそれを引張り初めた。

此時からして彼はロレンツかメリーに遇うと何時でも親しげな樣子をして微笑むのであ

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つた二人は此の獨逸船の中に一人の親切な人を得たのと此旅行ももはや間もなく終るのだといふので非常に嬉しかつた。

次の朝甲板へ登つて行つた時二人の目に妙なものが映つた。水の上に何か浮んでるのを見えた、近附いて見るとそれは波に靜か弄はれてゐる大きな赤い樽だつた。見へる限り遠い所迄も幾つかの樽が浮んでゐた。海と空とは輕い霧をかぶつてゐて、柔かく銀色して見えた。水の面は滑かで靜穩であつて、目の達く限り澤山の樽が認められた。非常に多くの鷗が鳴きながら船について來た。甲板の上は常になく動搖してゐた。水夫等は服を變へて居た、中には甲板を洗つてる者もあつた、眞鍮製のものを磨いてるものもあつた帆柱の頭と船尾とに旗が一つ宛翻つてゐた。

乘組の客は皆嬉しげに元氣附いて見えた。そして甲板へ上つて來た。中には荷物を持ち出して荷作りし初めてる者もあつた。

此んな騷ぎを眺みながらメリーは云つた。

「今に私達は吃度陸へ着くんだわ。」

人々は一層嬉しさうに見えて來た。その內に西の方に砂岬（サンデイーフツク）が見え、家が一つ建つてる

島が現はれ、それから遠くの方に水の上に擴がつてる霧に似た濃い烟の雲のやうなものが漠ッとして形もなく混然として遙かに見えて來た。此景色が目に入ると人々はがや〳〵しだした。皆其方を指さし爲てゐた船のけたゝましい汽笛も悅ばしげに響いた。

「何だらうあれは。」とロレンツは怪しんだ。「紐育(ニューヨーク)です」直ぐ傍に立つて居たカシュユップは答へた。

間もなく霧も烟も晴れて消え去つた。白金のやうな水を突き切つて行く船の後方には家や屋根や烟突などの形が見えた。教會の塔や高く聳えてる建物などは碧い空にくつきりと浮び出て居た。市街の下の方には帆柱の林が見へる、其處には種々な色の旗が澤山、野邊に咲き亂れた花のやうに風になびいて居た。船は益々近附いて來た——美はしい市街は水の上に浮び出した。

ロレンツは包みきれぬ驚きと嬉しさに打たれて、帽子を脫り口を開いたまゝ眺めて居た。それから娘の方に顧みた。

「メリーや」

「エ」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「あれを見てるか。」

「えゝ。」

「驚いたか。」

「驚いたわ。」

ロレンツは驚いたばかりか欲張つてゐた。灣の兩側にある綠の海邊や暗綠色した小高い丘や耕された芝生などを眺めて彼は云ふのであつた。

「惠ある神樣、若しあの人達があの野原と共に街の近くの地を私に與へるのならば、何卒市場に近い地であるやうに、そして私が牛や豚を市場へ追つて行く事が出來ますやうに。此處には澤山の人が居るに異いないのです、ポーランドでは水呑百姓でしたが此處では大地主になる事が出來ますやうに。」

此の時長く伸びたスラーツン島の姿はその總ての美はしさを彼の前に擴げた、其の列樹を眺めると彼は亦云つた。

「私は政府の役人に丁寧に叩頭をしやう。御役人に巧く話し込んで此森の八十エーカーばかりを私の「財產」に御願ひしやう。朝は雇人に材木を持たせて市街へ遣るんだ。神樣有

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

難う御座います、私は今やつとあの獨逸人の云つた事が僞でなかつた事が分りました。」

メリーも矢張り「財産」の事を空想して居た。そして何故だか自分でも分らないのだがリピンツで花嫁が花郎に唱つて聞かせる歌を今思ひ起して居た、此歌の中で女は若い男に私は總で飾られた帽子と刺繡のある上衣を持つて居ますよと語つて居るのである。彼女は此歌を貧しきジョンに向つて歌つてやり度いと思つてるのであらう、何れジョンが到着した時に――自分が金持になつてるときに。

その中に檢疫船が來て四五人の人が上船つて來た。それから亦市街の方から小船が一隻、旅館や下宿屋の客引き、通辯、兩換人鐵道の客引きなどを乘せてやつて來た。そして大騷ぎが初まつた、此の人々等は乘組客の間を押し分け、つき退けるのであつた。ロレンツとメリーは此の渦卷に卷き込まれて、何うしてよいか知らないで居た。

かの親切な水夫カシュシブは老人を助けて金錢を兩換させた。彼はありつたけの貨幣を出して四十七弗の銀貨を得た。此騷ぎの最中に船はだん〳〵街に近附いて來たので街の家々のみならずバッターリー公園に居る人の姿までも見えるやうになつた。船は大小幾多の船の間を通つて漸く埠頭に着いて狹い船渠の中にゆるやかに滑り入つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

彼等の旅行は終りを告げたのである。

――未　完――

（一九一三、四、一〇、）

増田　初譯

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

未來の王國――アナトール・フランス――

それは丁度夜の一時頃であつた。私は床に入る前に窓を開けてシガーに火をつけた、と、ボア・ド・ブーローヌの並木通りを疾走して行く、自働車のブーッと云ふ響が夜の寂莫を破つた。庭園の樹木はその頭を闇黑のうちに振りながら、新らしい夜の空氣を吸つて居る、萬籟寂として虫の音一つ聞えず、空には星がキラ〳〵と輝いて居る。その晩は殊に空氣の澄み渡つて居た加減か、星の光りが極めて綺麗に見えた、大低の星は白熱の光りであるが、中には黃色や橙色の消えかゝつたランプの光りのように見えるのもある、二ツ三ツは青色で特に一つは非常に青白く、非常に透明に非常に柔かみがあつて眼をはなすに忍びなかつた。私はその名前を知らないのが殘念である、が人としてその智識ではとても一つ一つの星に、その眞の名をつける事は、出來ないものであると思つて、私は慰めて居る。私がこれらの星――光りの露が、吾々の世界を照らすのかと思ふと、私は彼等もまた、太陽と同じ樣にその光りを限りなく、哀れなもの、苦しめるものにまで惠みをあたへるであらうか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

どうか、また彼等の苦痛が天の奥底に迄とゞくであらうかどうか、と疑はずには居られない。

吾等は地球上に表はれた人生のみを知つて居るものである、假に吾等の世界が最も不幸なものと想像しても、外の世界が幸福であると云ふ事を信ずる理由は少しもない、これは私自身の運命を他の人の運命と比較して、不幸であると思つて居るから云ふのでは決してない、私は妻や子に煩はされる事はない、また戀愛と病氣とは私を害した事はない、私は勿論金持ちではない、そのかはり私は交際社會にも携はらない、それから世間では不幸なもの〻うちに數へられて居るのである、實際よろこばしい事とては別にないのだ、しかし他の人々の運命はどうであらうか、まことに氣の毒なものではないか。これについては、私は自然にその罪を負はすような事はしない、自然は智識を持つて居ない故に自然と交通する事は出來ぬ。さらばと云つて社會を非難する事もしない、自然と社會とを對抗せしむる事は無意義な事である、人類の社會を人類の自然と對抗せしむるのは、蟻の社會を蟻の自然と對抗せしめ、蝸の社會を蝸の自然と對抗せしむるようなものである。動物の社會は動物自然の必然的產物である。地球はすべての動物が食ふための場所である。即ちハンガーの世界である、そこに住んで居る動物は、自ら食物に飢え從つて殘忍なものである、人

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

間は是等のうち、最智惠はあつても最貪慾である、人類社會の道德の根本は即ち貪慾にある。私がもし文豪になる事が出來たならば、貪慾を讃美した詩を作らうと思つて居る。この說は特に奇拔を衒つて云つたわけでない、旣に道德學者や、經濟學者が幾度も繰り返して云つて居る。要するに貪慾と殘忍とは人生社會の根本である。空中に輝く無數の星の世でもこうしたものであらうか、私の眼に見へるすべての星は、人々にその光りを悉く惠ぐむであらうか。私の頭はこう考へて居るうちに知らず〳〵透明になつて、人生といふ概念は再び私の心に樂しい姿となつた。

私は時として人生は美であると思ふ事もある、何故かといふと、こういふ美といふ點がなければ、どうして吾々はその醜い姿を知る事が出來ようか、また同時に自然は善であると信じなければ、その惡の方面もまた知る事は出來ないから――。

五六分前までモッツワルトのたのしい音樂が空中に漂ふて居た、私の隣には一人のピアニストがをつて、每晚モッツワルトやグルックの曲を奏する、床に入つてもしばらくは、これらの音調が耳に殘つて、私は靑い唐草模樣の中に建つて居る、大理石の寺を見た――。

眼の醒めたのは太陽の輝き渡つて居た眞晝中であつた、私はいつもより早く着物を着て、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

何故こんなに急ぐのかも知らずに、どうして來たか知らない間に大通りへ出てしまつた。ところが驚くべきは、すべて周圍の事情が一變して居た事であつた。私は回想の力を失つて、ボンヤリして居たから、その割合に驚き方が增加しなかつたがその代りいつまでも續いて居て遂には、驚愕のあまり人事不省に陷りはしないかと疑はれた。

要するに外國へでも行つた樣にすべてのものが眼新らしく、且わけのわからない樣なものばかりであつた。昨日まで日々この邊で見た並木街は、跡方もなく消へ失せて、高い灰色の建物の代りに、庭園をめぐらした煉瓦の小屋が並んで居た。私は自分の家がまだその邊に殘つて居るか、どうか、といふ事などは少しも念頭になかつた。がその小屋をよく見ると、變な形をして居てとても、金持が住まつて居る樣には思はれなかつたけれど、繪畫や彫刻や、また美しい陶器でもつて飾られてあつた。汽車も自働車も、普通の車もその邊を往來せず、やがて大きな影が地上に動いて來たので、私は空を見上げると、大きな鳥や驚くべき魚が、上層の空氣を通つて迅速に走つて居るのであつた。セーヌ河の岸に來た時澤山の群集に出遇つたが、何れも體軀が輕そうで立派に見へた。その中に婦人も居たが、長い眞直ぐの脚と、小さな臂を持つて居たので、容易にそれと見わける事が出來なかつた。私が彼等を見て驚いたよりは、彼等が却つて私の方を外國人でも見るように不思議

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

そうに、眺めて居たから、何となく恥しくなつて人の居ない小徑の方へ避けた、そうしたらば直きに、圓形の廣場へ出た、そこには高い柱が立つて居て、赤地に金繡でもつて「歐羅巴聯邦」と表はしてある、大きな旗が飜つて居た。その柱の下には大きな枠のうちに、貼り札がしてあつて、平和の記號、共同の祭日、一致の法律、その他公共事業の統一などがかいてあつた。またその横に飛行機發着の時間表と、氣流圖とがあつて、その印刷の日附を見ると、歐洲國民同盟紀元二百二十年六月二十八日とあつた。その文字は私には珍らしく見へ、容易に理解することが出來なかつた。

私がこれを見て居る間に無數の飛行機がけたゝましい音をたてゝ空中に表はれた、見れば舵や推進機で飛んで行く飛行機の後は、白煙濛々として太陽も見へない程であつた。やうやく太陽が現れた時、その高度から推測すれば、午前十時頃であらうと思はれた。突然また前に見たと同じ容貌と同じ衣裝の男女の群に取圍まれた。女は肥つたのも瘠せたのもあり、大多數の者は汚い樣子をして居たが、なべて男女兩性の者の樣な容貌をして居た。彼等はすべて或工場の職工らしい、この群が通り過ぎると、また一としきり廣場は靜寂になつた、私は貼り札の前に一人殘つて今一と度日附を讀んだ――。歐洲同盟紀元二百二十年六月二十八日――、何の意味であらうか、更によく見ると同盟の委員が大祭日に當つての

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

宣言が書いてあるのであつた。曰く

我等同胞よ、汝等は二十世紀の末年に於て舊時代の文物制度が、恐ろしき大洪水のために破壞し盡されて、五十年の無政府狀態のあとに於いて、歐洲人民の同盟が成立した事を記憶するのであらう。

これで見ると歐洲同盟の二百二十年といふのは、基督紀元二千二百七十年である事がわかつた。どうして私は突然二千二百七十年の時代に移されたのであらうか？

私はブラ〱歩きながら、この事を考へた、私はフーガ大佐のように木伊乃になつて、そんなに永く保存されたのであらうか、またはウヰリアム●モーリスのように、寢て居る間に三世紀半も飛び越したのであらうか、人は夢を見て居るうちは、それが夢であると覺らないように、私は寢て居た事さへも知らなかつた。

こんな事を考へて居る間に、私は兩側にいろ〱の形をした小さな桃色の家が並んで居る街へ來た。所々に鋼鐵で作られた、大きな圓形の興行場のようなものもあつた。時々空中を走る飛行機の音に頭をかき亂されながら歩いて行くと、灌木の叢や、小川のある牧場へ出た。そこには澤山の牝牛が飼はれてあつた、私がこの清新な景色に見惚れて居ると、電光のようなものが、滑らかな眞ッ直の道をかすめて行つた。と思ふと旋風のように私の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

頰を煽つたものがあつたので、それは自働車であるといふ事がわかつた。あまりの高速度に車の形が見へなかつたのである。

それから私は小橋を渡つて、小さな牧場や森を通つて廣々とした野原へ出た。するとピカ〳〵光つた建物の前面を見た、それは彫刻や繪畫でもつて綺麗に飾られて居た。張出窓（ベーウヰンドー）の硝を透して見たら、多數の男女が立派な長い部屋の中で、美しく彩色した陶器の澤山列んで居る、長い大理石の机の周圍に居た。一見して料理店であると思つて這入ろうとした、私はまだ空腹を感じて居なかつたけれども、疲れて來た上に室内が凉しそうで、果物が美味そうに飾られてあつたので、とう〳〵這入る氣になつた。すると門口に立つて居る番人が證書を見せよと云つた。私の困つて居るのを見て、彼れは云つた。

我が友よ。汝はこの組合の人ではない、どうして證書なしに旅行して居るのか、甚だ氣の毒ではあるが汝を入れることは出來ない、これから行つて誰か旅人を雇ふ人を探がさねばならぬ、もしまた身體が弱くて働けなければ、貧民を救助する世話人に頼んだらよいだろう。

私は決して仕事が出來ない事はないと云つて去ろうとしたら、その近くに居た肥つた男が、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

友よ汝は旅人を雇ふ人を求める必要はない、自分はこの區にあるパン燒き場の特派員であるが、一人職人が必要だから一所に來給へ、すぐ仕事に就かしてやるから。

と云つた。私はこの肥つた人に感謝して、自分はパン燒きでは無いけれども、大に希望して居ると答へた。すると彼は驚いたような風をして、私が戲談を云つてるのだと云つた。兎に角私は彼れの後に從いて行つたら、やがて大きな鑄鐵製の建物の前へ來た、その建物の破風の上に大きな銅像が二つ立てられてあつた、その一つは種蒔で、今一つは刈手である、その軀幹は筋骨逞しく顏には平和の光が輝いて、頭を高くあげて居る。室に入ると天井の高さは四十メートル以上もあつて、白塵濛々たる裡に機械は響を立てゝ運轉して居る、圓天井の室の中には、澤山の袋がナイフで切られて、粉末が大槽の中に落ち込むと、鋼鐵の槓杆が、これをかき廻し、生パンが出來るとそれを型に入れて、非常に迅速にトンネルのような深い釜(クーフン)の中に入れる。五六人の人は靜かに機械の運轉を監督して居る。彼が云ふには

これは舊式のパン燒機械であるから、僅か一日に八萬ローフしか燒けないのである、その上機械が惡いから人手を澤山に要する、がそんな事は別として、荷物の着く所を見せてやろう。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と間もなく二人は昇降器によつて高い臺の上に上げられた。すぐにまた鯨のような飛行船が、自分等の傍に止まつて、澤山の袋を卸した。見れば不思議にも一人の人間もこの機械の上に居らず、その次に來た飛行船も、一層澤山の荷物を卸したけれども、矢張り人は居なかつた。スクリニーは回轉し、舵も自然に働いて居る、遠くの方に蜂のようなものが見えると思ふと、すぐ非常な速力で飛行船が來る。自分には機械の事が解からぬからも故障でも起つたら、如何な椿事が出來するだろうかと思つて震ひ出した、五六度下へ降り度と云つて見ようかと思ひながら心にもない名譽心のために差し控へて居た。太陽が地平線に沒してしまつた頃にやつと先きの昇降器が迎ひに來てくれた。いよ／＼其日の仕事が終つて、私は下宿屋へ行く證書を貰つた。すると例の男が云ふ

汝は飢へて居るに相違ない、欲しければ公の食卓で晩飯を取つてもよい、もし自分の室で一人きり食ひたければ、そうしてもよろしい、自分は汝の一日分の定糧を配達させるように電話をかけてやろう、こう云ふことを一々話すのは汝を氣樂にさせやうと思ふからである、汝は水に離れた魚のように萎れて居るではないか、多分遠方から來たのであろう、自分一人の始末さへ出來かねるようだ。今日汝の仕事は、容易かつた、しかし人間一人の生活費は毎日そんなに容易く儲かるものではない、もし飛行船を動かすZ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

光線の工合が惡くなれば、汝の仕事は隨分骨が折れるであろう。一體汝は何處から來たのか。

とこう云ふ質問に會つた私は非常に困つて眞の事を述べることは出來なかつた。私が曾て市民であつて二十世紀の者であつたなど丶云ふならば、彼は狂人であると思ふであろう。私は漠然困つた樣な樣子をして、私は無職業で非常に遠方から來た者だ、と答へた。すると彼れが笑つて云ふには、

解つた。解つた。汝は自分から云ひ出す事が出來ないのであろう、汝は慥かにアフリカの合衆國から來たのに違ひあるまい、汝は吾々から脫走した歐洲人でもない、これらの脫走者は大抵戾つて來てしまつたから。

私はこれには一言も答へなかつた、で彼はその想像が當つて居るものと信じた。それで彼は晚飯に招待すると云つて、更に私の名を尋ねた、私は通稱、ヒポリテ・デユフレーヌと呼ぶ者だと答へたら彼は私が二つの名前を持つて居ることを驚いたように見へた。彼はまた自分の名前を、ミシエルヤ・と云ふのだと告げて暫くの間私の麥藁帽や、私のジヤケツ、私の靴、その他私の衣服などを眺めて居てから

ヒポリテよ。私は汝が何處から來たかを知つた。汝は黑人の國に住んで居た事があろ

う、今日ではそこにザルスと、バストウとが住まつて居て、非常に粗末な織物を製造したり、衣服のスタイルを非常に奇妙にしたり、見苦しい履物を穿いたり、リンネルを洗つて糊をつけたりして居る。また髭（ウハヒゲ）と頰髯とを殘して鬚（アゴヒゲ）を剪る風習がある、これらは文身の遺習から來たものであつてその野蠻の程度は三四百年前のフランスに酷似して居る

と云つた。私はミシエルの招待に應ずることゝした。彼はまた

自分はこゝから程近いサローヌと云ふ處に住まつて居る、私の飛行機は隨分早く飛ぶ故に直ちにそこへ行く事が出來る、

と云つて、彼は大きな鳥のような機械の腹の下に私の席を取らした。そして息も出來ない程早く空中を飛んで行つた。上から見降すと田舍の景色は曾て私の知つて居たのとは大變に違つて居た、すべての道路の兩側には多くの家が立ち並んで、無數の運河が銀の糸のように畑の間を交錯して居る。私が驚嘆の眼を見はつて居た時、彼は

此邊の土地は十分に開墾し盡されて、耕作がよく行き屆いて居る。化學者が農業家になつて居るから大に金力を盡して、過去三百年の間改良を施したのである。今日物産の多いのは、科學の進歩があづかつて力ありと云はねばならぬ。商人や番頭はなくなつて、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

或物は工場に、一部は畑に出てしまふようになつた。」
「何ですか、都會が壓迫されたといふのですか。巴里はどうなりました。」
「最早殆そこに住んで居るものはなくなつた。最後の市民達が住つて居たところの罪惡に充ちた家は、悉く壞倒されて今なほ舊に復さない、だから最後に建てた家主は、大いなる損害を被つたのである、僕等は都合のよい建物を買つて博物館や圖書館が出來て、大に教化の助けとなつて居る、また巴里廳の遺物も買つたけれども、それは見苦しくて碎け易いものであつた。が只その構内には種々なものが作られてあつた、吾々は商業を止めてしまつたので町の必要は少しもない、それでも人口の密度は處々によつて厚薄があつて交通機關の發達した今日、採鑛冶金の中心地が最も人口に富んで居る、それからまた商業を止めてからは裁判所も軍隊も癈しになつた。」
「何と云ふのですか、裁判所も軍隊も癈せられたんですつて？それならばどうして、犯罪と不德義とを押へる事が出來るのでせう。」
「犯罪は舊式の不愉快な道德の行はれて居る間に行はれるものである、しかし犯罪の數は、近來貧民の數と相供つて減少した、以前には大都會の周圍が犯罪の孵化物であつたが、今ではもうそう云ふ大都會と云ふものもなくなつた。無線電信が晝夜を問はず、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

道路を安全にして居る、吾々はすべて電氣仕掛けの防禦物を持つて居る。不德義な事件も被告の邪惡よりは、寧ろ裁判官に信用のなくなつた事に原因するものである、今では法律家もなければ裁判官もなく、市民が交る〴〵これを務めて届るようになつて却つて減少した。」

こう云ふ調子でミシエルは飛行機を操縦しながら議論をした。私は出來る丈正確にこれを筆記しようと思つたが、彼の言葉は非常に早口で、單語に珍らしい言があつたので、片ッぱしから忘れて行つてしまつたのを殘念に思ふ。（未完）

——四月十六日行——

淺野友譯

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

銀笛の悲しみ

――人見　直――

一

長い穂を垂れて黄白色の胡桃(くるみ)の花が、ほのかに咲く頃となりました。其の房の垂れた花穂は、輝やかに晴れ渡つた大空の碧りに、見果てぬ夢を見て居るやうに、ゆらゆらと或る時は微かに搖れ動いて居るのでした。

朝になると秀子は女中の高と一共にきつと少年を誘ひに來るのでした。

「久雄さん、學校へ行かないこと？」

すると久雄はもうさつきから石盤と讀本の一の巻とを入れたヅックの鞄を肩にかけて待つて居るのでしたから、自分の名を呼ばれると急いで玄關の方へ飛び出すのでありました。

新らしい帽子の徽章が強い初夏の日にキラキラと眩しく輝くのであります。そうして赤い大きなリボンを、よく西洋の少女がするやうに両方へ分けた髪の毛に結んだ可愛らしい

頭と、新らしい金色の徽章がキラキラと輝く帽子を被つた少年の勇ましい頭とが、互に、或る時は摺れ合ふばかりに寄つたり、或る時は又一共に右の方へ動いたりして行くのを、後から二人の女中が可笑しそうに見ながら追いて行くのでした。

赤いリボンは、ぱつと目を開いてよろこばしそうに初夏の空を仰いで咲いて居る金蓮花の燃ゆるやうな明るい花瓣のやうに、少女の髪の毛に一つぱいになつて風に動いて居るのです。

少年は學校へ行つて、昔て繪本で見た加藤清正のやうに顎髭を長く生やした校長先生から修身のお話を聞くのは厭で堪まらないのだけれども、休み時間が來た時に運動場へ出て上からうす紫の桐の花がほろほろほろろと涙のやうに落ちて來る桐の幹に凭りかゝつて他の仲間が陣取りや鬼ごつこをしたりして面白そうに騒いでゐる喧しい聲から離れて、うつとりと憬れるやうな優しい目付をして、秀子の薔薇色をした匂やかな唇から神秘な物語の流れ出るのに、一心になつて聞き惚れるのが樂しみだつたのです。

久雄は其の恐ろしきまでに不思議な物語の中に出て來る、星のやうに美はしい輝やかな王妃や、七人の王姫を七羽の白鳥に化けさせてしまふ魔法使の老婆や、黄金の指環の呪ひ、神秘な災禍と奇怪な虐殺とが永遠に人の上に起る戰慄すべき運命やを幼な心に色々と思ひ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

見るのでありました。

恁う云ふ物語に聞き倦きた時は持つて來た美しい彩色をした繪本をひろげて、二人は顔と顔とをすり寄せてじつと見入るのであります。

軈て鈴(ベル)が鳴ると、二人は又教室へ列を組んで行かなければなりませんでした。そうすると今度は優しい女の眼鏡をかけた先生から、唱歌を教へられるのでありました。

唱歌が濟むと少年は又鞄を肩へかけて秀子と一共に桐の花のうす紫に咲いて居る運動場のある學校の大きな黒門を、どやどやと我れ勝ちに先を爭つて出て來る大勢の生徒に離つて出て來るのです。陣取りや鬼ごつこの激しい爭ひのために、新らしい袴には綻びを切つたり、または肩揚げを下ろしたりした同じ仲間の者が着物の前がはだけたり、帶の緩んだために袴が引きずつたりするのも構はずに、三人五人と一塊りになつて彼方でも此方でも大きな聲を出して今日の陣取りに敵の大將を轉がしてやつたことを騒しく言ひ誇りながら歸つて行くのを少年は別に羨ましいとも考へなつたのでした。

斯うして二人は何時も、亂暴で惡戯な仲間の者達とは離れて、運動場の桐の木の下に來ると、彼のなつかしいうす紫の可愛らしい花が落ちて來るのを拾ひ取つては靜かに繪本を廣げて見たり、又は秀子の物語りに聞き惚れるのでありました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

少女は實際物語りが巧みでした。

甘き蕋の香に染み濡れた唇を開いては東明時を啼く鶯の小頸を傾げた其の愛らしい姿にも似て、少女はあどけなく色々の表情を少年にして見せて、晝のやうな物語をして聞かせるのが常でありました。

それだから二人は、好く恁麼ことを言つて揶揄はれるのでした。

　をそことをんなと、まあめ入り——

　熱つても、熱つても、熱れ切れない………

少年は何と言はれても默つてゐるのでした。其れ程或は臆病で意氣地が無かつたのかも知れません。けれども其の亂暴な惡戯な仲間のうちにも久雄と氣の合つた親しい友達が一人あつたのです。山田榮之助と云つて久雄よりは一つ年上の色の白いをとなしい子でした。學校では上級の者から「役者」と云つて揄揶はれる程骨組みの柔らかな子でした。

時々久雄の家に遊びに來ました。而して二人が繪双紙にも見倦きると、何時も風琴を取り出して鳴らして見たり、銀笛を吹いて見たりするのでした。………

久雄は赤ん坊の時から音樂が非常に好きだつたそうです。どんなに劇しく泣いて居る時でも、例へば桐の花が水のやうに澄んだ夕暮の空氣の中にくるくると飜り散るほのかな音

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のやうに、或は又、櫻草のうす赤い花びらがそよそよと風に動いてゐるやうな幽かな微妙な樂器の音を聞くと直ぐに泣き止むでしまふ程だつたと云ふことです。それだから秀子の姉がピアノを彈いて居る時などは、何時までもいつまでも彼女の側にじつと立つて、消え行く甘い悲しみを誘ふ柔らかな音に籠もる美しい夢を追ふやうな、うつとりとした目なざしで、白い五ひらの花のやうな女の指が嫋やかに鍵盤の上に翻るのを見惚れて居るのでした。或る時は非常に麗はしい肉感的魔力をもつた聲で彼女は歌ふこともありました。その聲を聞いて居ると身の震へるやうな甘い悲しみの中に連れて行かれて、わけもなく胸の躍ることがありました。而して少年の目には只薔薇色薄い光りが四邊に漲つてゐるやうで何とも言へぬ氣懈い匂やかな微笑に包まれて居るやうに思はれるのでした。

「久雄さん、あなた彈いてごらんなさいな」

彼女はやがて恁う云ふのでした。久雄は未だ心の震へが靜まらぬ程感激して居るのです。

「僕!、彈けないの」

「あら!うそばかり」

「だつて僕ね、ピアノ彈いたことないんだもの」

「………風琴や銀笛なら僕出來るんだけれど」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

少年はピアノが彈けないといつたのが何といふことなしに耻しくなつたので、恁う云ふ可愛らしい言ひわけをするのでした。

「それではね、敎へて上げませう……私の前にいらしやいな」

少年は腰をかけてゐる彼女の前に立ちました。直ぐ目の前には蠟?蠟?のやうな白い滑らかな鍵盤が長く續いてゐるのが映りました。柔らかな温かいエリオトロープの香ひが少年の頰に觸れる髪の毛の甘い纏はるやうな香に交つてうつとしい迄に執拗くするのでした。そればかりではありません。久雄の左の頰には温かい、例へば爛熟した水密桃のやうに柔らかな快い女の頰が、もうそれきり離れそうもない程强く觸れてゐるのでありました。

少年は輕い眩暈を覺えるまでに其の氣懈い甘い何とも云ひやうのない女の香にのぼせてしまうのでありました。

「ドナウ河の漣の此れは初めの方……ピアノではこれが一番やさしいのよ」

二三度繰り返して敎へられて居る間に久雄は其の曲をすつかり覺えてしまつて、今ではもう樂に彈けるやうなつてしまひました。鋭敏なデリケートな少年の樂器に對する官能は例へば佛蘭西表象派の明星アルチユウル●ラムボウが母韻の色を歌つたやうに、其の白い滑らかな鍵盤を敲く時、それから流れ出る幻想的な音色に奇怪な戰慄を感ずる程我自ら醉つ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

てしまふのでありました。……

山田と久雄とは度々往來するやうになりました。さう云ふ風でありますから從つて又秀子とも山田は直ぐ親しくなつて了ひました。風琴を弾いたり、銀笛を吹いたり、繪双紙を見たりして其れに倦きると、二人は何時でも秀子の家へ遊びに出かけるのでした。わざわざ遠路をして來て山田が久雄の家へ誘ひに來る朝などがあつた位二人は親しくなつて居ました。

三人はさうして一年を過しました。——

二

——をいらの指は
かあなゆび
とげげのゆびは
腐れゆび

それはもう無花果の實が頭の少し割れる位に熟した頃のことなんです。

教會の煉瓦に凭りかゝつて久雄の吹く銀笛の音に今迄聞き惚れてゐた榮之助と秀子とは

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

目の前の無花果の木の枝に其の枝の色と同じ灰色をした醜い蜥蜴を見付け出すと、夢から醒めたやうに傒ふ歌ふのでした。

日はとうに沈んでしまつたけれども、四邊は未だ明るく、眞綿のやうな柔らかな夕暮の空氣の中に溶けて行つた銀笛の水のやうな、うす青い悲しい音を惜しむやうな目なざしで久雄は未だ恍惚としてゐるのでした。

「久雄さん、とかげ……」

「何處に？」

「ほら、彼の右の方の枝に」

灰色の醜いとかげは何時までもじつとして一つ所に居るのでした。けれども、ぎろぎろとうす光つた目が異様に動いて居るやうに見えるのです。それは何か恐ろしい氣味の惡い事を、窃にたくらんで居るやうです。

「僕には、まだ分らない」

久雄は二三歩前へ歩み出ました。

「ほら、あの右の方の下の枝に」

「まだ分らないこと？」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「あ――彼所の……」

と言ひながら久雄は手を擧げて指さしました。其處には、とかげが吸い付いた樣にじつとして居るのが二つも見えます。

「あら、久雄さんは指さして……その指が腐つてしまつてよ」

――をいらの指は

かあな指、

とかけのゆびは

くされゆび

聲を合せて三人は歌ひました。歌ひ終ると三人は各自に、兩手の拇指と人差指とで圓い輪を作つて其れを唇のところへ持つて行くと唾を二三度其の輪から地上に吐きかけました。何でもそうしさへすれば、とかげを指さした指の腐らない禁厭になるのだと、榮之助から久雄は敎へられたからなんです。

「とかげに吸ひ付かれると、もう鷄の啼くまで離れないんだつてね、久雄さん」

「そしてね人間の赤い血をみんな吸ひ取つてしまうんだつて、僕ちやんと聞いて知つてるの」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

四周は杏色をして、ほのかな悲しみを誘ふ程にうらびれて暮れて行くのです。

久雄は又銀笛を吹きはじめました。……

消えて行く銀笛のうす青い音のおのゝきに幼き頃のあまたの夢は一時に立ち返り、夕闇は眼を閉ぢて其れを聞いて居るのでした。

胡桃の實が風に落ちる頃となりました。

朝晴れの秋風に落ちる桃胡の實は、まるで石のやうです。

大きな其の實の落ちる音に二人はよく驚かされました。落ちて砕けた青い實に朝の日は稍黄ろく見ゆるまでに明るく泌み入るのでした。

久雄は銀笛を持つて、秀子と此の樹の下に來て居るのでした。圓味を帯びた秋の空は碧りの深いうるほひのある色をして、それは例へば少年の携へた銀笛から流れ出るなつかしい音を思はせるのであります。

少年は唇に銀笛をあて聽て吹き初めやうとした。

其の時教會からは、朝の禮拜に集つた人々の輝きに滿ちた若々しい聲で、神秘なる教訓のために慘ましい十字架の死を遂げたといふいとも美しき傳說をもつた異國の神を讃ずる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

歌が聞えるのでありました。

少年の心は俄に震へ、目は異様に輝きました。

生々したあの赤い煉瓦の色は、十字架に流したメッサイアのどろどろした血を思はせるのです。やがて、會堂の重い扉を開けて俯向きながら、花崗岩の白い石段を靜かに下りて來る男女の群は、振り向くものもなく默して何處ともなく散つて行くのでありました。然かも靈あつて永遠の沈默に返つたやうに見える敎會の重い扉の中から出て行く多くの男女は、總て冷たい黑い影に包まれて居るやうです。こうして誰も振り返つて見る者もなく消えるやうに散つて行く人々の後姿を少年と少女とは、如何ばかり奇異の眼を見はつて見送つたことであらう。

「久雄さん、あなた敎會へ行つたことあつて?」

「耶蘇敎なんか、僕行つたこと無い」

「わたし何時か、お姉さんと一共に行つたことがあつてよ」

「何しに行つたの?」

「神樣を拜みに行つたんだわ、そうしてね讃美歌を歌つてよ」

「あの敎會に來る黑い服を着た女の異人さんね、あれは魔法使だつて、久雄さん」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「魔法使つてね、何だか知つてゐること?」

秀子は悵う重ねて聞くのでした。けれども少年は只此の新らしい不思議な物語りを怖れに戰へて聞いて居るのでありました。そして怪しい此の微かな疑惑をさへ変へた恐怖のこゝろは、少年の眼に樣々の幻影を見せたのでした。――

其れはあかあかと照る爛れたやうな夕日の中に血だらけになつて立つて居る異樣な敎會堂の死んだ人の目ぶたのやうな冷たい重たい扉を開けて吸はれる入るやうに這入つて行く黒い服を着たあの女異人の凄い眼の色です。そして其の胸に冷たく光つてゐる銀色の十字架であります。

それは又、星もない盲目のやうな夜に見た――其の敎會堂の奥の演壇に跪いて熱心に祈禱して居る黒い人の影であります。その跪いたまゝ何時迄もいつまでも、身動ぎもしない黒い人の影――とろとろと側に、燃えて居る蠟燭の火は、傷いて蜒うち廻つてゐる蝮の赤い舌のやうに夜ははげしく闇を嚙むで居るのでした。また或る時は啜り泣くやうに蠟の火が黒い人の影の方へ搖れ動くこともありました。………

少年はもう一度敎會の方を見ました。

高い尖塔には烏が止つてゐました。靜かに耳を澄ますと、そこからさつきの讃美歌が聞

えて來るやうです。絶え間に響くどす黒い濁つたオルガンの音も重たく聞えて來るやうに思はれるのでした。窓の側の無花果も今はいたましく裸になつてゐます。

——黄ばめる障子の紙を見るに馴らされて居る少年の幼い眼には教會の縹色した窓掛が美しく寧ろ奇異に映たのはあたりまへのことです。そればかりではありません。板と紙とで出來た家ばかりを見て居る少年の眼に、教會の高い尖塔が暗らく心を威壓する樣に見えたのも不思議はないのです。既に教會と云ふ微かながら冷たい怖れを誘ふ暗らい陰欝な心持のされる特種のスペクタルに對して、幼い少年の眠れるやうな無智な心の目が殆ど病的に秘密な空想の刺激に會つて、偏頗な發達をして行くのでありました。それ故に少年は其の建物の重い扉を音もなく開けて、首垂れながら這つて行く青ざめた顏の女を見て怪しみつゝも恐れたのであります。黒い服を着た女異人の胸に冷たく光れる十字架を見て魔法使の道具のやうに思つたのは別に不思議ではありません。

水を含むだ花瓣を重ねたやうにしつとりとした仄かな春の空も丁度少年には此の高い尖塔のある教會の邊りから、哀しく暮れて行くやうに思はれたのです。其の時に——赤い煉瓦の上に脉うつやうに冷たい黒い夜の色が這つて行く時に、教會は飢え渇いたやうな何とも言ひやうのない笑を浮べて居るやうでした。それは例へば、死や神秘やそれから彼のフ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

アンデルデッケンの黒い呪咀やを湛えたやうな奇怪な笑のやうに思はれたのでありました。

恁うして春の日は暮れて行つて、神秘なるカアテンの如く閉されてしまふのであるけれども、聽て花の咲くやうに暗綠色の空には星の光りが輝き出して、神の不思議は冷たい黒い夜の色と共に消えて行つてはしまはないのです。

自分一人の胸に秘めて誰にも話すことの出來ない樣な遣瀨ないいぢらしい悲しみに、うるみ疲れて寢もやらぬ少女の瞳のやうな星の瞬く下に、何を思つてか、又何の爲にか、敎會の尖塔は黒く沈默してゐるのです。沈默して居るやうではありますけれど、然し敎會の尖塔は恰も「哲學」や「科學」やを冷笑して居るやうに見えるんです。

例へニイチエが七冊の『ツアラトウストラ』を書いても「神」の神秘と不可思議は哲學に依つては最後の解決は與へられはしないのだと冷笑して居るやうなんです。さうかと思ふと、又「後のシムボリズム」の漂浪兒ヴエルレエヌが三度ゴリユセルの牢獄に繫るゝやうなことがあつても、トルストイの滿足するやうな意思の强い頑迷な基督敎信者にはなれはしなかつたであらうといふことを悲しみ嘆いてゐるやうに見えることもありました。

恐らく神の不思議と神秘とは、只其れに對する秘密な憧憬と狂熱とさへあれば、其れで

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

もう幸福なので其れ以上に其の憧憬と滿足とに向つて冷たい針のやうな疑問を放つには、此の世の短き夢の生活を故らに自ら破壞するものであると云ふことを暗示して居るやうでもあります。

或時は何事か暗示するやうでもあり、又或時は深い沈默に陷つてゐるやうでもある尖塔も、いつか曙の薔薇色の光りが、重苦しき夜の惱みに疲れ果てた空に、匂やかな接吻を與へる時、靜かに目醒め、軈て金色の光り雨と降りそゝぐ中に、新らしき希望のほのめきを示すのでありました。そして永遠の神の榮光を讃美して居るやうであります。

少年の目には恁うして春の曙は、敎會のあたりから明けて行くやうに映つたのでありました。暗くそして美しき迄に奇怪なイリユウジョンは櫻草の花の觸れなば消えもしそうな靜かな優しい其の薄赤い花びらのやうな少年の心に、樣々と閃めいて、自分の知つてゐる以外の恐ろしい、顫へ戰くやうな敎會のアトモスフヒアを造り上げるのでありました。

三

胡桃の花は、それから三度長い穗を垂れて咲き、三度散りました。――

もう其の時分には、久雄と一共に風琴を彈いたり、足を投げ出して繪双紙を廣げて眺め

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たりして他愛も無く遊び樂しむだ少年榮之助は居なくなつて居ました。學校の廣い運動場には細かな砂利がいつぱいに敷かれてしまつてゐました。而して其の運動場の周圍にあつた桐の木は今は九本になつてしひました。枯れて倒れたのか、或は又伐り採られたのか、知つて居る者は極めて僅かでありました。

跡に殘つた切株には、慘しくも砂利が打ち込まれてあつたりして、さんざんに悩み傷いて居るのです。誰もかまつてくれないのを悲しむ如く、あゝあのうす紫の花が、ほろゝほろゝと涙のやうに上から落ちて來る下に立つて、頰と頰とをぴつたりと寄せて美しい彩色をした繪双紙を見たり、ある時は又秀子の物語りに聞き惚れたりした頃のことを今は夢見ることも出來ないやうに、切株は傷いて居るのでした。

少年は、自分が凭りかゝりながら不思議な秀子の物語にうつとりとなつたのは此の桐の木であつたかつ知れないと思ひました。……

――休み時間に、久雄は一人で其の切株のところへ來て、去りかでに佇んで居るのでした。

「僕も君のやうに銀笛が吹けるといゝが……」恁ふ云つたのは、あの榮之助だつたのです。

雨あがりの美しい灯ともし頃を、誘ひに來た其の色の白い少年と、久雄はそつと家を拔け出して、氷川神社の大祭の神樂を見に行つた時――人ごみの中に二人が行きはぐれて了つた佗しさ、うら悲しさに泣きながら家へ歸つて來たことなどを思ひ出しました。

敎會の赤い煉瓦に凭りかゝつて、靜かな水のやうに澄んだ夕暮の空氣の中へ、うす靑く震へながら消えて行く銀笛の音に、聲を合せて歌を歌つた少年榮之助は、もう廣島へ行つてしまつたんです。

「久雄さん、僕、この花大好きす」

うす紫の優しい涙のやうに脆い桐の花を拾ひ取つて、悉う云つた榮之助の母は繼母であつたと云ふことを久雄は後で知つたのでした。

少年は赤い椿の花を拾ひに呼びに來てくれたり、祭りの太鼓の音に軒提燈の紅い灯を見に行くに誘つてくれたりする遊び友達の榮之助が居なくなつてしまつたといふことは、どんなに哀しく情ないか分りはしないのだけれども、斯うしてあの時分の幼い美しい夢を育むで呉れた桐の木のだんだん伐り採られて行つてしまふのが、もつと哀しく情けないのです。

久雄は何時までも其處へ立つて居ました。そうして色々のことを考へました。……

桃や躑躅や櫻や、さう云ふあらゆる木が、冬の長い眠りから醒めて、女の乳のやうな柔らか春の日に、そよそよと吹くやさしい風に小兒の心のやうに活々とした新らしい若芽をふく頃であるにもかゝはらず、此の切株の桐ばかりは、ふくらとした薄紫の若芽も萌え出でず、いぢらしくも惱み傷いて居るではありませんか。あゝすべての若葉は、やさしい春の日の光りに、口に出しては言はれない——たゞ跪いて感謝したい樣な歡喜をもつて萌え出やうと云ふに、此の桐ばかりは、その切株に砂利などが無慘にも打ち込まれてあるのを見て、少年は何で涙を流さずに居られませう。

けれども、けれども彼のまる味を帶びた女の額のやうに美しい靑空は、猶夢を見て居るやうです。夢見て幻を追ふて居るやうです。

丁度其所へ秀子が來たのでした。秀子も慘しいその切株を見ると、

「誰が態麽に砂利を入れたのでせう、可愛そうに……」

二人は只何物を見ても、惜しみ悲しむ、其のみづみづしい惱める薔薇のやうに優しいうるほひに溢れた純な心から、どんなに此の木の姿を見て哀れむだであらう。

「もう此の桐は芽を出さないでせうか」

態うして二人が皆から離れて、樂しく話をして居る處へ、四五人の一塊りになつた意地

の悪い同級の生徒が又やつて來ました。二人の側に寄つて來ると、狡猾な眼をして、わざ〳〵と二人の顔を覗き込みました。

「をい、荻原、お前女だらう？」

と、其の中で一番亂暴さうな中村といふ經師屋の子が、意地の惡い笑を浮べながら揶揄ひ出しました。久雄は「女だらう」と言はれる位奇麗な色の白い美少年だつたのです。

「僕う女ぢやないよ」

「嘘云へ、女だい」

「どうして僕が女なの、其れを言つて見たまへ」

久雄は少し憤然として鈴しい目を輝かせました。

「そんなら赤裸になつて見せろ」

少年は默つて唇を震はしました。

「やあい、女だから赤裸になれないだらう」

他の三四人も一齊にどつと噺し立てました。其處へ其の噺し聲を聞きつけて三四人づゝ駈けて來るのでした。而して

「どうしたんだい？」

「何？」

と口々に好奇の目を見はりながら久雄と秀子を取り巻いて言ひ騷ぎました。

「あのね、萩原は女だから、今……」

と中村が皆に言つて聞かせると後から來た六七人も口を併せて

「あゝ始終女と遊んでるから……女だ」

「女だい」

と罵りました。

「馬鹿言ひたまへ、僕は女ぢやないよ」

少年は最早聲が憤りに震へて出ないのです。そして目には涙が浮んでゐるのでした。秀子は、けれども、其處へ泣きくづれてしまふのでした。

鈴が鳴り出しました。次の學課の始まるしらせです。久雄と秀子を取り圍んで居た者は皆彼方へ駈け出して行きました。少年は未だ動きません。涙は止め度もなく頰を傳ふて落ちるのでした。

其の日、二人は別々に學校を出て家に歸りました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

少年は何と云ふことも無く秀子が憎らしくてならなかつたのでした。秀子が學校の行きに誘ひに來て呉れさへしなければ、又休み時間に自分が獨りで桐の木に凭りかゝつて、寂しく死んだ弟のことなど考へてゐる所へ來て繪のやうな美しい物語りをして聞かせさへしなければ、皆から嘲けられないでも濟んだやうに思はれて仕方がないんです。折角自分が獨りで、銀笛の樂譜のやうに薄紫の桐の花が落ちて來るのを見て、家へ歸れば彼の笛を自由に吹くことが出來るのだとうつとりとなつてゐるところへ秀子が來て、色々の話をしかけたりするから女だと云つて揶揄はれるんだ、もう今日から一共に遊ぶものか。いくら明日學校の行きに誘ひに來ても一共に行つてやるものか。秀子の家へも遊びには行かない……少年は斯う考へると、何だかうすら淋しい氣持になるんでした。

少年は二三日秀子の家へ遊びに行きませんでした。學校から歸ると新らしく覺えた譜を銀笛で吹いて見たり、祖母さんの大切にしてゐる古い役者の似顔繪をそつと出して見たりして居ました。けれども其れにも厭きてしまふと、靜かな春の日に消える樣な淡い哀愁を誘はれて、もう堪まらなく自分がさみしくなつて來て、秀子の家へ遊びに行かうかしらと思ふのでありました。學校で遊びさへしなければ秀子の家へ遊びに行つても、きつと友達には知れる筈がない。そして秀子の家へ行けばピアノも彈けるし、繪双紙も澤山見ること

が出來る、いつそのこと是から行かうかしら……少年は色々と迷ひ躊躇ひました。

自分にも秀子のやうに優しい美しい姉があればいゝんだが、さうすれば一共に歌を歌ふことも出來るし、ピアノも敎へて貰ふことも出來るし、始終姉の側に居て色々の物語を聞くことも出來るんだが……是から秀子の家へ行つて、あの姉さんの懷に顏を埋めて思ふさま泣いて見たい氣持がされてならないのでした。

久雄は學校へ行つても休み時間を誰も居ない藤棚の下に來たりそして、一人で淋しくして居るのでした。藤棚の下を出ると、鳥の影も見えない深い色をした綠りの空が目になつかしく映るのでした。少年はわけも無く小さな胸を躍らせました。そして吸はれ入るやうに其の空を見つめて居るでした。ふと其の空の奧の方で靜かななつかしい迄に優しい女の目がにつと少年に向つて微笑んだ樣に思はれました。それは秀子の姉の目のやうでした。

——少年は自分の目を怪しむやうにもう一度其の不思議な幻影を見やうとしました。けれども空の碧りは明るい光りの中に溶けまろび搖れ動いて居る樣に思はれるだけで、もう少年をやはらかな微笑の中に包んで行くやうな靜かな親しみのある女の眼は見えませんでした。

少年は瞼が重たくなつて來ました。圓味を帶んだ大空の靑い色を見つめて居たために、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

稍輕き疲れを覺ゆるまでに眠たい心持を誘はれるのでした。

さうして居ると、何となくうすら淋しくなつて來ました。しかし心の內にはしみじみとしたあるうるんだやうな遣瀨ないなつかしみが湧き起つてゐます。その心持ちは少年を、嘗て秀子の姉が自分に話してくれた神秘な甘い悲しみの物語の中へ連れて行くのでした。其れは丁度西羅馬が滅亡しやうといふ時分の戰亂と爭鬪とが到る處に絕えず起つた時代の美しい迄に哀しい戀物語なのです。――

……靑白き月の光りは髮を亂して思ひに惱める女のやうに、崩れた城壁に、まぼろしの樣に流れてゐるのでした。其處となく立ち罩めた靄はすべてを夢のやうに果敢なく見せて居ます。

咲きつゞき匂へる薔薇の上を悲しう去りがてに月の光りはさ迷つてゐるのです。其の靑白き月の光りと呟き交しては散りかゝる噴泉の泡沫は、しろがねの音を立てながら果てしれぬ苦しみに啜り泣いて居るやうに思はれます。其處へベロンの百合の花よりも白い美しい王姬が守りの固い宮殿を、ひそかに拔け出てゝ戀する騎士に會ふために來るのでした。彼女の唇は恐れと愁ひとで冷たく震へて居るのであつたけれども、其の目は微かな望みと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

よろこびに燃えて居たのでありました。

彼女は荒城の壁に寄り添ひながら、其處となく匂ひ來る薔薇の香に、遣瀨ない胸の思ひを籠めて、いぢらしく、何時までも戀人を待つて居るのでした。しかし、戀人は未だ來てくれません。餘りの待ち遠うしさに、彼女は崩れた城壁に慘しく這つてゐる蔦の葉を捲つては地に投げつゝ焦ら立ち燃ゆる切ない心を獨り靜めて居るのでありました。また或る時は摘み取つた白薔薇に唇を推しあてゝ啜り泣いて居るやうに見えることもありました。

軈て忍びやかな足音がすると、流れるやうに人の影が地に映りました。王姬はその足音を聞きつけると、駈け寄つて戀しいなつかしい情人と胡蝶のやうに接吻するのでした。そして待ち盡した怨みを訴へるやうに、騎士の胸に顏を埋めて、さめざめと泣くより他は無かつたのです。まぼろしのやうな靑白い月の光りは騎士の胸にくづをれたる王姬の金髮の一條にさ迷つて居るやうでありました。騎士は其の髮の毛を優しく梳いてやりながら、色々と慰めて居るのです。そして二人は何時迄も、かたく抱擁して熱い接吻を幾度も交しました。

王姬と騎士は今朽ち崩れた荒城の階段を手をとつて登つて行くのです。此處へ登つて見ると、四周は大理石のやうに靜かなのでした。星の光りは靑く冴えた大空にはつきりと澄

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

み渡つて來ました。若き騎士は明朝戰の野へ赴かねばならぬ身であることを優しく王姬に語り聞かせるのでありました。例へ一度戰の場へ出ても間も無く自分は凱旋して歸つて來る、其の上は二人は共に樂しい輝きに滿ちた家庭を送らふといふことを堅くかたく契りました。

けれども今宵のこの別れは遂に永き別離となるかの如く二人は悲しみました然し何時まで居ても名殘りは盡きない、殊に自分は尊き王命を帶びて居る身であるといふことを覺ると、王女に最後の强き抱擁と切なき接吻を與へ、思ひ切つて階段を驅け降りました。王姬は其處へ其儘泣きくづれてしまふのでした。………

其の夜から恰も半年を經ました。しかし戀する騎士からは便りがありません。又一年過ぎました。まだ情人は歸つて來せんでした。王姬は心狂ふて每夜其の荒城の朽ち壞れた階段を登つては、髮を振り亂して縱琴を彈じながら、戀人を呪ひ、戀人を恨む歌を歌ひ續けるのでした。其の震ふ纖手に奏でる別離の悲壯な調べに、枯れたる薔薇も甦るかと思はれ、赤くなつた蔦紅葉はほろほろと恨みながく散り落つるのでした。

――此の美しきまでに哀しい物語を少年は其の物語の中の王姬のやうに若い輝きと誇

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りに滿ちた秀子の姉さんから聞いた時は、幼な心にも、何となく騎士が憎らしく思はれて、縦琴を彈きながら男を怨み呪ふ歌を歌ひつゞけた王姫を憐れむ情が身に迫つて來たのであります。

四

夕闇は教會の赤い煉瓦を薄黑く心持惡く滲ませて這ふやうにやつて來るのでした。大きな胡桃の樹は此處に立つて居る少年の目に、恰も冷たい夕闇の中に顏をそむけてしく〳〵と泣いて居るやうに見えました。

何も彼もすべて言ひ合せたやうに靜まり返つてゐて、だん〳〵迫り來る黑い夜の色に怖れてゐる樣な中に盲目のやうに堅く閉ぢた教會の窓に向ふと――少年の目は樣々の疑惑に輝きました。………

――唾で和いた土を塗りて生來の瞽を癒し、カペナムンに向つて海上を歩み行つたといふイエスが、何故に十字架から自分自身を救ふことが出來なかつたのであらう。

「若しキリストが神の選びたる者ならば自己を救ふべし」と兵卒や盜賊から嘲笑されたのが、少年には寧ろ奇蹟のやうに思はれるのでした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

殿を毀ちて三日に之れを建てることの出來る程の彼を何故十字架から自らを救ふことが出來なかつたのか。

少年は、おびき寄せられるやうに教會の方へ歩み寄りました。

あたりはもう暗らく空には星がキラキラ輝いて居るのです。

何時か久雄は教會の扉の前に立つてゐました。恰も教會は魔法使の巨人(ヂャイアント)が自分を見下ろして居るやうに思はれて逃れることの出來ない威壓を心に感ずるのでした。

少年はふと白い把手(ハンドル)に手を觸れて見ました。

すると重たい扉はするすると音もなく中へ消えるやうに開くのでした。心のふるへるやうな冷たい室の空氣が頰を打ちました。はつと思ふと二三歩少年は後へ身を引くのでした。

思ひもかけぬもの凄いものに出會つたやうに少年の目は驚愕に輝いて居ます。けれどもその驚きは直ぐ暗い疑惑に代りました。

少年は例へば覗き眼鏡でも偸み見るやうな或る不安を交へた好奇の心持を以て、しかし脅(おび)えたやうに暗い會堂の中へ身を入れました。

中は海のやうに冷たくまつくらでした。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

立ち止つて、じつと耳を澄まして奥の方を窺ひ見ました。何時も牧師が跪いて祈禱をする演壇の方は何も見えませんでした。ふと俄に少年はもう此の會堂から一歩も外へ出ることの出來ないやうな、魔術にかけられてしまつたのではないかと考へられるのでした。あの蛇の樣な光つた目をした黒い服を着た女異人が影のやうに扉を開けて這入つて來はしないだらうかと思ひました。

少年は恐ろしさに思はず聲を立てやうとするのでした。

もうどんなに藻掻いてもわめいても此の教會から自分は逃れることが出來ないやうな哀しさを感じました。誰も助けに來て呉れはしない。

硝子窓を透うして空には星がきらめいて居るのが見えます。

少年は後をも振り向かずに駈け出しました。

家には入ると、其の儘祖母さんのあたつて居られる炬燵へ默つて、もぐり込んでしまうのでした。炬燵の上に新聞を廣げて、眼鏡を鼻の上にのせたまゝ居眠りをしてゐた祖母さんはびつくりして目を醒ましました。

「そう、久雄かえ、何處へ行つて居つたぞ?」

久雄は祖母さんのこの問には何の返事もしないで、好い工合に温まつてゐる掛け蒲團の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

上へ冷えた頬を推し付けながら祖母さんの顔を見上げました。

赤い洋燈の光りに祖母さんの顔は、あのお伽噺に出て來る魔法使のやうに恐ろしく見えるのでした。少年はふと悠麼ことを聞いて見るのでした。

「お祖母さん、耶蘇教へ行つたことある？」

「あの赤い煉瓦の教會へかの」

「うん」

「まだ行つて見んわ、何かあるのかの？」

「あのね、あの教會へ來る異人ね、あれは皆魔法使だつて、祖母さん、それ眞實？」

「誰がそんなこと言つたかい？」

「秀さんが、もう先に僕に言つたよ」

「あはははは」

祖母さんは笑ひ出しました。目も口も鼻も皆一共になつて動いたやうに見えました。そして祖母さんも昔は、この異國の民族固有の神秘な傳說を背景として生れた宗教を讃美した一人であつたと云ふことを話して呉れたのでした。

少年は新らしい其の祖母さんの意外な物語に胸を躍らせました。家の祖母さんは何で恐

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ろしい奇怪な基督教はんかを信じたのであらう……さう思ひながら何時か少年は其處へうとうとと眠つてしまふのでした。

五

……久雄は銀笛を携へて此處へ來ました。上からは赤黄ろくなつた胡桃の朽葉が散り落ちて來ます。

一ひら二ひら先きに落葉すると、もう堪まらなくなつたといつた風に、丁度父母の後を慕つてゞも行くやうなかたちで、いぢらしくも、はらはらはらと散つて來るのが何う云ふのか、つらそうに見えるのです。

日はとうに洗んでしまつたけれども、あたりは未だほの明るく、久雄の手に光る銀笛は青白くふるへて居るのでした。

見上ぐる此の胡桃の樹ばかりは、自分の周圍にあつた色々な出來事を知らぬ樣です。

思へば、この樹の幹に凭かゝつて、會堂の重い扉を音せなく開けて俯向きながら、花崗岩の白い石段を降りて來る若い男女の群を、奇しい目をもつて眺めたりした彼の時分からもう幾年になるだらう。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

落ち散つた胡桃の一葉一葉に、少年の美しい夢は籠つて居て、試みに吹いた銀笛の澄んだ音に浮びも出でん有樣です。

けれども、けれども彼の敎會の赤い煉瓦に輕るく背をもたせて、繪のやうな美しい空想に耽りながら、眞綿の樣な柔らかな夕暮の空氣の中へ淡い初夏の哀しみを殘して、ほのかに消えて行く銀笛の音に我自らうつとりとなつてしまつた時分のやうに、今は心を籠めて銀笛を吹くことが出來ないのです。つくづくと見れば傷しくも銀笛には赤黑い銹が出來て居りました。

久雄は既に人妻となつた秀子のことを思ひ、そして榮之助の死を悲しみました。

あゝ、それにしても此の胡桃の樹ばかりは凡て傷ましく滅び行つたものを獨り淋しく弔ふやうに、其の最も長い生存の歷史を靜かに暮れて行く空に向つて誇つて居るやうでもあります。

ふと一枚の落葉を拾ひ取つて輕ろく胸にあつれば、消え行く秋のあまたの愁ひが一時に返り來る程の佗しさ、遣瀨なさを感ずるのでありました。

やがて星の光りがきらきらと輝き出した時分にも、久雄の吹く銀笛のうす青い音は、とぎれ勝ちに、その胡桃の樹の下から聞えて來ました………（一九一三一一五）

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

響の影 ―マツコアー―

ある倶樂部の喫煙室の暖爐を取圍てゐる一群の人々がある。それは丁度午前の二時頃であつた。家の者はたいてい寢靜まつたと見えて倶樂部の中は極めてひつそりとしてゐる。只だ堅く凍つた街を折々軌つてゆく車の音が聞える許り、それさへ束の間で、あたりは聽てもとの寂寞にかへつてゆくのである。

重苦しい壓付る樣なシガーの煙が室をたてこめてそちこちに漂ふてゐる。

一時間餘り、話がきれぎれに續けられた―とりとめのない文句が煙の間にとりかはされた。集つてゐる連中の顏には大方嫌怠の色が表はれてなにか特別に感興をひき起す樣な話題でもなければ益々床に行なければならないはめになつた。

丁度この瞬間に誰かがその隣りの友達に熱心に何事をか語り始めた。それは昨夜みたといふ女の話なのである。すると間もなく二人の間に異なつた意見が生じてきた。

「―といふのはなにもかもすぐと君に話す樣な女だらう―僕は知つてゐるさ―髮の毛の短かく黒い、情熱のこもつた黒瞳がちのまあ少し凄い方だね」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「ちつとも凄くなんかありやしない」

「髮の毛の黑くなく、黑眼勝でもないといふのか—馬鹿〳〵しい」さも不平らしさうに彼はシガーの吸かけを暖爐（ストーヴ）の中へ投げこんだ。暖爐（ストーヴ）の中では未だ—小さい石炭の塊が黃色な焔をあげて燃えてゐた。

この時、他（ほか）の連中も話の仲間入をし初めた。談話（はなし）に早速花が咲き初めた。双方二派（ふたは）に分れて各自（めい〳〵）が順番に、てつきりこれに違ひあるまいといつた樣な女を擔ぎだした。

この話題（シーム）が出たのでなんなく五分間が經過した、今迄閉られてゐた皆んなの舌が魔術にでもあつた樣にすらすらと解かれた。

「そんなら今度は僕がひとつあてて御覽にいれやう—其の女といふのは丈（せい）がスラリとして立派で、眼付や手の恰好などはBotticelli（ボチイセリ）のマドンナそつくりといつた樣に—殊に眼付には智慧が溢れて、それで—」

もどかしさうに肯いてゐた一人が急にそれを遮つた。

「さう、さう、だが君等（きみたち）のいふ女には性格（キヤラクター）といふ奴がないね。バイブルの中とか—またすべて歷史上有名な女を探してみ給へ—差詰佛蘭西の豪い女でもいい」こう言つて口から出まかせに色々な名前を拉べ初めた、この出鱈目には他の連中も笑はずにはゐられなかつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。

「Jeanne d'Arc」インスピレーションにでもうたれたといつた樣に叫んだ。これでもかさ言はぬ許りの色が顏付に顯はれた。「あの女も黒かつた。それだけは何んといつても確かなものだ」

こうなつてくると肝要な問題はそつちのけで各自が口から出放題に女の名を連發しだした。

「Mary Magdalene!」

「Mary Stuart!」

「Marie Antoinette!」

「Marie Bashkirtseff!」

「Marie Lloyd!」

こんな名前が人々の口から出る度に哄笑と揶揄とを以て迎へられた。

こんな風に戯談が誰れの口からともなく發せられた。

連中の中で先きから默りこんでゐる二人がある。

一人は頑丈な體格の重味のある男で科學の本しか讀まない癖に文學が好きだといふ男な

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のだ。仲間の連中からはそれでも世の中に有益な人間だといつて尊敬されてゐる。時々愚にもつかない洒落などを云つては皆んなを笑はせるのだ。

彼は今殘り少なになつたシガーを神經的に吹かしながら貧乏搖ぎをやつてゐる。

「オイ、今度は君の番だぜ」と誰かがいつた。

彼の理想の女をなるべく早く頭の焦點に集めさせたいのでもあらう、沈默がひとしきりつゞいた聽手の顏には充分好奇心があらはれてゐた。

やがて深遠な聲がおごそかに鳴り響いた。「彼女は極めて小柄ならざるべからず」

連中の顏には一樣に微笑が通りすぎた。

「Partuniunt montes」と誰かが唸いた。ドッといふ笑ひ聲が室中に鳴り渡つた。

重味のある人は一層神經的に身體を動かしながら苦笑した。彼には合の手が解らないのだ。話しの續きを彼にさせるには何にかしらいつて煽動(おだて)なければならなかつた。

「思ふに」ヤット彼は口を開いた。「髮は鳶色に相違ない、少なくとも黑いな」調子は元の通り嚴肅だ。

黑型(ダアーク・タイプ)の稱讃者は奈何にもといつた樣に調子を合せた。

「眼は鳶色にして光に充ち」彼はゆるやかに附加へた。「服裝は極めて優美なり」大きな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

結論が無限の力でもつて下された。

哄笑が聴手の眼の中に踏つた。

「佛蘭西の女ですかな?」誰かが訊ねた。

「ウム、イヤ、佛蘭西の女ぢあない」

「では舞子(バレー)でせう?」少し言ひ過ぎたとでもいつた口調でまた一人が訊(たづ)ねた。

こんだは何の答もない。もうこれ以上に最後のスピーカーからなにものも期待されさうにもないので連中は稍々失望の色をあらはした。

爐格(グレート)の中に赤い鈍色の炭の崩れる音が微かにこもつて聞えた。沈默がまた暫時(しばらく)つゞいた。

ところでまた一人口を開かない男がゐたのである。忘れ物を不意に思ひ出した樣に連中は一度に叫びだした。

「Severine(セヴエライン), Severine(セヴエライン),—勿論」

「さあ、あなたの番です」

「すつかり忘れてゐた。あなたを除物(のけもの)にするなんて—どうして、〳〵」

「それに近頃はトント面白い御話もありませんでしたから—是非一つもうぢきに御出發(たち)にもなるのだし、何にか一ッ遺していつて下さらなきあ—御意見は? さあ、なんでもい

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いから理想の女と云ふ奴を一ツ—」

こう攻かけられた人は極めてかすかに肩をゆすぶつた。

「意見たつて—僕には別にありませんね。兎に角問題が問題ですからねえ、僕なぞがうつかり何にか言はうものなら忽ち諸君の權利を奪ふ樣なものですからねえ—」

話し方にどこか落着(おちつき)がみえてゐた。異鄕の人のアクセントなどは藥にしたくもない。たが發音には到底英語にはない滑らかなリズムがある。聲は靜かで奈何にも音樂的だ。

「そんなら、時代後れとでも仰しやるのですかね?」

「これが、諸君に語つてゐるぢあ、ありませんか?」

こう云つて左の手で彼は髮をなであげた。殆んど白くなつてゐるところが見えた。「それに理想の女といふものもありませんし、戀(ラヴ)ですか? それもいいでせう。けれど諸君はもう戀にも倦きた時分でせう。それに戀といふ奴は隨分と厄介なもので、今更私の話でもありますまい」

Severine(セヴエライン) Maidanoff(メイドノフ) は露西亞の素封家(かねもち)の息子で千八百五十三年に莫須科(モスコー)で生れた。母は彼がまだほんの子供の時分に死んでしまつたので、彼の心には面影さへ浮ぶことがないのである。故鄕の大學にゐる時分から夙く音樂と文學とに對する淺からぬ素養があつた。廿

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二歳の時、ある傳があつて伯林の大使館に職を奉ずることになつた。しかし一年もたたない内に其處を去らなければならない事になつた。といふのは赴任中官界の隅々まで鋭利な觀察を恣にした彼は、La Femme de Berlin といふ小説を書いた。その本の中にさる高貴の婦人を引合に出したといふことが端なくも評判の種になつて紳士にあるまじき振舞だといふ非難がだいぶやかましくなつた。しかし當時の青年は非常にその書物を歡迎して爭つて讀んだ。彼は「風の向を變るのだ」といつて伯林を去つた。

伯林から彼は倫敦に來た。倫敦に僅か數ヶ月滯在してゐる間莫須科のある大きな劇場の主事に推擧せられた彼は喜んでそれを承諾して早速歸省した。歸ると父は大病で打臥して危篤であつた。長兄は病床に侍するの傍、父の代理を務めてゐた。

父が死ぬと同時にセヴエラインにもかなりな財産が頒たれた。彼はそれによつて好むがままに旅行などをして、樂しい月日を送つた―重に莫須科と巴里の間で。其の間に彼の名は兩市の藝苑にかなり高くなつて來た。―一つには其の著書も與かつたであらうが、その人格にどこともなく人を魅する力を持つてゐた事は慥かに彼を世に出すの大なる原因であつた。

倫敦では彼の自叙傳は彼自からの口から赤裸々に傳へられた。そうして、若し他の人の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

口から聞かされたら只では許されないといつた樣な人等でも彼の話には左程非難を加へなかつた。

彼は今倫敦にきてゐるのだ。音樂や演劇の季節が彼を此處に呼んだのである。倶樂部などでは、もう四十の坂を越してゐるのではあるが、まだ依然として青年の崇拜の的になつてゐる。今夜も連中の談話の仲間入をさせられて何にかしら若い人等のためによろこばせを言はなくつてはならないことになつたのだ。

「それなら眞實に戀をなすつたこともあるのですね？」

セヴェラインはそういつた青年の方を一寸見た、また臥目になつて暖爐の方を瞶めながら

「かも知れませんね、君は Kaftal といふ作曲家の名をきいた事がありますかね？」

「その人はなんでも素的に近代的なコーラル、シッフホンーを作つた人でせう？」

「そうです」

「この頃、新聞なぞでそれを復活させるといふ噂があるじありませんか？」

「實は私の倫敦にきたのも其の爲なのです」彼は暖爐の上に灰を落した。

「その作曲者は女でした」彼は靜かに續けた。「名は Sarah Kaftal といふのです……サラ、サラ、」と小聲で彼は繰返した。

「それなら其の女と戀をなすつたといふのですね?」

「かも知れません」

「かも知れないなぞはぬきにしてーどうですー僕等に話して聞かして下さい」

「イヤ、私は諸君のいふ所謂戀をやつたとは思ひません、兎に角少しその女の事を話してみませう。女は偉い音樂者でした。」

連中はすつかり乘氣になつた。みんな今にもセヴェラインがいつもの流暢なたまらない調子で自叙傳の最もふるつた一節をきかして呉れることと椅子を火に近付て彼等のゐずまいを正した。

セヴェラインは立あがつてシガーを爐に投入ながら、時計をだした。

「もうかれこれ三時ですね、私は行かなければなりません」

こう云つて彼は暖爐棚の上にかかつてゐる畵を不思議さうに眺めた。それは俱樂部のデシナー、パアーティーの圖がかいてあるのだ。一同が立つてシャンパンの盃を手に手に持ながら會長の方に向つて迷惑さうに威儀を正してゐる處である。セヴェラインはかすかにほほえんだ。

「私は今此處で諸君に悉皆サラ、カフタルの話は出來ませんよ。隨分長くかかりますか

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

らね……それに私はカフタルの日記を家に持つてゐるのです。讀みたい方があれば誰れでもいいから持つていつて御覽んなさい。その方が私の話よりもいいでせう。けれど非常に音樂的ですから、或は解りにくい樣なところがあるかも知れませんよ」そうして彼は室を去つた。

＊　＊　＊　＊　＊

それから一週間ばかりたつた、ある晩に同じ青年の群（むれ）は同じ喫煙室の暖爐を取りかこんだ。只だ巴里に行つたセヴェライン丈が其の中にゐなかつた。青年の一人は軈て白紙に包まれた日記を取りだした。彼はこれから連中にそれを讀んできかせるのだ。

表紙にはセヴェエラインの奇麗な手蹟で

Journal（ジャーナル） de（ド） Sarah（サラ） Kaftal（カフタル）

とかかれてゐる。

それから、飛頁（フライ、リーフ）にもまたセヴェラインの手でカフタルの系圖が簡單に錄（しる）されてある。墨色が鮮やかで薄く消えかかつてゐる草稿と強い對照（コンイラスト）をつくつてゐる。

Nicolas Kaftal
n. 1799 m.1873

en 1824

Elizabeth Gersen
n. 1806 m. 1853

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Maurice Kaftal
n. 1824 m. 1882

Sarah Kaftal
n. 1759-1883

H. Raeburn
en. 1858

彼は飛頁をはぐつた時一寸序言的の註釈を附加へてそれから次の様に讀み初めた—

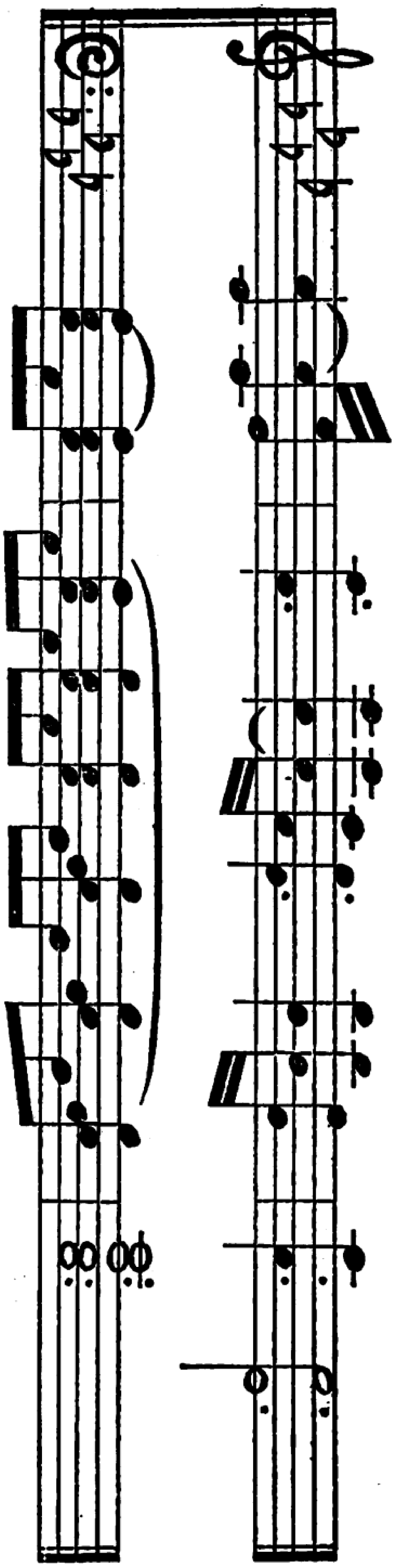
千八百七十九年十月二十七日　倫敦

黄昏れぬ。かなたの家々いと青白くほの見ゆ—さながらフェヤリーの塔の如し。輪廓いと鋭く眞晝の光に照されたる時よりは更に嚴めしくも見ゆるかな。暮靄は十字街の煙突をたちこめ中程に至り明らかに凝りて大氣となりぬ。窓外を打眺むれば細き電線の幾條おちこちに隱見せるがさながら支柱なくして中空にかかれるが如し。

いよいよ暗くなりゆく。われは燈火つけてアパショナタ彈せんか……否、われはいたく疲れぬ。窓に倚りて晩餐迄もの書かん。

ああ、このソナタこそいぶかしけれ。われは一時餘りこれが爲めに消したりと覺ゆ。

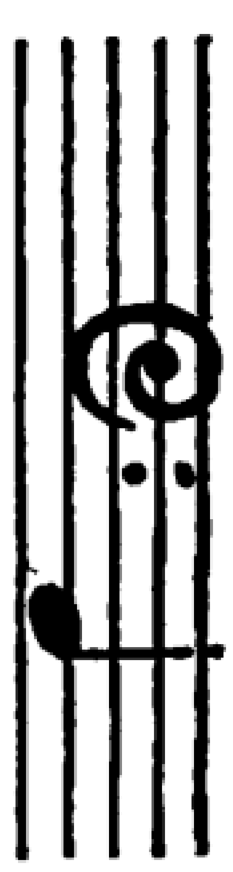
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



今は窓外も全く暮れぬ。なか〳〵にわが心に適(かな)ふ時なり、この旋律(メロデー)には神秘(くす)しきものこもれり、眞暗(まやみ)はその一部を形造れるが如し。

われ奈何なればかく樂を好めるにや、われをかほど迄に魅するはそも何物にや、知りたきはわが願なるを……これを思ふ時わが心惱む。例令ばかの偉大なる旋律には何物の秘(ひそ)めるにや？　樂譜はさして複雜ならず、ありふれたる形なれどベートーヴェンは莊重なる調もなしぬ。

かなたの家々には早や燈火の點せられぬ。黄色なる烟影の暗の中に閃めくがみゆ。往來の響き晝にもまして手にとるが如し。齷齪たる車輪(わだち)の連續せる噪音、時に獨り疾走する車の高く明らかなる音、これらは總て巷(ちまた)のごよみに消えうす。われはピヤノにて試みぬ、そ

は

なり。

はや晩餐の時刻とはなりぬ―わが髪いたく亂れたり。されど梳づるべき暇もなし、人々のわが姿みたらんには又例の如く唸くなるべし。

十月二十八日

人々は果して唸きぬ。母君はわが行末の奈何になりゆくならんなどのたまひぬ。またわれのたまかならず、萬事家庭の仕事に心留むる事なく此分にては人妻となることいと覺束なからんなど附加へ給ひぬ。父君は默してわが方を戒しむるが如く見給ひぬ。われは絶へず不快の感を懷きて席にありぬ。何物をも食する能はず。こは曲を奏でたる後常のことなり。床に就きたれど眼閉ぢがたく、折々アパショナタのわが耳に響く心地して醒めぬ。今朝いたく身內疲れぬ。ショパンがノクタァン (op. 62, No. 2.) にても彈ぜんかな。

曲の始めは淸らかなる水に百合の花の浮べるがごとし。中程に至るに隨ひて流れは急に水さへ濁りて水底に藻の生せるにも似たり。

われは何故とも知らず遽かに飛びたちて傍の壁に掛れる鏡の面に立ち、わが姿を瞶めてたちつくしぬ。わが頸のいかに白く見えたるよ！ 今にしてわれは氣付きぬ。母君はわれの立てる姿見つけ給ひて何事をなせるにやと不興氣に問ひ給ひ、町に物調へにゆくべけれ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ば供(とも)せよと促がし給ひぬ。急ぎ仕度とゝのへ母君と共に家を出づ。

げに靜かにも麗(うらは)しき朝なりき。われは冷やかなる空氣を思ふ樣呼吸しぬ。母君はあれこれと種々(くさぐさ)の品買ひ調へ給ひてわれをも喜ばせんものをと務め給ひたれども、われは形ばかりの返辭(いらへ)をばなし、あらぬ方に氣を取られぬ。母君遂に氣色損じ給ひ、共に連れ立つはかへりて邪魔になるべければと、われのみ店の外に待たせ置き給ひぬ。

われはバァーリングトン、アーケードのコーク街の終まで彷徨ひ行き、往來の人々を眺めつつピカデァリーの方に面して立ちぬ。

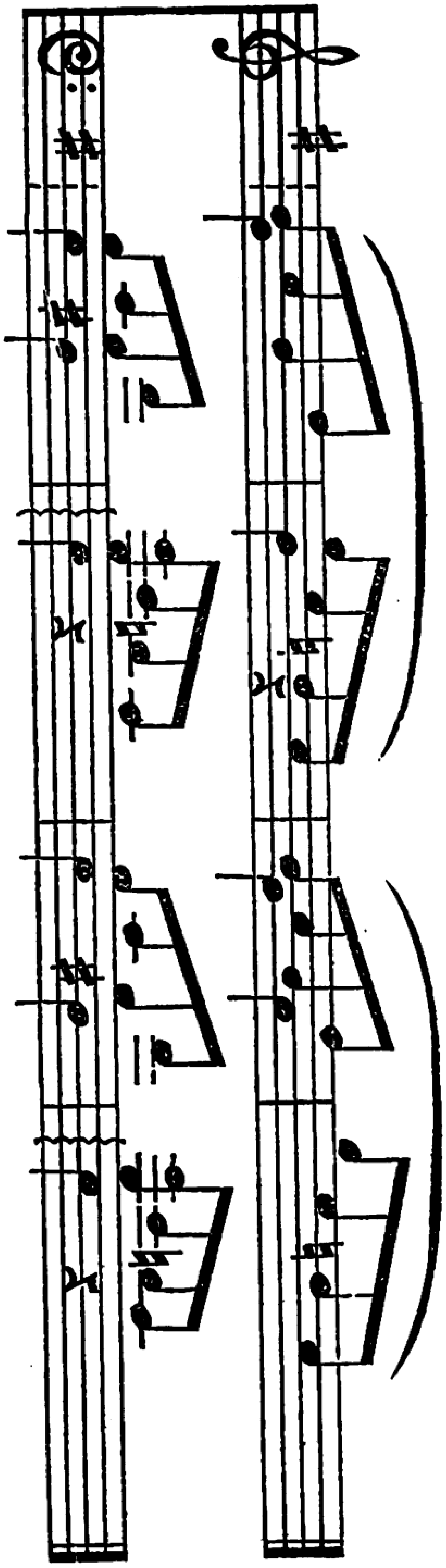
われは街頭に立ちつくして漸く倦みぬ。ピカデァリーの方より日の光まともにアーケードに流れ來り、店より店に移りゆく人々の姿をば美しく照しぬ。大方は貴婦人方にて小さき踵を鋪道の上に跳らして過ぎゆき給ふなか〳〵に可愛ゆらし。

狹霧わが眼を覆ひぬ。永遠(とこしへ)に浮動せる全幅の畵に對せるが如し。われは未だかの窓並に人々の歩める鋪道の如く人らしき象(フイギユア)をば見たることなし。そは一大樂曲の一部とも見ゆ。かれ等の動く毎に其の型變りゆけど、そを辿りゆきて不斷の諧調を認むることを得たり。シユーマンが「アラベスク」の曲ふとわが腦裡に閃きぬ。萬の姿は曲につれて一々その働作をばあやまたず成し就げぬ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

白く長き上衣と頭巾とを被れる一小兒あり。母の傍を離れてとある玩具店に入りぬ。突差の間なりしが、それも又樂曲中の一節(ひとふし)なりと感じぬ。若しその小兒にしてあらぬ方に走らば恐らく曲中に缺けたる處生じたるならん。

中食の間、われは猶もかの人々の群を思ひ廻らしつつ彼等の動作より左の一節を連想しぬ。



十月二十九日

無事に一日(ひとひ)はくれぬ。

心地兎角すぐれず。何事に對してもあきたらぬ節々(ふしぶし)多し。今日少しく針もつ業試みぬ。

母君はわれのピヤノに遠ざかれるを見て喜び給ひ、態(わざ)と樂は神が人類に與へ給ひし物の中

にて、わきて優れたるものなりなどのたまひぬ。教會にて樂の音を耳にする時、靈のいや高きに昇る心地すと母君は語り給ふ。われはあげつらはず。靈の高きに昇るとは奈何なる意にや？ そはわれ等の教會にありて樂を天國と連想せしめ、眞の樂音を打忘れて只管言葉の意義に音を隷屬せしめ讃美歌と稱へて歌ふ故にや。教會にありて心にかなふ唱歌きくときわれは屢々拍手せんとす。

かく言はば人々はわが不信仰なるを咎めん。誠にわが教會に詣ずるは母の意に背かざらんが爲のみ。嗚呼、奈何で誠に信ずることを得んや？ われは周圍の人と物とにつきて只朧げなる意識を有するのみ。かれ等はわが知れる範圍に於てわが心に書かれたる幻影に過ぎざるやも計られず。かれ等の姿いつかは消え失せん。時としてかれ等の消えゆくが如く、われのかれ等より逃れゆくが如き心地す。されど樂は幻にあらず――さなり。決して幻影に非ず。

時にわれ夢見心地にて途上歩みつつ、わが前を急がはしくゆきかよふ人々の姿現實のものとしも思はれざること屢々あり。また、オルガンの音などフト耳にする時はいひしらぬ戰慄を身内に感ずることあり。その音は恰かも人間がかの絶大なる力の一枝葉に過ぎずとの暗示を含めるが如く、又莊々たる廣野に曝されたる屍の朝日に照されたる光景を望むが

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

如き一種の嫌厭を覺ふ。オルガンの音を聞く時、悲哀の念に魘るとはまたわが母の常に口になし給ふところなり。

十月三十日

われは自から甚だ美しと思ふ。色と線との配合おのづから整ひて、たとへ方なき諧調を成す。かく言へばさてわれは徒に傲れりとには非ず。只だかくの如き姿造り出せる創造の巧妙を讃するのみ。其處にわれは自らの存在を認めず。鏡面に映するわが姿とわれとは離れがたきかはりあるべけれど、われはそを明にするを得ず。

われは舞臺に上りて歌はんとの切なる願あり。されどそは、臺詞なき樂劇ならざるべからず。われは曲をものせん。そは「シマイノル、ジンホニー」の如き深遠なる意を含めるものならざるべからず。言葉はげに空なり。そは多くの人々を誤らしむ。ワグネルが偉大なる勝利は彼が藝術論の缺點を徒らに叫ぶのみ。トリスタンが炎ゆる戀の盃を傾け盡す時其處に物狂はしき迄熱烈なる樂の流あり。トリスタン、イソルデ、黄金の盃、凡ゆる虚飾の羽毛は舞臺より消え失せて跡をも止めず。

客間に集へる母君の友なる人々の爲めに茶を用意すべく呼れぬ。人々はわが姿見るより

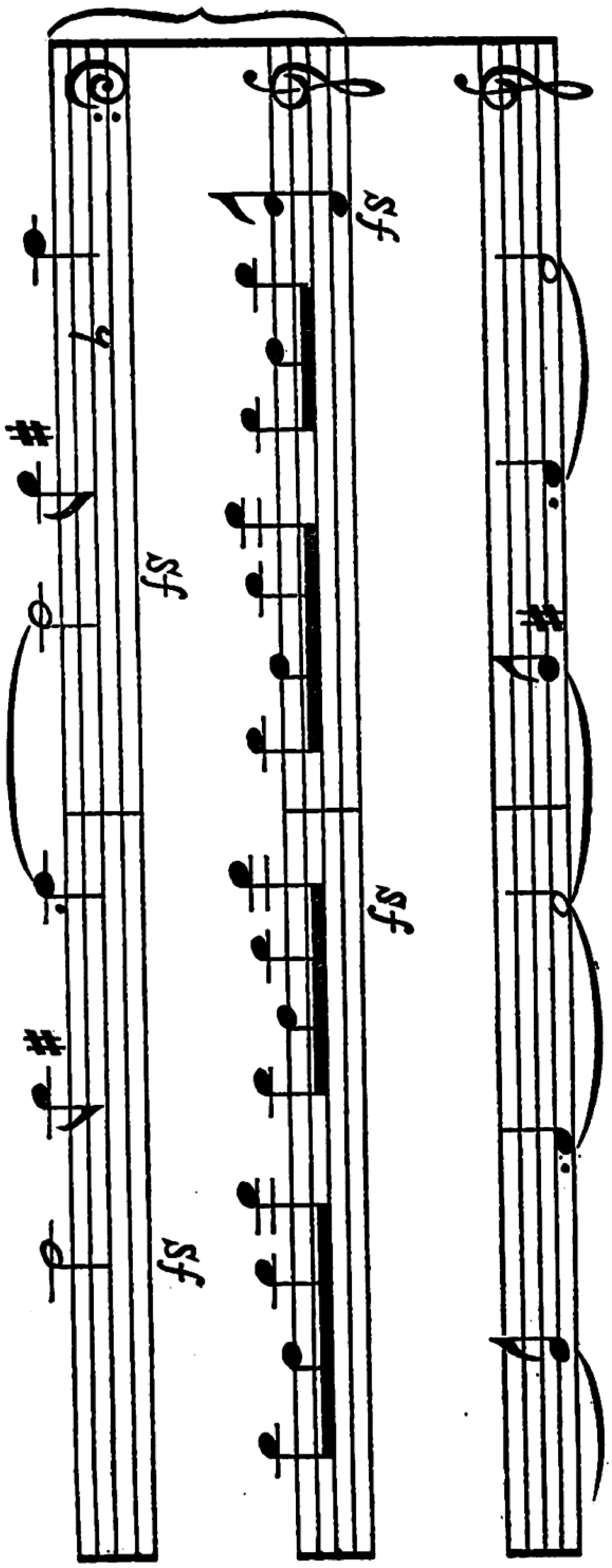
Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

技(わざ)の進み奈何になど問ひぬ。仕事に倦みたる折など一曲奏でたらんにはいと目出度きものなるべしなど口々にののしりぬ。われは默して何事をも語らず。母君は樂しき團欒(まどひ)にあらぬ事などいでこんかと氣遣ひ給へるが如く見えぬ。わが今日迄對面せる人々の中にて唯一人樂に就きわが心得たる樣に物語れる君あり。

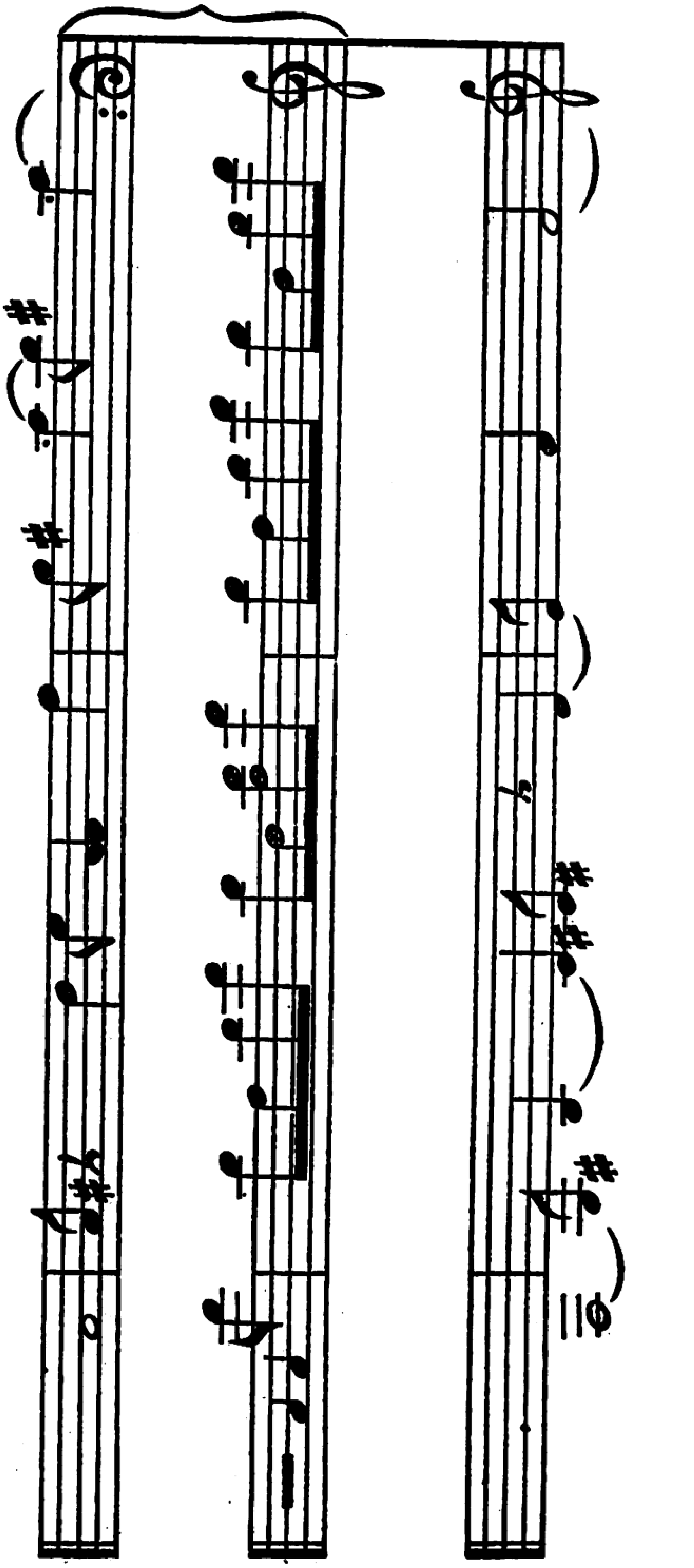
十月三十一日

かの君の姿近頃いたくわが心を往來しぬ。かの君は髮いと黑く。姿は蒲柳にて内に鋭どき感情(おもひ)を包めるものの如し。手は雪の如く、丈高からず。かの君の故郷は露西亞にてわが父君の友の息なり。今は莫須科劇場の頭取とかや。わが十四歳の折、今は逝去(みまか)れる祖父見舞はんとてわれ等かの地に赴きし折、かの君の奏(かな)でたるヴヰオロンの音、未だに忘られず。とある宵なりき。祖父の君、心地少しくすぐれて見えしかば、連れだちてかの君の許にゆきぬ、かの君はわれ等のため「クロイツェル、ソナタ」を奏でぬ。曲漸やく進みて、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



に至れる時、われは他界にあるには非ずやと心地まどいぬ。氣息たへ〲にたまらず母の腕(かひな)に倒れぬ。人々は室内の暖氣はげしかりしによれりと語りたれどわれは明かにさるたぐひに非ざりしを記憶す。

そは九月の靜かなる夜なりき、燈火(ともしび)の吹き消さるるを恐れて窓の戸は堅く閉られたり。二個の燈火微にピアノの盤上を照らしぬ。われ等は片隅の小暗き處に座をしめぬ。窓外に

老樹あり、梢を渡り來たる風、窓にあたりて折々微かなる音をたてぬ。

かの君はわれらが方に向ひぬ。頭と肩とは燭の光をまともに浴びたれど腰より下は暗に包まれてさだかならず。

立姿いと氣高くみえぬ。頭は稍後方に傾き眼は情熱もて輝きぬ。われを忘れて君を瞶むること暫時、君が兄君の伴奏もいと巧になされぬ。されどかの折のピアノ女子の手に奏でられたらんには更らに全き演奏たりしならん。

豊麗なる樂の音にいつしかわれは同化せられつ、心は千々に搔き亂されぬ。わが先に引きたる一節にいたりし時君の頭と肩とはやうやく高まりきたり滿身の力そこに集まりたりと見えぬ。黒き髮、青白き顔―自若として立てる姿！　われは覺えず畏縮しぬ。視線は稍上方に向けられ神秘しき光放ちつゝ弓の行方を追ひぬ。この時一陣の風窓に強くあたりぬ遠の音にわが幻影はかき消されつそのまゝ打ち倒れぬ。

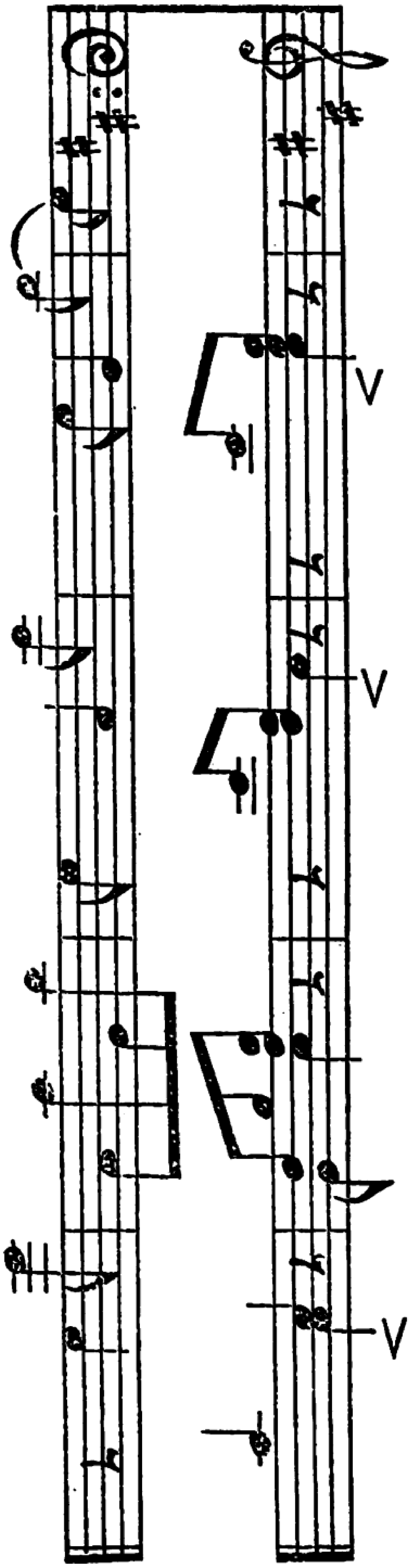
かの君と倫敦にて「クロイツエル」につき物語りしより早くも五歳は過ぎぬ。

君は軈て露西亞に赴き給ひぬ。それより後は絶へて君を見る事を得ずなりぬ。この頃ふと父君にかの君の事訊ねたるに父はいたく機嫌を損じたる樣にて再びかの君の名をも口にすべからずと戒め給ひぬ。われはその何故なるを知らざりしが近頃に至り漸く之を發見し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ぬ。君は露西亜の陸軍に高き位置を占むる某將校の一人娘を唆のかしたるなり。それが爲め遂に決鬪までなすに至りぬ。幸ひにしてセヴエラインの君は輕少の手傷を負ひたるのみなりしが相手はいたく傷けられしとの事なり。若し一命をとりとむるとも癈人として一生を送らざるべからざるは悲慘の極みなり、われはそれに就きていたく心を動かされぬ。されど奈何に思ひ廻らすもかの君を憎むことはわれの到底なし能はざるところなり。あゝ殘酷なる君かな！　われは君が誑らかせし女の姿を心に書きぬ。彼女は Heine が所謂「Liebe krunken Angen」（戀に惱む眼）を持てる若く美はしき乙女なるべし。あゝ今彼女はその一生を誤りぬ—最早何等の望み打ち絶えしならん—われは思はず戰慄しぬ。されど思ひをセヴェラインに轉ずれば悲劇の局面はいつしかかき消されてそれも又神がかの君に備へし道の一つなるがごとく思ひ倣され一葉の流れに浮ぶさゝやかなる現象のごとく感ぜられぬ。流れは永劫變らざる世の姿の象徴にや。シユーマンが曲の一節わが心にひらめきぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



われは日頃より樂に明らかなる意義の供へりといふものの大概偽りの形なりとの感を懷き來れり―そは只連想の戲に過ぎず。强ひて意義を附するもそは只肉感的のものをいふのみ肉感的といはゞ人は直ちに不德なるものの如く思はん、ああそは何の故ぞ？　しかもなほ再びワグネルを思ふ。あゝ渠は自己の天才に對して如何に盲目なりしぞ！　ワグネルが得たる絕大の勝利とは何ぞや？　曰く、無象なる情緖の體現、されど樂は有象をも暗示すとは又渠のわれらに敎へし處なり、「ワルクユーレ」の火想（Fire-motif）とはなんぞ、炎々たる焰の全曲を蓋へる感あればなり。立ち昇る水蒸氣、焰の舌!!　又かのトリスタンが序樂に舵手が「風心地よく吹けり」と謳ふ時、微風徐ろに來る樂姿あり。「ライン」の曲にはた流水の姿、火、風、水、なべてあやまたず。

樂のわれに暗示する諸象を考ふるごとに、そは全て自然の姿なることを發見す、自然の姿とは男女をとり除きたる場合をいふ。わが心に今モツアルト歌曲（アリア）Nozze di Figaro 中のDove Sono 浮びつつあり。われそを聞く時は必ず雨後の綠野に照り渡る日影を思ふ。されど、初めてわれそを聞きたる時は微妙なる心の搖き（ゆらめ）を覺えたるのみ。その後われは雨後の綠野に日影の照り渡れる光景をみてかの曲を耳にせし時と同じ印象を與へられぬ。由來われはかの曲と光景をば區別して考ふること能はずなりぬ。されど不思議なるは光景の樂を包含せずして樂曲反つて光景を常に包含せるが如く感（おも）はるゝことなり。

樂は凡てわれに物の象（かたち）を暗示することなし。そは常日頃自然より得ると全く異りたる新らしき感を我に與ふればなり。こはベエートーヴエンの場合に於て特に著し。渠は曲中に自らの面影さへ彷彿せしむることあらざるが故にわれは奈何に嘆美すべきやをさへ知るに由なし。

午後、またも樂の起原に思ひをひそめぬ、かかる事を置きて他になすべき事われにありや？　あゝ、いとものうし——耐へがたき程にものうし。來る程の人いづれも醜くく愚かなり。かの人々われの物言はぬ故にいたく我を憎めりと。

十一月二日

もろ〳〵の詩人(うたびと)の中にて眞に克く樂の堂奥に入りてその機微を捉へしものありやと樣々に求めたれど多くは漠然と人間の靈性と深きかかはりあるものなりなどと歌ひしに過ぎず。樂の内部に秘める眞理(まこと)を見出せし人は眞に少なし。されどシェレーの如きはややそれに庶幾(ちか)きものか。

十一月三日

寒さ日にはげし。近頃いたくピアノに遠ざかりたりなど思ひ日記のページなど繰り返しつゝこの終りは如何にかならんなどおもひぬ。寒き冬の間部屋に火氣ある時なにとなけれどショッパンの曲奏(かな)ずること能はず。

菩提樹の花の薫りそことしもなく漂ひ、あたり氣重き時、われは渠の曲奏づる事を好む。夏期に於てわれは多く彈奏をこととし冬期は寧ろ研讃に耽けるを常とす。されどベートーヴエンにいたりては四季いづれをも選ばざるなり。

われは再び眞率なる樂の研究に耽らんかな。昨日父君に專門の音樂家たらんとの志望を打ち明けぬ。父君はいぶかしげにわれを打見やり給ひ、かくの如き志はとく棄つべしとのたまひぬ。われ心いたく悔み望み全く絶えたるが如く感ぜられぬ。不快の念押ふるによしなし。………

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

十一月十日午後十一時

昨日午下りわれは唯一人演奏會におもむき「Cマイナルジンホニー」をきけり。眼を閉ぢつつ全曲の一點一畫をも聞き洩らさじと務めぬ。曲終るや聽集の拍手喝采奔流の如く我が耳にひびきぬ。われは遽かに醒めたるものの如く頭を擡げ場内をみまはしぬ。ただ朧げなる人の顏―我は暫時の間茫然と眺めつくしぬ。ああわれもまたかの人々の如き顏と手とを持てるものなりや? かく氣付ける時言ふべからざる嫌感にわれはうたれぬ。

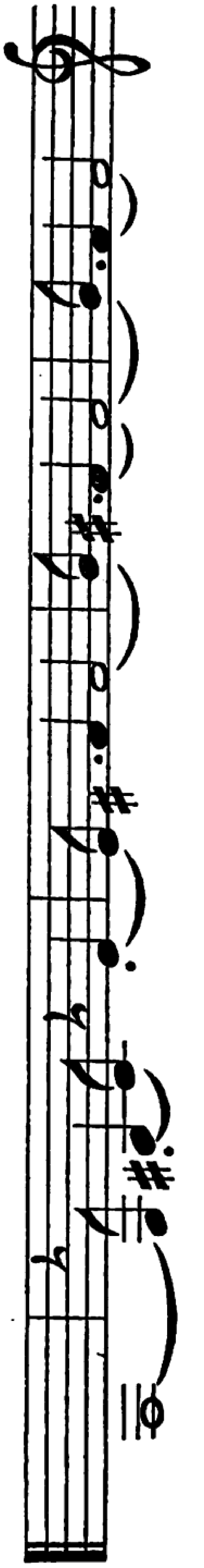
われは樂劇をものしつつあり。何故にそを樂劇と呼ぶや自らも知らず、そは臺詞もなく舞臺もなければ――

われは部屋の戸を堅く鎖してその内に籠らざるべからず、母君の來給ひてわれの何事をなしつつありやを見給はんことの恐ろしければ、母君には下婢などの兎角わが讀書を妨ぐる故などもてなさば仔細なからん。果敢なき虛僞よ!

ああ若しわれ母君の心の友となり全てを打ち明け時に我も又母君の言辭をいれ、たへず親しく語らひたらんには奈何に幸福多からん―ああされど誠に悲し、母君も今は全く失望し給へる如し。母君は共に家事を助け時に交際裡に喜んで出入するが如き娘を欲し給ふなるべし。われはそれとは全くうらうへなり。われ寐に就くとて母君に接吻せんか母君は身

を震はし給ふが如く思はるゝ事屢々あり。われに觸れ給ふさへ心地惡しくおぼし給ふなるべし。父君はわれに對しいと親切にもてなし給へどわれを解し給はず加之樂に對して何等の趣味も有し給はざるなり。否、樂は寧ろ父を惱ますの種なり、かくてわれはひとり寂しく生くあゝ全く孤獨なり、曾ては同窓の友もありしがそれ等の人は今は大概結婚せり。われは友の夫なる人を好まず、故に訪ねんともおもはず。

されぱわれ何故に結婚せざるや？　これ慥かに我が父母の心を惱ますところなるべし。わが家に屢々來る人々あれど一度も共に語りしことあらず。かの人々は皆等しきものの如くわれは一樣に渠等を嫌ふ。しかも尙ほ渠等はわれに媚びつゝあるごときさまをなす！あゝさりとてかくの如く孤獨の生涯を續くものものうし、われは世に出でて人とは眞に奈何なるものにして、渠等は常に何事を思ひ煩らへるや知りたきはわが願ひなるを、家庭とは體よき鳥籠なり、其處に何等の生命なし、ある程のもの全て平凡無味の色彩をほどこさる。大なる聽衆の面前にいでてわれは歌はんかな。人々わが聲に耳傾けなば必ずや絶えいらん、われかの君のヴキオロンをききたる時の如けん。



奈何なればかの君の面影かくは我心に浮みきたるにや。

かの君を思ふ時まづかのいぶかしき顔容―頭は稍後方に眼は異様に光を放てる―眼前に彷彿しきたる。

われは今君が面影をわが部屋の壁に見たり。幻なるべし。幻にてもよし。燭の光そゞろに莫須科の當夜を追懐せしむ。

いと寒し。臥戸にゆかざるべからず。

十一月十五日

自から鞭うちつゝ我が業にいそしみぬ。作物の進みも際立ちぬ。心地少しくすぐれば新なる決心さへ浮みきたれり。これまでの慣習を改め外出しみん。共に語るべき友もなく孤獨なる生涯を續くるもなにかせん？　のみならずわが樂は屢々われを疲勞せしめ最早一歩も進む事能はざらしむることさへあり。昨日われロリマー家より夜會の招待を受けたれば行くべき旨母君に語れり。母君さも驚き給へるが如きおももちしてわれを瞶めたまへり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さもあるべし。母君が喜びの色隠さんとなし給へるが可笑しかりき。われは何とはなく母君にすがり思ふさま接吻せんとしぬ—あゝされどたゞ——

かくまでわれ進歩せんとは夢思はざりき。この將來奈何になりゆくにや不思議なり。今朝も夜會の服裝につきて様々の思案廻らしぬ。從來われは大方黒き衣のみ纏ひきたりぬ。こは屢々母君の景色を損ずる種なりき。母君は萬づ華美やかなる趣味を持ち給ふが故にわが撰擇をばいたく忌嫌ひ給へり。

あれこれと種々思ひ廻らしたる末遂ひにこれと定めぬ。

上衣は柔かき絹物にて色は水色なるべし、帶は銀線の縫あるをゆるやかにまとふべし。頸と肩とはあらはに、二個の靑き土耳古天鵞絨にて造れる環飾をば腕に塡むべし。寶石の類をば一切用ひず、まして其の他の裝飾をや。

たゞ見事なる白薔薇のわが右肩よりして長く裳裾にまで及べるあるのみ。

氣づかひ給ふな、われは流行の書物かきつゝあるに非らず。かくして我は自ら美しからんが爲のみ。

時來たらば或はわれすべてこれ等の美しき事をば忘れはて行くこと拒むやも得知らず、兎角にして當日の來るまでは我が樂劇のほか物思はしむる種はいで來ぬ。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

十一月二十三日

新らしきことなし。されど何事をか記しみん。よし、わが樂劇こそよかん。

そはありとあらゆる色、形、香の草木花卉を初め千變萬化の流れを包含せり。そこにまた日月星晨あり、光明と暗黑あり、自餘はたゞ心より心にと言はゞたりなん。樂と現實の物體を連想せんと務めざる音樂家には自から明らかならん。

そこに男女の合唱あり。渠等は歌へども所作せず。渠等は純粹なる樂器と擇むところなし。

全曲を通ずてそこに何等の言辭あらず、只歌調として用ふべき音をば特に撰みて排列せり。適切なる音に逢着するは容易ならず、われは合唱の人々をして只わが爲にのみ歌はしめん、渠等は無意識に歌ひつゝも尙特別なる節々に至らば各自心に浮み來る或物を見出すなるべし。

諸音の流れを通じて一道の本流あるは言ふをまたず。この歌詞と稱するもの極めて單純にして大概流動子音と母音とより組織せらる。歌うたふ人々を戀に陷入れんとするはなをヴヰオロンをフリユートに戀せしむるがごとけん。かれらの共鳴は完全を表現す。たゞそれのみ。肉聲の場合に於けるも等しく然かり。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

巷のそぞろ歩きにわれはフト周圍の諸象に思ひ及びそはわれ等の見る事能はざる何物かの説明に過ぎずとのいぶかしく、しかも不安なる感に打たるることあり、そは恰も日光を浴びわが眼眩みつゝなほ太陽を直視せんと焦りつゝあるが如し。かくて我等が人生といふもの誠は鏡面に朧げなる姿を宿す宇宙生命の覺束なき印象にてはなきか？

言葉、動作、光景―絶間なき人生の影―われはこれ等の暗影中に秘めるあるものを捕捉せんと絶えず努めつつあり。樂と、暗影との連想はわが心に訴ふる直截にして單純なる諸音の表現する眞理を傳へんことを阻めるがごとし。

奈何に技巧優れたりとも舞臺と本文のみにて眞に教授する事思ひもよらず。かくの如き樂劇の存在あり得べくもあらず、故にわれは如上の條件を以てすらその結合を非なりとすべき例を考ふること能はず、さりとて曲中の個々の部分的技巧奈何に完璧なるものにもせよ相集りて相互に適當しきものなりとも斷定しがたし、若し然らば樂と言辭と光景とはかのワグネルが作中に於けるが如く終始相離るべからざるものなりや？　渠は曲中に無數の諸神、惡魔の類を列し來たりて理性的なる人物と神秘的なる樂との區別を朧ろげならしめんと企だてしものの如し、さることなかりせば、渠の樂劇中に於ける三者の關係は愈々明らかなるものなりしならん。渠は實に驚ろくべき狡猾手段を取りしなり。とはいはん物の對

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

話中眞に純粹なる人性を顯はさんと務めたるものの反つて虛僞の形となりて顯はれたるぞ可笑しき。

われらはここかしこに徹かなる眞の光を捕ふる事を得ん、されど全體よりをさば無意義といふも過言ならず、言葉あるが故に初めて意義あるが如く見ゆる音樂は例令言葉ありとも全く無力なり。

ああ　われは眞なりと知りつつも何故に證據(あかし)を求むるにや？　樂こそ詩歌繪畫の表はすと能はざる何物かを明かにわれに示しつゝあるにあらずや？　ワグネルが根底の誤謬は三者の融合に在す、われ奈何で渠が徹を踏まんや、渠は詩人にあらず、畫家にあらず、如何なる場合にも音樂者たり。然も渠は三者を一身に兼ねつゝありと思惟しぬ。詩人にして畫家なる音樂者などいふもの此の世にあり得べしとも覺えず。

今日は先づこれにてよし。雪模樣なり。

十二月二日

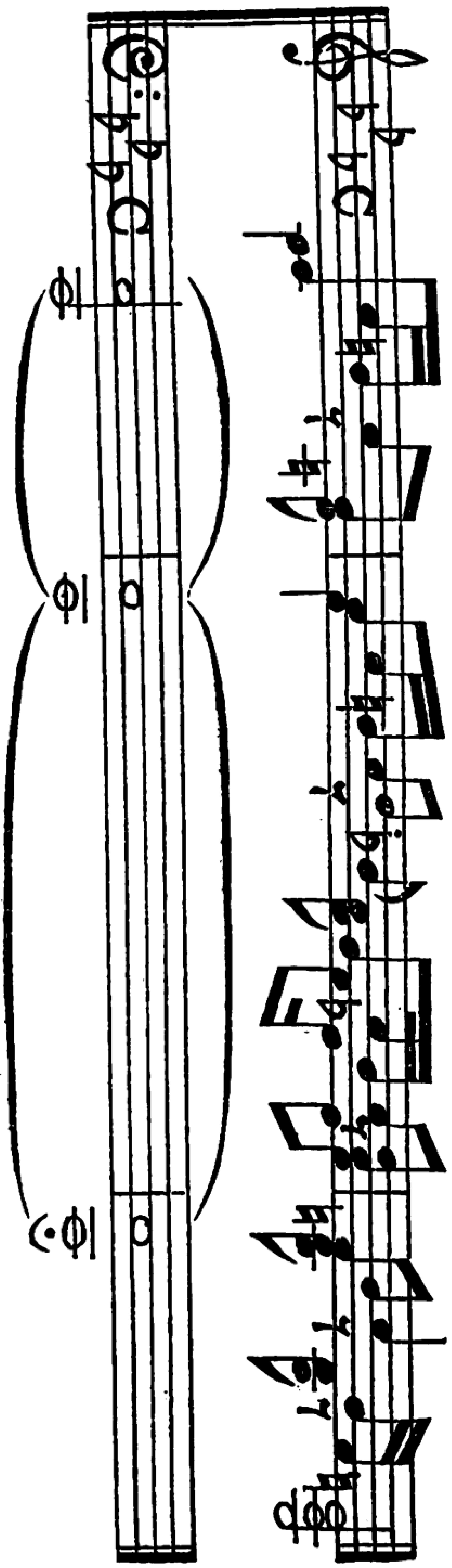
今日明日と待たれし雪遂に降り出でぬ。今は大路も全たく雪に埋もれ往來(ゆきき)絶えぬ。綿の如き大きやかなる雪霏々として小止(をや)みなし。時偶車輪の音耳に入れどピアノに適當しきなし。

今宵は兼ねて約せるロリマー家に訪れざるべからず、わが衣服も出來せり、いかなるも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のにや未だ見ず、恐らく不似合なるものならん、よし、さらば行かざるまでの事。

用意雪萬端整へり、今はたゞ母君を待てるのみ。衣服は寸毫の缺けたるところあらず、獨り鏡面に映ずるわが俤に暫時見惚れぬ。紺青の天鵞絨もて作れる胸飾の形と色とを瞰めつつ他との配合よろしき位置にあらしめんと偏に苦心しぬ。わが思ふままになさんとあせりたれど中々自由にならず。何故とは知らずわれはバッハのフューグを口吟み初めぬ。われは無意識に飾をば左右に動かし或は延ばし或は縮めなどしつつ歌ひ續けぬ。軈て最後の一節にきたりし時、飾はわが思ふが如き形とはなりぬ。



十二月三日

われは今日いたく疲れぬ、されど昨夜はわれにとりて大なる傲りなりき。ある程の舞踏をわれは悉く試みぬ。わが眼絶えず眩めき周圍の光り走馬燈の如くわが身をめぐりぬ。されどわれは一度も倒れず。われは全く醉へるが如き心地にて恰も球の頂上にありて廻轉せるが如く人々は我が脚下をめぐりつつ次第に下へ下へと沈み行くが如く思ひぬ。われは其のまゝ同一の場所にありて廻轉し何等の前進をもなさず、無限の空間に唯一人懸かれるが如く、空間は目路の限り透明なる白色にてわが眼愈々眩めくが如く想像ひぬ。わが足の動作全くそれみづからの力を失ひ何れの方向とも定めなく動搖しぬ。

わが全身の重みもいつかとり去られたるが如かりき。軈てわれらは止まりぬ。室内のありとあらゆる色彩は忽ちわが眼に映じきたりぬ。われはそを不可思議く感じぬ。わが舞踏に餘念なかりし時は室内の温度など全く無意識なりしが、今は蒸さるゝ如きいきれの遽にわれをおそひ來れるを感じぬわが、舞ひし場所に白薔薇あまた落ち散りたり、そは先にしるせし我が感じを引き起したるものの如し。

休憩の間、われは人々の様を眺めぬ。人々もまたわれを熟視しぬ。婦人の方々はわけて煩きまでわが方を見給ひぬ。方々の眼は冷やかなる光に滿ち中には立腹し給ふが如く思はるる眼付きも見えぬ。ひとりわが母は悦びの色を滿面に浮めつつ折々わが方わが見給ひぬ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

この時われは始めて相互の趣味を心置きなく換したるがごとく覺えいたくわが心を動かしぬ。母君は黒と紫の衣纏ひ給へり、

われは今朝われと組みし人々のわれに語りし言葉を憶ひ出さんと務めたれど一言も思ひ浮ぶる事能はざりきわれは恐らく渠等の言葉に耳傾けざりしなるべし。

室の一隅に大なる楕圓の姿見置かれたり、その面に映ずる人々の姿いと與多かりき。多くの中にフト我を魅する姿なることを氣付かざりき。鏡面を遠ざかるに從ひ、われは果してわが姿なるかを再び驗さんが爲にわが腕を高く頭上にあげぬ。わが姿は同じく腕(かいな)を上げぬわれはこれにて今まで怪しき影に追纏はれつゝありしが如き不安の拭ひ去られたるがごとき心地せり。

われはつねにワルツの拍節(リズム)に從ひて舞踏す、旋律(メロディー)は反りてそを妨ぐるが如き感あり。最もわが心に適ふものは旋律の未だ始まらざるに先だちて、低音(バス)先づ拍節(ビート)を示すがごとき類なり。

ストラウスがワルツ、ブラムスが匈牙利(ハンガリア)式ワルツ、ショッパンのワルツ、全てこれらはピアノに適當しき秀拔なる曲なれどこれらの曲に耳傾けつつわれは舞踏せんとは夢にも思はざるなり。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

われら朝まだきわが家を出し時雪降れり。馬車に乗らんとする時二片三片わが肩にかかりぬ。柔かく温き心地せり、されど風は身を切るがごとく浸み渡り空はいと暗がりき。車内にて物思ひつつフト舞踏室の光景眼前に彷彿しきたりぬ。額縁なき繪畫の中空に懸れるが如し。淡く冴やかなる光その中より落ちきたりぬ。舞踏者の纏へる衣服の色彩さまで濃厚ならず光澤ある床上に白き白き薔薇の落ち散りたるが見えぬ。（未　完）

——伊藤野枝譯——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

河岸　―小林歌津―

今では表通りを南千住へ行く電車がひけて、不遠慮にわめき散らしながら馳けて行くやら、この間の洪水からこつち、ふるい家はどん〳〵改築されるやら、もう大分に河岸の空氣も面影も、せんとはちがつて了ひました。

未だ今のように變らない時分、その邊は一體に、ひさしの深い冠木門や、昔風なさびめ出た細格子や、半障子をたてきつた船宿だのが立ち並んでゐたせいでせうか、何だかこう一年中日影のような暗い、陰氣ぽい町で――まだ昔の夢がさめきらないでさまよつてゝも ゐるような氣のするところでございました。そのくせ外側の見かけとは反對な、可成陽氣に氣の輕い人達が住まつてゐるんで、お隣とお隣の間に嚴重な垣根一つ置こうぢやなし、こくあけつぱなしな見とうしな交際をしてゐるんでございます。

夏の夕方なんかにはよく青竹の涼臺を川風の通ふところへもち出して、とりとめのない世間話や、噂話に十二時をきいてびつくりすることもまゝなんでございます。

河岸通りは吉原に廓をもつ人達とか、大商人とかの別宅と云ふようなものか、藝人やお

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

妾の住ひとか、そんな家の多い町でした。――もう隨分前の話ですけど、新派の本郷座が大道具でゑらく當りをとつたことがあります。その時分に二枚目あたりの女形をうごいてゐて、ちよいと小器用な藝を見せてゐた、小ぶとりな男がゐたことがございます。その男の家もこゝにありました。

たしか小島とか申すんでございました。

よくその家の噂は涼臺に持ち出されるのでした。――どう云ふものかその人のお女房(かみ)さんはお近所のおつきあいもせず、何をしてゐるのか一日中ばあや相手に暮してゐる人でございました。大阪なまりのある、意氣でもなけりあ野暮でもない、おかみさんだか奥樣だか一寸けんとうのつかない風をしてゐる、いやみぽい女なんでございます。閑人なこの界隈の女連はこのおかみさんに付いていろ〲と、とりざたを致しましたけど、何にもたしかなことはわからなかつたのでございます。そのうちに誰云ふとなく、そのおかみさんは、何でも小島が大阪の方へ興行に行つたとき、とまつた宿やのおかみさんだつたのが、いつか小島と出來て了つて、子供二人と家を捨てゝ東京へかけ落ちして來たんだと云ふうわさが口々に云はれました。そうして先のお亭主は養子だとか――そんなことも云はれてゐたんでございます。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「何でもたゞちやあないと思ひましたよ」

「あの眼つたら浮氣者らしいんですものね。」よるとさわるとこんなことを言つてはお女房さんの一擧一動をきを付けて見るんでございました。

こんな風に小島のお女房さんにかぎらず、何でもちきに「お話」をこしらへたがる人達は、「お千代とあぐりと柳次」のこともいゝ、噂話の種でございました。

「小娘だつて油斷はなりませんね。ついこの間までよた〳〵してゐた子供達ちやありませんか」

「一體、柳ちやんて子は小生意氣ですよ――」さもさも大事件らしく夕涼の人達は語り合ふのでございました。

ごくなんでもない話なんですけど――。お千代さんて云ふのは、まるで男の子のように、ごくあつさりした、氣風の江戸子らしい娘さんでした。その時分は十五でしたか――もう隨分なりは大きかつたんですけど半巾帶を男結びにむすんで、そう大したいゝ顏といふ方ぢやありませんけれど、長年踊りをみつちりやつてあるんで、しやつきりとしたいゝ姿(すがた)の子でございました。することも萬事男のようで、場合によりやあ、木のぼりぐらいお茶の子といふ風なんでございます。――それに付いてこんな話がありました。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

河岸の家並の間からほんのり薄紅に見えてゐた向ふの土手が、妙に白ぼくなつて來るかと思ふと、それがうすい茶色を帶びて來る――とそれも又、みづ〳〵しい綠に茂つて來る時分になるとこゝいらはもう三社祭の趣向や、お揃ひの相談がもちやがるのでございましたある年河岸からは助六横町の「花瑁」がうでによりをかけて造り上げた「花車」を出すことになつたことがありました。お千代さんはそれを、赤と白とのちりめんのよぢつた綱（つな）で、景氣のいゝ木遣りにつれて曳く男の子がうらやましくて、たらないのでございました。是非女の子にも曳かせるようにと、毎晩お飯がすみさへすればまるで商賣かなんぞのように町内の頭の家へせびりに行つたんでございます。

それでも頭は、笑ひながら、

「いけませんよ、第一女の方ぢや出手がそろやあしませんや、――お千代ちやんばかりぢやどうにもなりますまい。もう今年はだめですから、來年ははだぬぎかなんかで手古舞にでもなつて一番おどろかすんですね」とこんなことを云つては冗談にして了つたんです途々お千代さんもあきらめて了ひましたけど、意地にかゝつて、その年は花車のとほるのを見なかつたそうでございます。――それは七つ位ひの時の話でございます。そんな風なんで河岸の人達皆なに可愛がられて居りました。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「お千代ちやん、お前さん大きくなつて、なんになるの？」ときく人がありますと「女伊達」になるのよ。そいで惡い奴等は皆な斬つちまふの。――いつか芝居が私見てよ源之助がしたのほんとに好きだつたわ」とすまして答へるのでございました。

どうしてですかお千代さんの家ではあんまり學校の方はきびしく言はないようでございました。そうして、まだほんの子供だのに、古いすたれて行く團八節だとか、富本だとか、一風變つた藝ばかり仕こむようでした。――何でもお千代さんのお父さんは浮世繪師とかでございました。

「きつと藝人にでもするつもりなんでせう」

と御近所できめて了ふ程だつたお千代さんが、ふいに今度築地の耶蘇の英語ばかりな學校へ寄宿するといふので、少し思ひの外なので、又例のくせから皆はそこに何かいわくがなけりやさ、氣をまわしはじめるのでございました。それにあんなに仲よしだつたあぐりさんとも、ぷつつりこの頃は行來もしない樣子だつたもんですから……。

だんだん誰にどうきくのか、連中のとりざたによりますと、表通りの船場亭の柳次がことのをこりだと云ふのでございます。――柳次はやつぱり、河岸育ちの一人で、凉臺の仲間へ來ては、自分の家にかゝる落語（はなし）や音曲をうまくまねしてきかせたり、ちいさな時分か

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ら「まがき格子にひきよせられて……」とかなんとか鼻歌かなんかで愛嬌ものなんでございます。今に大した遊び手になりそうな子でございました。

そう云つて見れば少しは思ひあたることがありました。別段二人がお定りのなれそめと云ふわけぢやないんですけど、可成二人は仲がよかつたんでございます。――何でも話によると、柳次がほんとうに、ものにしようとしたのですけど、それがどうも、注文通りに行かなかつたらしいのでございます。

柳次と遊び友達な頭の家の若い者は、お千代さんはほんとうは、柳ちやんが好きだつたんだけど、いくらお轉婆でも、はじめて、あんなことを云はれたのが、恥かしいと見えてまつたく氣まりが悪いので、柳次の云ふなりにならなかつたのが、どうもほんとうらしい「そんな馬鹿は云はないもんよ」とすたく一人で家へ歸つちやつたんだと云ふのでした。と、いつもの二人を知つてゐる人達は思はれました。そう云へばそのころからはあんまり外遊びもしなかつたらしく、お稽古をさらふ、澄んだ聲が時たまきこえるぐらいで、おはこの源の助の聲色も皆なにきかせるようなことはたへてなかへたのでございます。いくらさつくりした氣質の子でも、男の子のようでも、もうかれこれ年頃に近いことですから、お千代さんだつて、まんざら胸がさわがなくもなかつたんでせう……。柳次さんもあんな

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

子のことだから、眞から、一生懸命にお千代さんを想つてゐたんだかどうだかそこは一寸とわかりません……。

その「お千代　柳次」の一幕がしまつて、間もないと思はれる頃から又、今度は「あぐり、柳次」が歌はれるようになつたんでございました。

あぐりさんとは、まつたくうらはうな、ごくしとやかな赤い帶をふつくりお貝の口に結んだ、しほらしい娘さんなのでございます。

河岸の人達は皆なそれを不思議に思つたんでございます。——何是なら、まちがひなんか出來そうにもないあぐりさんが、小指をきつて、起請誓紙も書きかねないような、ことになつて了つて、二人の兩親が、それと知つた時には、もうきるにきれないようなことになつてゐたんだそうでございます。——まつたく皆な不思議に思つたんでございます。さ、ぢきお千代さんが、耶蘇の學校へ寄宿するなんて云ひ出したんで、うわさから噂を辿つた末、いろ〳〵話をとり合せて見るとどうもお千代さんは、柳次をほんとうに想つてゐたらしいんで——勝氣の子だけに、どうも、二人を見てゐるのが苦しいので、妙な、思ひもつかない女學校へ寄宿に行くやうになつたんだと、皆は勝手に察して、勝手にそうにきめて了つたんでございます。

いつかもう、その話が忘れられた頃、――河岸の夜は、又別な話に更けるようになりました。――それは小島のお女房さんが――(お千代さんやあぐちやんのさわぎの間に、俳優の小島は病死したのでございました。)――ある晩、夜逃げをして了つたんでございます。殊勝げに、言ひわけらしく前がみの毛をぶつつり切つて、やつとその毛が根元に、とゞくかとゞかないかなんですのに、よく小島が死ぬ前から、ちよい、いちよい見えてゐた、書生さんが、づつと宿りこんで、お女房さんが夜逃げをするときも、きつと一共だつたにちがひないし、一共だとすると、たゞぢやない、と云ふのでございます。方々借倒して逃げたんでしたとか、借倒された商人たちは、お女房さんのことを、かんではきだしたように惡く言ひました。

お千代さんは日曜日と云ふと、いつも家へかつて來て、時々にはやつぱり元氣らしい聲で近所の小母さん達に西洋人ばかりの學校の樣子などを話してきかせたり、歌をうたつたりして、月曜の朝は車にのつて、又築地へかへつて行くのでございました。

「學校ぢやあね、一週間に二度かお湯へ入れて呉れないのよ、――それも裸ぢやあ、はいれないの、浴衣をきてはいるのよ、びちや〳〵してそりあたまらなく氣味が惡いわ」とお湯であつたあぐりさんにこぼしてゐたそうでございます。――あぐりさんも間もなく

船場亭へ片付いて了ひました。柳次は相變らず、つき合せ前かなんぞで、ぶら〳〵して居るんでした。

——もうこんなことのあつた時分とは、河岸も日一日と變つて行きました。のんきらしく噂話に身を入れてゐた人達もかみつくような、電車の響が耳については、夜を更かすこともないでせう。

——四月十一日夜——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うすゞみ——三ケ島葭——

君により衰ふるとき榮ゆべきは命は朽ちぬいとけなき日に

思ふ子にそゝぐに足らぬかなしさに涸れゆく血こそ躍りそめけれ

ことわりに合せて日毎打たるゝをわれはじめより無理と思ひぬ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

今君に盡くと泣きしも笑まひしもと無き我のいはれなりけむ

みづからを語るにたゆき我ゆゑか追へど慕へど近づきがたし

盡きせじとわがいづれより嘆かまし追へば失ひ失へば追ふ

犧牲となる君が命のうらやましわがことのみを思ふ身なれど

今しばしおちつけるさま見せむなど思ふならねど疲るれば寢る

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あぢきなしおのが命の拙きを不可思議と見る
こともなければ

おのれなほ狂者ならずとあかさんがためにの
みする起居かさびし

あやしみて後あはれむやあはれみを乞ふ我な
ればそのまも待たむ

こゝにしてわが一切は君に盡く今もこん日も
こしかたもなし

とこしへにはた何ものも與ふなとかくれて新
る臆病のわれ

嘆かれぬ取るも捨つるもこの身には正しきこゝ思ひかぬれば

みづからを正しきやなど問ふごときよこしまごゝろ又も加はる

身をのろひまづたましひの死をねがひいまだ一つもかなはずと云ふ

まもられて悲しといふにあらねどもおのが後ろの見がたさに泣く

美しき君が心をほしからぬもの〻一つに數へむとする

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さばかりも深く悲しむ身ならぬをなぐさめられてすこしふためく

悲しきを悲しからずと云ひなほしあやしまれむと思ふならねど

おどろきぬ裏より書きしものならで表に淡くちる墨なれば

與へつゝ取れとは云はず知れといふみ心をしも何となすべき

ほりせずと何をいひけむ疲れたる我には我のねがひありしを

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

殺さんと思ふときのみ生くるかとおのれの前
になげうつ白刄

あなさびしふたゝび君に求むるはその心を
捨つるなりけり

君ありて我に驚くことありぬいづちむかひて
かくと叫ばむ

誘はれぬ君はすべての君なるも我はすべての
我にあらねば

みづからを幸無きものと思ひしは悲しきこと
にあらざりしかな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

疲るゝは命ならずと聞きぬその命のほかに生
くる我かも

死にあらじ影にもあらじあはれいとさびしき
我の生くるなりけり

戀ふるをばおのれの罪となす如き悲しき身も
てなど逢ひにけむ

きはだゝん三日を一日とおしなべぬ君がきの
ふをわが明日として

かなしみになぐさめられて生くる身か人と生
れしよろこびに死ぬ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

我に問ふおのが弱さを知ることの多きに過ぎてあやまりし身か

あはれみなあやまりなればこのまゝにしばしも早くなげいださまし

いとほしさ身にもおぼえずみ心にたづさはるてふことのかなしさ

開きてもゝのゝかゞやき入らぬ眼を閉づと答へてのがれむとする

今知るといふにあらねどおのゝきぬ捨てられたるは捨てしなること

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

飽きにけりわがおろかなる性のみがおどろける身のおだやかさにも

そこはたゝたましひ死するところぞと聞くもまことゝ思へば險し

臆病のわれと耻ぢしが嘆きしが臆すべきこそわが身なりけれ

われむしろこの悲みをきはめんと思へるはなほにげみなるかな

くるしさに思ひとまりし心をもそむくと思へのがれしと見よ

愛でたまへあらゆるものが捨てしてふそのこ
とにいとおもむきあれば
よるべなき身にしるきこと祈るかな君がゆら
ぎのはてしなかれと

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

死に行くみち　―深見よし―

櫻ちる
ヒイラリ、ヒラリ櫻ちる
思ひ泌まるゝ我れらが戀かな

さくら、さくら
ほのに明るく咲きてあり
想ふ同士が死に行くみち

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

心中の男、女の屍が
横たはるによき
春の若草

世の隅に
我れが爪彈く三味にだに
心吸はるゝ男ありとや

思ひ死ぬか
思ひ捨つとかいづれとも
なれかしたゞに戀なるせつなさ

春の雨
青き木の芽に草の芽に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しと〱しぶき三月は逝く
よいことが
ありさうでなきもどかしさ
鹽ゑんどうをぱり〱と嚙む

しら〲しき
氣やすめごとをかにかくと
言ひたまふほど君は世馴(な)れぬ

櫻咲く
日本(やまと)の國は櫻さき
うすもゝ色の國となりぬる
思はれてある

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

身には餘りじみ過ぎん
着物の柄がいたく苦になる

黄なる壁に
本の表紙に戸障子に
見るものに皆君が顔うく

我がこゝろ
吸取紙に吸はれ行く
インクの如く君に吸はるゝ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

鬚のびし男 ―原田　琴―

春の夜は二人三人が爭ひて來よと思ひぬいみじと泣かん

あまりにも歌ふ少女とゝがありて春の最中のかろき病ひ

鬚のびし寒き男が逢ひに來ぬおぼろ月夜に少女の家に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

曲もなき唱歌うたへる少女等に七日変りて頬のあれにける

うしろより君をながめてつくづくと縞の羽織がゝなしくなりぬ

脊を撫でゝまた明日といふ力なき別の君に寒き春の夜

君にゆきてかへらぬわれとあやまちぬひとり泣く身をひとりぬる身を

泣きぬれて君とわれある春の夜に月も淋しや花もさびしや

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜社詠草

青木　穠

美しきこひのはなしをきくものか人なつかしき春の夕べに

すぎし夜のこゝろよかりしあやまちをくりかへせとや春雨の降る

珍らしく別れてあればうらめしきまでに戀しう君のまたるゝ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かへり來し君かみ胸にわけもなくすがりてなきておどろかしつる

うちふるふこごめ櫻のしほらしき枝にふさはし我がこの涙

ゆるされてわれもゆるして二人すむ清きこの世のなどか寂しき

わか草のもえいづる野邊にたちいでゝ我がふむ道をわが身ひらかむ

岩淵百合

椿　椿　はてなく君をおもふとき赤き椿の地に墜ちにけり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あるかぎり幸を享くよりこの愁抱きて世に生く心安かり

かたわらに寂しく光る銀の壺わが生涯を秘めをけるつぼ

新内の三味線弾きのうしろより二月の風がいぢらしく鳴る

理に迷ふ戀のこゝろのあぢきなさはかなさ赤き椿地に墜つ

わが生命かゝる世にありかなしみか幸かは知らず生命世にあり

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

老ひてゆく我世のはてか身のはてか涙わりなし二月の春

原　阿佐緒

この母が泣き流す血の涙もて汝が幸ひをかへし得ばかへし得ば

今日吾を思ふと云へる人のみなかたきとならむ日の來ざらめや

冷やかに君をば見得る心の眼いつより吾にそなはりにけむ

この悔のこのかなしみの身に消ゆる日なくばつひに病みて死ぬべき

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

寂しくもわれからつくるかなしみにおぼれて
身をも破らむとする

あはれなるあきらめにつく親に得し身をも心
もかたはとはして

吾ばかり大人(おとな)のごとくおもひなすわろき癖さ
へつきしさびしさ

身を思ふこゝろいつしか人思ふ涙とかはるわ
りなき日かな

限りなきさげすみをさへあたへまし三とせが
ほどの戀のむくいに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

いつはりをまじへずさらば別れむと吾なたらかにいひも得べきや

やるせなきわがねがひかなせめてそのいつはりだにもつゝけと思ふ

あなけうとものゝはづみにのたまひしそのひと言に胸暗うなる

初めよりわがものならぬ君なれば捨つなどいふもけうとしけうとし

岡本かの

勝ちほこりかへる女と春雨に小鳥のごとく袂しぼめぬ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

僞か僞なるも美しき僞よとて君を愛でける

しみじみと君をなだむるわが言葉いつしかわれを泣かせてありぬ

あれもまたこれもゆるさんかにかくに三年四年を添ひ來し君なり

しばらくは霰のごとくのゝしりてあとさめざめと泣き沈むかな

われよりも弱きものありほろ〳〵と春の夕を山吹の散る

六月號豫告

近代人の告白 ―飜譯― ……野上彌生子
響の影 ―飜譯― ……伊藤野枝
新しき幸多き國へ ―飜譯― ……增田初
未來の王國 ―飜譯― ……淺野友
戀愛と結婚 ―飜譯― ……らいてう
題未定 ―小說― ……藤岡一枝
髮 ―小說― ……杉本正生
題未定 ―小說― ……水野仙
ながれ ―小說― ……小林歌津
入學 ―小說― ……白雨
一年間 ―長編― ……らいてう
小品三編 ……野枝
短歌 ……三ケ島葭

外 青鞜詠草
編輯室にて

事務所移轉

府下巣鴨町字巣鴨一一六三

面會日　毎週金曜日　午後一時―四時

らいてう　白雨

中野　歡津　野枝

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

編輯室より

□これからは地方の社員も、東京の社員も共に勉強して行かれるさ、あれほどまじめにして居た本社の研究會もその講義錄も一時中止しなければならないやうなことになつてしまいました。

私共内部の者は其迄どんなに苦しい思ひをして懸命に働いて見たか知れません。

白雨はこの方の責任をもつてわざ〳〵湘南の地から東京へ引越して迄來た位でした。それだのにこんな報告を社員方に提さればならぬさいふ事は、誠に殘念なことでございます。悲しいことでございます。けれども本社に對する社會の誤解は隨分烈しいものでした。その爲め教育家や父兄は只々本社を恐るべきもの、危險なるものさして、入會しやうさする人々の上に色々な抑壓を加へました。それで一旦入會された人迄も止むを得ないからさいふやうなことで引續いて取消しを申込まれたりしたものですから、あまりに少數で成立の見込が立たなくなりました。私共はたさへ二人でも三人でも始めたいのは山々でございます。それ丈の熱心も勇氣ももつて居ります。けれどあまりに少數の者のために多數の先生方を煩はすことも出來ませんさかういふ際にたつて開くさいふことは經濟上の基礎がまだ強固でない今の社にさつては大變困難なことになつて參りました。その上目下の私共は何よりも自分を育てゝ行かればなりません。自分の生活を充實させるさいふことに全力を注がればなりませんから、理解もない世間を相手にしてゐるやうな餘裕もありません。それで誠に殘念ですがしばらく中止し、各自で靜かに研究することにし、その内よき機を見て開くことにいたしましたから折角あてにして入らしつた方は御怒りなさらないやうに願ひます。講義錄をたのしんでゐらしつた地方の社員方もあしからずお推察下さい。其内に皆樣の御要求に應じたい考へですから。

□生田先生（長江氏）が本社と特別に深い關係ある方のやうに世間の人々が考へてゐられるやうですが、それば先生に於ても定めし御迷惑させられることだらうと思ひます。ここに本社に關する一切の責任は最後まで只私共同人の上にあることを明にしておきます。

□青鞜社事務所は左に移轉しました。

東京府下巣鴨町字巣鴨一一六三。

□五月から毎月第一日曜日の午後一時から五時迄を東京社員の談話會の日と定めましたから事務所の方へ御出下さいまし。電車は巣鴨行に乘りまして、巣鴨橋で下車し、派出所に添ふて左に折れ、宮下橋の手前を左折

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

した四軒目でございます。

□五月から毎週金曜日午後一時より四時半迄、を面會日と定めました。內部の者、らいてう、白雨、中野、小林歌津、伊藤野枝の五人は事務所に集つて居りますから入らしつて下さい。なほらいてうは今後自宅ではあまり面會しないことに定めましたから、同氏に其用の方は矢張當日事務所の方へ御出下さい。

□らいてうは十日ばかり前からひどい熱に苦しめられてずつと床について居ます。で、一年間も「戀愛と結婚」も今回は休みます。そのかはりに矢張エレンケイの「戀愛と道德」を同氏の病氣の間掲載いたしますからこれはいづれ近い中まとめて出版する筈でございますが。

□岩野清子氏は左記の處へ移轉されました。

東京府下巢鴨村字宮仲二五、一三

□松本正生氏も近い內京都の母君を呼ばれて東京に住むやうになさるさうです。

□柴田かよ子氏目下在京中。

□廿五日午前十時迄に出頭しろと云ふ葉書が警視廳の高等檢閱係から來ました。

兎も角もと云ふので白雨と、中野さんが出かけて見ました。

呼び出しの要件は次のやうな極簡單な事でした。

「實は青鞜の事なんですが――あなたの方の雜誌を見ると日本婦人在來の美德を亂すやうなところが澤山あります。

今月の雜誌も發賣禁止をするところだつたのですが、それよりも、編輯者の當人を呼んで御話しゝてこの考へを傳へた方がいゝかと思つたからです。

何しろこれから雜誌を嚴重に取り締りますから風俗秩序を亂すやうな文句には特に注意をして貰いたい」といふことでした。

其他社に對する二三の注意をおとなしくきいて歸つて來ました。

寄贈雜誌

早稻田文學　スバル　三田文學　相對

中央公論　シバヰ　白樺　南國

現代　歌舞伎　ホトヽギス　アラヽギ

藝術　新人　圖書評論　モザイク

劇と詩　壁　馬上大學　みつふ

詩歌　學鐙　近代思想　心の花

藝文　層雲　六合雜誌　野の聲

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

聖盃　毒茶　帝國文學　新文林
奇蹟　土佐圖書倶樂部　あさみどり　朱欒
讀書の友　くろれこ　赤裸　新女界
新小說　女子文壇

寄贈書籍

木靈（歌集）（非賣品）　社員青木穰著
渚より（歌集）（定價三十五錢）　藤元夕水著　劇と詩社發行
オスカーワイルド警句集（定價四十錢）　生方敏郎　新潮社發行
ショオ作運命の人（定價四十錢）　楠山正雄譯　現代社發行
旅裝（歌集）（定價四十五錢）　內藤銀策著　抒情詩社發行
大日本閨門史（定價貳圓五十錢）　白柳秀湖著　東亞堂發行
ベルグソンの哲學（定價七拾錢）　錦田義富譯　警醒社發行
蘇生の日
ヘダガブラア（定價各四十錢）　イプセン作　千葉掬香譯
建築師　警醒社發行

新刊紹介

一、ベルグソンの哲學

アンリイ、ベルクソン著
錦田義富氏譯
桑木嚴翼氏序

「直觀哲學」と「流動哲學」の上下よりなる。前者はベルグソンが千九百三年正月「形而上學及倫理學評論」に揭げた論文「形而上學への序論」を、後者は一昨年春オックスフォード大學に於て試みられた二回講演「變化の知覺」を譯したもの。標題を改めたのは內容を一層適切に表示せむがためだといふ。即ち直觀哲學では主に方法論上の議論がしてあり、流動哲學では主に本體論上の議論がしてある。譯者は平易を主とし、親切な解說まで施されてゐる。なほ卷頭には著者最新の寫眞あり、はしがきには其小傳を記し、附錄として著作及關係書目錄がのせてある。ベルグソン研究者にとつては頗る有益なもの。四六判、二〇八頁、定價七拾錢。發行所警醒社書店。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

籍青

一、蘇生の日
一、ヘダ、ガブラア
一、建築師

イブセン作
千葉掬香譯

明治四十二年頃に出版されたのの再版である。三部ともそろつた手頃なそして安價なもの。卷末にはイブセン著作年表が出てゐる。蘇生の日とヘダには逍遙氏、建築師には鷗外氏の序がある。定價四拾錢、發行所警醒堂書店。

タイプライター練習所
英文速記教授
巣鴨町字巣鴨一丁三五
高田眞琴

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

附錄

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

戀愛と道德 ―エレン、ケイ―

戀愛のために個人の幸福と社會の安寧とが屢々衝突することがある。此の時に現在の義務と云ふ觀念が社會に對する個人の絶對無條件の犧牲を要求する。私共はこういふことを屢々耳にする。凡そ國家として缺くべからざるものは健全なる父母であり、而して彼等の確固たる永久の結合はその子孫の敎育を安全ならしむるものである。そうして、この要求が個人の幸福に對して干渉する場合には、個人は何時でも犧牲の位置に立たなければならない。この個人が禍を蒙むると云ふことが直ちに結婚の羈絆をゆるめなければならぬといふ理由にはならない。而して兩親の大多數が子供と云ふものは家庭に於て最もよく養育せられるものであると云ふ意見を抱いてゐる間はその樣な理由は確かに成り立ちはしないのである。であるから國家といふものは結婚制度の變化如何に由つて何等の影響をも蒙むるものではない。又離婚を容易ならしむると云ふことが人間の密接なる關係によつて常に生ずる不和合の原因を除去する手段にもならない。例令現在の結婚制度が最も進步發達したる階級にある男女の要求に背くものであつても、かの、少數を利し多數に有害なる革新と、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

多數を利し少數に禍する現在の制度とを比較選擇する場合にあたつては全體として社會を利する現狀を認容しなければならない。現代に於て離婚を容易ならしむるは徒らに離散を事とし、結婚制度を極めて放肆なものと化し、その結果として、先づ家庭は破壞せられ次で國民の滅亡を惹き起すに至るのみである。故に幸福を要求する戀愛は國家の安寧秩序を破壞する純然たる叛逆である。幸福は戀愛個人主義によつて遂行せられるといふ理論は歷史と人種誌と自然との等しく架擔せぬところである、而して靜かなる克己と勇氣ある義務の完成とが常に敎へられなければならない。子供の出生と共に、その兩親の幸福は停止せられなければならない。若し兩親にして自己の幸福を犧牲にしない時は自然はその法則によつて彼等の罪を子供に報ひ、以て彼等の義務の怠慢を罰するであらう。

斯くの如きものが所謂世俗の義務論である。この義務論は獨り戀愛ばかりでなくその他の人間の關係にも種々なる影響を及ぼしてゐる。而してこの議論中にひそむ大なる誤謬は社會の安寧秩序は必然に個人の犧牲によつて成就せられると云ふ觀念である。而してこの理論を明かにする爲めに擧げらるゝ證據も亦等しく虛僞である。かの歷史と謂ひ人種誌といふものゝ示めすところは我々が人性と呼ぶものゝ所作にすぎない。而して人性なるものは元來時代と國民性と風土につれて絕えず變化する現象である。その現象によつて見るに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『自然』なるものは一面に命ずる處を他面に禁じ、一方に否定せられる時はそれを他方に要求してゐる。例令へば佛蘭西に於て今日最も進んだ非離婚論の如きは『再婚は自然に反す』とか『婦人は家庭以外に於て決して眞の母たる能はず』とか或は『家庭は吾人の理性によつて左右せらるゝものにあらずして社會學或は生物學によつて證明せられたる『自然の法則』に準據するものなり。』といふが如き類である。かくの如き議論は特に佛蘭西に於てかの離婚しがたき結婚制の陰影として『自然の法則』の生んだ姦淫を忘れがたいものにするのである。所謂結婚に對するあらゆる辯護はかの『哀れむべき人々の外交術と稱するものは眞理を僞はり存在せるものを否定することによつて成立す。』と云つたラザールの言葉を確むるものである。かくの如き議論を聞いて人は結婚の攻擊は夢の如く美はしき牧歌を破壞せんとするものであると想像するかも知れない。併しながら現今の結婚制度は實に寒心すべきものがある。私等は先づ來るべき新制度に伴ふあらゆる危險を豫想した上で現今の制度と比較研究の結果孰れが更に恐ろしいものであるかを認めなければならない。よし今の社會狀態が多くの不德と不幸との原因でなかつたとしても、問題は『近代の結婚制度は善良にして果してよく社會の需用に應ずるものなりや』と云ふのではなく『奈何にせば吾人は種族改善の爲め現在のそれより更らに有効なる道德律を發見し得るや』と云ふにある。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『戀愛と結婚』の根本思想は、個人が戀愛關係によつて最高の幸福を享樂しなければならないといふのではなく、個人の幸福が即がて種族の改善に資するが如く社會が矯正せられなければならないといふのであつた。

『戀愛と結婚』の中に私は一夫一婦——即ち一生を通じての戀愛關係を以て兩性間に存する唯一の道德的關係であると主張する人々はかくの如き道德律の結果として生ずる多大なる生活力の浪費を無視するものであることを指摘して置いた。若しその生活力が利用せられるなら立派なる子孫を生じ人種の改善に功献する處があつたかも計られないのである。然るに一方社會の惡分子は何等の道德律にも束縛せられずして彼等の同族を蕃殖せしめてゐるのである。かくの如く調子高き理想主義は中世紀の修道院に於けるが如き同一の結果を生ずるであらう。而して現在の如き社會狀態にあつてはかくの如き道德律は例令進化の趨勢が疑ひもなく最終の目標として眞の戀愛的結合に向ふにもせよ或はまた結婚如何に關せず兩性の結合に於て靈肉の一致が眞に貞潔の條件として確認せらるゝとも人種の改善を妨ぐることは免ぬかれないであらう。

種族の爲めと云ふ見解から見ると法律上及び宗敎上の道德の形式は今日に於ける最も進歩發達せる性的意識並びにその道德に拮抗して充分にその論據を維持して行くことは出來

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ないのである。道德なるものは科學が不斷の努力を以て既に發見し、又發見せんとしつゝある種族改善のために都合よき條件を支配せる律法中に新しき標準を求むると同時にそれ自からの中にも求めてゐるのである。此等の律法と此の意識は私の前の著述にも指摘した如く時として相爭ふかも知れない。例令へば性的理想主義者は戀愛を以て父母たることの唯一の條件なりと主張する。人種改良論者は多くの立派なる子供がその子供の父を少しも愛せざりし母より出生せりとの事實を主張する。性的理想主義者は戀愛の結合を主張し、改良論者は貞淑を以て不生産に對する多大なる責任を有すと云ひ、種族に對する浪費なりと叫ぶ。理想主義者は愛情の最も濃やかなる兩親を以て最上なりと辯護する。改良論者は人道の爲め最も必要なる事は男女が戀愛結婚の如何に關らず、父母たることの資格に於て最も適當なるものゝ結合ならざるべからざるを主張する。彼等はその例として結婚の條件に何等の戀愛をも加味せず、しかも永く强力なる存在を維持し來つた國民を擧げてゐる。理想主義者はそれに答へて國民の維持といふこともさることながら靈性の高揚と云ふこともまた忘るゝ能はざる事柄であると云つてゐる。國民はその下劣なる性格によつて存在もすれば又その高貴なる性格によつて存在もするのである。種族は遺傳せられたる野蠻性と動物的特質を自然淘汰にて根絶することによつてのみ向上せられるのである。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

この見解よりして見る時は人生に於けるその他の問題も皆種族の向上を以つて目的とするものであると見做されなければならない。成金の子供達は通則として強く美はしく健全なるものであらうか？若し然らずば富を狂熱的に追求することは種族の改善に間接のみならず直接の妨害として排斥せられなければならない。又此處に戀愛を感ぜざるも父母たるに適したる男女が獨身生活を續けて苦しむよりも結婚して社會に健全なる子供を提供し以て以前より更に滿足なる生活を送り得るとしたならば或は又戀愛を相互に感ずるも永久單一なる戀愛を持續することを能はざる男女があるとすれば、かの單一戀愛理想主義者は最早その戀愛の標準を彼等の上に強ふるの權能を有せざるものである。

併しながらそれは自己の主義以外に彼等の理想を認めざる青年の間にあつて特に企てらるゝことが多い。かの若き『自由思想家』等でさへ自由な寛大な態度を以て性の問題には向はないのである。彼等は唯だ僅かに可能なる二途あるのみと思惟してゐる樣に思はれる――即ち慾望の奴隷となるか或は義務の奴隷となるか二者の一を選ぶにある。而してその他の人々に至つては徒らに『鐵鎖を求め埒內に止まらんこと』のみを希ふてゐる。彼等は只管に時間表、出帆日程或はクックの旅行案內を打眺めて旅行の安全ならんことのみを欲してゐる。かくの如くしてかの自己の責任の上に立ち自己の危險を賭して新しき道を開拓

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

拓し新しき國を發見せんと只管に猛進するの勇氣を何處に認むる事が出來やう。かの『眞理の探求者』を以て自任する若き人々さへこの問題を取り扱ふ時にあたつて起り來る矛盾に對し徒らに唸くのみである。然しかくの如き人々は人生なるものが戀愛中に最も矛盾せる形を表はしてゐるものであることを忘却してゐるのである。人生は由來活物である、故に容易に捕捉しがたいものである。人生は一定不變のものではなく、常に千變萬化して生長してゆく、而して神秘の道程に沿ふて全ての生物を導き、吾人の哲學中にあつて夢にも見る能はざるものを示してくれるものである事を彼等は知らないのであらうか。人生は吾人の期待せざる種々の運命と驚異すべき經驗を貯へ吾人の先見し能はざる幾多の蓄を藏するものなる事を彼等は瞥見することが出來ないのでならうか。人生の美しさはその容易に打算し能はざる處に存し、人生に於ける偉大なる事業とは人生に横はる幾多の不安をものともせず次第に高峰を仰いで攀登するにありといふ事を彼等は感じないのであらうか。

若し吾人にしてこの事實を認め得たならば例令それが如何程崇高なるものにもせよ一定不變の理想と云ふが如きものを要求することはないであらう。自己のみの理想と雖も明白にはそれが一般のものと變じ、更らに又新らしき理想が生れて、それを破壞するものであるといふことを知つてゐる人にとつてこの無限なる人生が單一無二の標準によつて推移

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

して行かなければならいと云ふ思想程恐ろしいものはないであらう。

かくして理想主義なるものは各人が皆な自己の理想を最高なるものの如く思惟し例令それが他の人々に如何程馬鹿々々しく或は不必要に、更に又恥かしきものと見ゆるとも當人はそれが爲めに生死を共にして悔ひないものであるといふことを認める事が出來る。

理想主義者とは恰かも重き鐵槌を振りまはし義務と云ふ概念の砂礫を道路に打ち込み以て他人の旅行を容易ならしめんと企てるが如き人である。然しながら、地上の道路は無限に延長せられ、兩極より赤道に至る迄無數の風習と氣質とを異にする人生が横はつてゐるのである。かくの如き多變の人生に對し唯一無二の道德的標準として生涯不變の戀愛說を主張せんとするが如きは思ふだに愚なることである。

かくの如く主張する人々は自已の思想を同種類の隣人によつて定められたる陜隘なる圏外に彷徨ひ出づることを許さなかつた。彼は又理想なるものは大多數の人々には不可解なるものであつて若し一度それを絕對なるものとして一般人類の上に强ふる時は全く排斥せられるものであるといふことを忘れてゐる。

自己の精神より溢れ出づる信念を宣言すると云ふ事は他人に對して同一の精神狀態を要求するといふ事ではない。併しながら人が自己の敎訓或は生涯によつて彼の所信を發表す

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る時は自然自己と同一なる精神狀態の擴張を促がす樣になる。他の人々は彼の影響を受けて自己の精神上の修養及び自己の生涯の法則を彼に則とらんとする樣になる。併し彼は主觀的に自己を宣言する時に彼の仕事はそれを以て終りを告げてゐるのである。

全ての社會問題、習俗、慣習、快樂等が悉く人種上に及ぼす効果如何によつて規矩せられるといふならば早晩ある絕對の標準を定めて吾人は悉くそれに準據しなければならないやうになるであらう。併しながら先づそれは初めによく研究せられなければならない。歐洲に於ては一夫一婦制は絕對の道德律として定められてゐる。そうして國民の健康と維持に對する必須の條件となつてゐる。併しながら近代の日本人及び古への希伯來人の如き不屈なる國民中にあつて吾人は蓄妾が律法と習慣とによりて定められたる制度なることを發見する。

結婚が深き個人的戀愛より成立せらるゝ國民は他の國民に對して不利な地位に立たなければならない。而して遂には滅亡に立至らなければならぬやうになる。何故なら深い個人的戀愛と云ふものは未だ例外であつて人はその爲めに高い價を拂はなければならない。その上他の人々に對して自己の行爲を充分なる道德的要求として課するの勇氣を有してゐないからである。

かくの如き種々なる理由から私は『戀愛と結婚』の中に近代に於ける性の問題は一方に於て種族の改善に對する要求を認め、他方に於ては戀愛によつて幸福を發見せんと個人の要求の增加を對峙せしめて適當なる平衡を發見する處に成立するのであると說いて置いた。

然るに以前この問題は一定の結婚の形式に對する社會の要求と、如何なる形式に於ても自己の性的生活の滿足を得んとする個人の要求の間に存してゐた。この新しき平衡より出發する性の道德こそ唯一にして眞實なる道德となるであらう。而して種族と個人はそれによつて大なる影響を受け人生は次第に向上せらるるであらう。

私が又、『戀愛と結婚』中に指摘して置いた如く性の問題は即ち生の問題である。そうして社會安寧幸福の問題である。この問題に比する時、自餘の諸問題は殆んど無意義なるが如き感がある。凡そ教育と謂ひ智力並びに宗教上のあらゆる修養努力といふもそれを決定する主たる問題として人類の向上を念頭に置く迄は淺薄たるを免かれない。吾人はこれまで各時代に於ける個人の自己改善を通じてなされたるのみならず、その開發せらるるに從つて種族の繁殖を定むるもろ／＼の條件を認識する淘汰的本能を通じて行はれたる、人類の向上に努力しなければならない。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とはいへ私は人種改良の偏見に對して『戀愛と結婚』の中に人類は戀愛中に種族の向上發展に最も効果ある淘汰の方法を發見したと云ふ假説を敍べて置いた。併しながら熱心なる眞理の追求者は證明せられざる假説を爭ふべからざる原理なりとしてかかぐるが如き事は到底思ひも及ばざる事である。私の主として求めたものは戀愛の自由と云ふ事であつた。それによつて私共はその効果を觀察するの機會を多く與へられんが爲めである。私はまた、遺傳の影響といふものを研究する上から戀愛の効果といふことに多大の注意が拂はれなければならないと云ふ事を力説した。祖先の特性を遺傳する樣々なる結合に絶えず洞察の眼を放ち、以て人生の種々なる方面が次第に高き水準(レベル)に昇り行く淘汰の諸法則をよりよく發見し、淘汰をして最善の性質を保存せしめ、最惡なるを根絶せしむる爲めにこれ等の諸法則と道德的に結合せしむるはこれこそ誠に進化の一般の目的であると云はれなければならない。

進化の一要素として唯一戀愛の必要を深く認むる人々でさへもそれ以外になほ多くの諸要素の存在を認容しなければならない。いかに熱狂なる理想主義と雖もそれ等を進化の過程中より除去することは出來ないのである。

二個の細胞と二個の細胞精神より吾人の複雜なる存在を創造し、現在に於て種族を決定

する諸種の結婚の形式と戀愛の理想とを生み出せる生命の力は數億萬年以前に始められたる進化の連鎖中に於ける一鎖環に過ぎぬのである。而して吾人はこの戀愛の進化が何等前定せられたる理想の模型もなくして遂行せられたるを知るが故に、愛の神(エロス)は現在の上に吾人が今や曙光の自覺を有し始めつつある理想的樣式を道德的標準として課することなく依然として渾沌たる性的關係中より世界の改造を持續するであらうといふことを疑ふに都合よき何等の理由もないのである。一方に於て又この問題が全く『自然的本能』或は官能の滿足に委し去らるべきものと考ふる人々、或はその善惡正邪は偏に神聖なる本能によつて定めらるべきであると信じてゐる人々は諸々の理想を創造する人間の力が永く進化の一要素であり、現在に於ける唯一の問題は『如何にせばこの力が進化中にあつて有益なる一動力となされ得るか』といふことであるのを忘却してゐる。

人種の改善に力を傾注すると云ふことは『戀愛と結婚』の中に私が説明して置いた通り現在の渾沌たる戀愛の狀態より單一個人的戀愛に至る橋梁を架設するが如きものである。これは又戀愛がその不合理なる性質を免かるる唯一の道である。ゲーテは且て『戀愛に於て凡ては冒險である、何故なれば凡てが機會にのみ待たなければならないからである』と云つた。併しながら全てこれは未だ發見せられざる法則に對する他の名稱に過ぎない。何

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

時か我々は靈肉の愛情的不調和並びに或る人々の間に存する心理的不調和が消滅せるの日に到達するであらう。何故なれば最高の幸福を經驗するといふことは萬人の欲求であるからである。而して最高の幸福は心理的必然から多くの小なる感情を除去する寛大なる感情によつてのみ達せられるのである。然しながら前途は未だ極めて遼遠である。而してその間にあつてある人々はある個人に對して彼等の理想の完全なる體現を求めて得ざりしがために幾度も戀するのである。かくの如き人々は或る一人にその理想の一方面を發見し、又或る他の人にその理想の他面を發見する人々である。又ある人々は新なる精神の伴侶を發見する時は恰かも且て起らざりしが如く彼等の以前經來つた經驗を悉く忘れ去るのである。或はまた一度深き戀愛に誤まられたる後最早進んで新なる經驗を味はんとする能力を失ふが如き人々もある。

『戀愛と結婚』は新なる献身の念を有つて人生の賜物を保護せんと決心せる若き人々に與へられたのであつた。故にそれ等の人々は道德的法則が石碑の上に書かれたるに非ずして血肉の上に書かれたるものであるといふことを知つてゐる。而して彼等は戀愛中に發見する高尙なる幸福は人生に對する高貴なる職務にして神に仕ふるより敬虔の念に於て遙かに優れたるものであると感じてゐる。併しながら何處に戀愛の自由が終り新代の權能が始ま

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

るかは又彼等の決定しなければならない問題である。

生理的にも心理的にも最上の子孫を作る種々なる條件に對して吾人の智識は未だ極めて乏しいのである。故に戀愛理想主義者の信仰はかの進化の事實を無視せずと稱する人々に比して更らに大なる社會的讓步を得ることは出來ないのである。

當然要求せらるべきすべての社會的讓步のうち、最も根本的なるものは父母たるの道が結婚の儀式によるにあらずして、彼等の子供に對する責任を明かに、進んで認むる二個の男女の意志によつて定められなければならないと云ふことである。又、第二に主張せらるべき社會的讓步は離婚が配偶者の一方の意志によつて決定せられなければならないといふことと、而して男女が結婚上の權利に於て同等でなければならないと云ふことである。

それ故、社會は從來の如く夫と妻とが如何なる逆境にもせよ單に共同生活を持續して行き、而して如何程不完全にもせよ彼等の子供を養育して行くならばそれを以て滿足してゐたのである。かくの如き間は新しき義務の觀念が生の向上を助けるであらう。何故なればこれ等の新しき原則は幸福と結合せられたる義務、權利と結合せられたる責任の組織的成長に對するあらゆる先要條件を有すると同時に日々に一般の勢力を有せんとしつゝある全ての宗教、道德、經濟上の理想と權利、義務、幸福、責任の組織的結合に對しても又先要

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

條件を有してゐるのである。更らに又、これ等の諸原則はその適應が人間精神の協力並びに風習の一般化に必要なる程度に於て今日と雖も現狀態に適應されることが出來る。かくして低級なる人々は高級の人々によつて敎育せらるるであらう。

一般社會に於ても又個人の場合に於ても、全ての新しき形式を通じて充分なる力の發揮を試み、豐富なる變化を與へ、同時に完全なる結合を呼び起す企ては常に進化の過程に一歩を進めることを意味するのである。若しも社會にして全ての子供を同樣に保護し個人をして彼等の戀愛を保護することを許したなら現在二つの異なれる方向に放射しつつある精神的生活の勢力は更らに焦點に集められるであらう。子供の根本的生活に對する責任の感情は正出といふ俗見によつて弱められ、子供の養育に對する責任の感情は私生なりといふ俗見によつて又弱められる。

戀愛を更らに向上せしむるの努力は即がて戀愛が生命を得、幸福を與ふる衝動となるのである。この衝動の停止は直ちに戀愛の死となるのである――離婚の自由によつて現在の結婚制度が終りを告ぐると同時にこの努力は無限の力をもつて猛進するであらう。

屢々駁論に於て例證せらるる如く自由結婚に於ても戀愛の死するといふ事は事實である、然しこれは自由離婚によつて實現せらるる美はしき戀愛の可能を否定する何物をも證

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

據立てゝはゐない。而して自由結婚が屢々破壞せられるのは社會が自由結婚者を迫害するに多く起因してゐる。現在に於てすら法律は離婚に對して最も僅かの制裁をしか加へてはゐない、離婚を妨ぐるものは寧ろデリケートな感情、優しき良心、同情などいふ心理狀態である。故に自由離婚は眞面目なる人々をして徒らに多大の自由を享樂せしむるものであるといふ反對論があるが、これは一應尤もな次第である。結局離婚問題はそれが現在の不幸を豫防するとかしないとかいふ問題ではないのである。その主たる問題はその心理的効果が漸次美はしく權威ある戀愛生活を創造するに與かつて力あるといふ點である。

この證據は今迄繼續せられてきた努力中に發見し得られるのである。兩親がその子供の結婚――特に娘等の――を定めた時でも、或は『私は自分の戀人を得られるであらうかどうであらう?』といふのが第一の問題であつた場合に於ても大體の上から觀察する時は當時の戀愛といふものは非常に精神的の性質を缺いてゐた。又全精神生活の上には殆んど何等の影響をも及ぼさず、内的調和といふ樣なものの上にも別段の要求を持つてゐなかつた要するに只だ外部の事にのみ力瘤が入れられたのであつた。併し現今では若き戀人等が通常自己の運命を定める時には、如何に豐富な色彩ある新しき精神的感覺、情緒、感動を示すかは彼等の靈性を洞察すの特權を有する人々には明かである。最も精神的な女子は自己

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の撰擇に對して最も個人主義的な意志を現はしてゐる、若し彼女の情熱が呼び醒される前に男子の熱い息が額にかかる樣なことがあればその男子の慾望の微かな豫感すら彼女の感情を枯してしまふであらう。而して高尙な青年の間にもそれに對する同一の意志が徐々に發達して靜かに自己の撰擇すべき女子を待ち望んでゐる、そうして女子よりも迅速に進む慾求を止めてゐる。

これ等の青年男女は既に長途の旅程を經過し、戀愛を通過して『自からを投げ出す』危險には陷ることがないのである。約言すれば、自由が開放した其勢力が自由の危險なる結果を防止してゐるのである。

『戀愛と結婚』の中に性的關係が普遍にして決斷的なる意義と神聖を以て飾られなければならないといふ確信を私はこんな風に云ひ表はした。——戀愛は曾て諸國民が敬虔の念を以て人生を眺めた時彼等の宗敎であつた樣に再び高き標準の上に立つ吾人の宗敎でなければならないと——。

人生の目的は人生それ自からである。戀愛は人生の宗敎である。否獨り戀愛のみならず人生のあらゆる精神的發想、創作、眞理探求、美に對する歡喜、或は勞働の如き一として宗敎ならざるはないと云つたゲーテの言葉は萬人に對して眞である。これ等は人生の全體

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に關聯してゐる程度に從つて各一つの宗教である。言葉を換へて云へばあらゆる宗教は全てを包含する調和の感情といふ宗教中に消え去るのである。その感情に對しては人生の向上は唯一の適宜なる神聖の奉仕であつて、一般生活の默示は日常の祈禱である。この禮拜は時代より時代に生命の焔を搬ぶ力に對して特に捧げられなければならないであらう。而してその禮拜が眞摯にして敬虔の度を增すに從ひ各時代は前代より次第にその程度を高むるであらう。

人類が種族を維持して行く他の方法を發見する迄は性的關係が地上に於ける生の根原であることは否むべからざる事である。故に進化論上より見たる人生觀は性的關係を以て凡ゆる人生の進步に對する出發點と見做さなければならない。而して人生の發達進步に對する種々なる要求と性の道德的觀念を調和せしめ、性の全王國に神聖の氣を充溢させ以て再び崇拜の對象とせしめなければならない。これは戀愛が單に新しき存在を創造するからと云ふのではない。偉なる愛によつて創造せらるるこの存在物は時代より時代を追ふて幾多の精神を擴大するであらう。而して情熱を放散する力ある感情を賦與せられたる豐富なる人類が漸次に創造せらるるであらう。戀愛は唯に人類が社會の新しき一員を得るの衝動となる許りではない、それは人類が更らに密接なる關係を結び、子孫がその兩親から大なる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

戀愛の力を遺傳する程度に從つて次第に高めらるる衝動となるのである。全ての人間關係によつてこの力は人類全體の上に反應するであらう。如何となれば人生に於ける萬事は一つとして性愛と關係のないものはないからである。かくして生を否定する宗教にあつて性愛は最大の敵であり、生を肯定する宗教にあつては神聖なる衝動である。それは進化の階梯を進むるのみならず、尚ほ且つそれを確立せしむるものである。

性愛は藝術、文學、法律、勞働、宗教等と最も親密なる關係に立つてゐるものである。そうして性の撰擇にその理想を與へてゐる。大なる宗教的情操は全てに最も近附き安いものであるといふことが一般に信じられてゐる。併しこの位眞理でないものは恐らくないであらう。宗教的情操は他の場合にあつて偉なる戀愛によりて深く動かさるるが如き人々の情神にのみ大なる發達を見るのである。故に精神は大なる感情の結合より生ずる時更らに偉大になることは明かである。而して理想的戀愛は愛の力と權利とを擴大するであらう。

現代に於けるが如く戀愛が未だ人生に於ける全ての勢力の中で最も侮蔑せられ、最も粗漫に取扱はれ、最も多く裏切られる時代にあつてはこの思想を充分に理解する人は恐らく少ないであらう。故に戀愛は何時か全く異なる形に於て現はれるであらうといふことは大なる理解を有する人でさへ殆んど思惟することが出來ないのである。人類が一歩一歩自己

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の道を進んで行くには先づ戀愛とその正道といふことを考へなければならない。何故なら人類はかくしてのみ更らに高き人道（ヒユーマニチー）に到達することが出來るのであるといふ說を聞いて大抵の人々は疑惑の念を抱いて頭を振るのである。最高の敎育を受けた人でさへダンテの所謂、intelleto d' amore.（愛の智識）を缺いでゐる。或は少くとも戀愛修養が必要であるといふ理解を缺いでゐる。而してこれ等の言辭を以て徒らに全ての戀愛者の感情を膨脹せしめ遂に彼等を氣球にて人生より高く飛翔せしむる誘惑の言葉であると見做してゐる。戀愛者は其處より自己に對する二重の尊敬に魅せられて人生を見下すのであると彼等は考へてゐる。言葉を換へて言へば人生に於ける戀愛の價値に對する凡ての、辯護は戀愛のために全ての他の人生の價値を輕視するものとして說明せられてゐるのである。

かくの如く云ふ人々は宗敎が愛といふ範圍に於てのみ人を淨化し、又力を與ふるものであり、人間の精神はそれが何物かを愛してゐる程宗敎的に、又宗敎の必要を感じてゐるものであるといふ事實を知らないのであらうか。何故なれば精神の力量は制限せられてゐる。その精力が一方に注がれる時には同時にそれを他に與ふることは出來ないのである。戀愛といふものは全ての感情の中で最も精神を發展せしむるものであり、又最も統合的でもある。特に全ての感覺の中の最高なるものを吸收する戀愛は靈肉の合致となり、個人的生活と

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

社會的生活の一致ともなり、偉大にして神秘なる世界的薔薇（ワールトローズ）の花心となるのである。かかる事實に對して彼等は全く盲目なのであらうか。

この偉大なる事實を輕視するが故に、全ての社會問題及び政治問題を解決せんとする努力は悉く砂上の建築の如く、全ての修養努力は毒素を含む源泉より流れ來る河川の如く、其他人生の他の方面に於ける全ての力の發揮も萎縮せる根より成長せる植物の如き感がある。かくの如き狀態は戀愛に對する新らしき宗敎的尊敬が性的生活の健全にして美はしき條件として建設せらるる迄は持續するであらう。戀愛に對する斯の如き觀念は社會の堅實なる基礎を造り、その源泉を純化し根元に滋養を供給するであらう。大都會の貧民窟を一度通過した者は今日吾人があまりに多く社會問題を喋々するといふが如き言葉を敢て公言する者は恐らくあるまい。併しながら、性的關係は實に今日に於ては全ての社會的階級中の貧民窟に比せらるべきものである。而かもなほこの眞理に對して發言する者があれば常に思索せる人々さへ『戀愛に對してあまりに多くの言葉が費やされる。それに對してあまりに重きが置かれるではないか』と呼び出すのである。

『現社會程結婚の悲劇と戀愛の浪費の多いことは恐らくあるまい。それがため社會は遂にその不幸を聞くべき耳を失なつてしまつた位である』とかの詩人は云つたがこれ程たし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

かな言葉はないのである。

かの宗教家或は人道の志士が性的生活の罪惡並びに病症に起因する頽廢を指摘して道德を說く時にそれを傾聽するものは社會の極めて少數なる人々である。君人はそれを耳にする時の頽廢の如何に恐るべきものなるかも知りそれに對して社會の意識が夙に覺醒せられたのではあるまいかと思はずにはゐられないのである。然るに實際の狀態は未だ何人もそれを認めてはゐない。これは別段驚くにはあたらない。戀愛の人生に對する價値を否定し或は無視してゐると云ふことがその深い根抵となつてゐるからである。又數字によつて確かめられない人生の多くの不幸なる障害が同一原因に根ざしてゐるのであるといふことを說明されても、それを理解することの出來ぬ人のあるといふのも別段怪しむに足りないことである。

世間一般の人々は隅なく探求し結婚の社會的價値を證據立てんとする樣々の議論を擔ぎ出すものである。彼等は數字の上に數字を重ね、自殺、罪惡、飲酒、疾病等による死亡數は既婚者より未婚者の場合に於て遙かに夥多であるといふことを例證せんとしてゐる。又小兒の死亡數と罪惡も私生兒の場合に於て遙かに多いと主張してゐる。又一方に於ては戀愛を以て離婚と自殺と罪惡の原因であると攻擊してゐる。併しながら彼等は一方に於て、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

社會の狀態と兩親の偏見とが戀愛結婚を妨壓せるがため、獨身の生涯を送り、或は發狂し自殺し　罪惡を犯し、私生兒の親となつた統計をば等閑視してゐる。かかる場合に於て戀人の一人は必ず富のためか或は『義務』の爲め、又は『他人の幸福』のために犧牲となり、或は壓制せられて戀愛に對する叛逆者となつたに相違ないのである。

併し實際現今ではかの昔兩親がその娘に對し『お前は自分の幸福と云ふことを考へてはいけない、先づ他人の幸福といふことを考へなくてはならぬ』といふ思想を諄々と敎へ込んだ時代よりもこう云ふ犧牲者に出遇ふことは少くなつたやうである。他人の幸福といふのは畢竟自分の兩親が承認した男を幸福にして自分の愛した男を不幸にしてやれといふ意に他ならないのである。これではその兩親も兩親の撰擇した男も自分の幸福のかはりに他人の幸福といふことを考へなければならない。といふその義務を忘却してゐるのではないか。

彼等はそう云ふことには一向無頓着でゐたのである。併し今でも多くの人々は青年男女の戀愛中に發見する幸福が、社會の幸福の根本的要素であるといふ眞理に對して實に朦朧たる觀念ほか有してはゐない樣である。青年男女が第一に守るべき義務は彼等の戀愛に對する義務である。彼等にして若し、第一に戀愛の義務を首尾よく守ることが出來たなら自

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

餘一切の義務も從がつて容易に守り得ることが出來るであらう。戀愛とは決して、義務と矛盾するものではない。否、結婚條約に際して守るべき最大なる、第一義務の義務である。

特殊の場合に於ては義務の力と勝利とは戀愛の幸不幸を問はず確かにその衰亡を意味してゐた。或は又、反對に戀愛が義務の衰亡を促がしたことも眞である。併しながら今日大多數の人々が戀愛の途上に横はる幾多の障害を默忍し或は秘かに戀愛に對しては挑戰を試み日々夜々その精力を亂費しなければならないがため全ての國民の精力が如何程浪費せられてゐるかといふ事を靜かに考ふる人がどれだけあるだらう。又かの未成の事業。當初より薄弱にせられたる凡ての精力が途中にてその發達を阻害せられ、或は早く疲弊し盡し再び復活することもあるも、充分なる發展を見る事が出來ず、その目的は達せられずして終り、或は目的に向つて進むこともあるも初より低き目的に向つて努力するが如き、全てこれ等の**原因は悉くかの不幸なる家族生活に起因するものであるといふことを**深く考へたものがあるだらうか。又、一般の男女が性的生活以前の事に對して、より多く眞摯なる注意を拂ふことを敎へられなかつたなら、そして結婚以前の事に對して何等の敎育をも授けられず、又、彼等の戀愛以外の他の大なる生活上の要求に對する權利を社會から與へられなかつたならば全てかくの如き精力の社會的浪費は除かれたであらうと云ふことを靜かに考へてみ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た人があるだらうか。

戀愛の幸福を感ずることなくして無數の人間が高雅なる美しき生活を送つてゐるといふ事實は例令彼等が更に進んでその幸福を味ふともそれ以上に美しく強く――故に社會に對しては更に必要なる――生活することは出來ないといふことを證據立ててはゐない。一方に於てかくの如き幸福を缺如せるにも關はらず、尙は暖かき感情と智慧とを有する人々があると同時に他方に於ては未婚の結果或は既婚の結果として感情氷結し或は自暴自棄に陷つた人々がゐるのである。而して多くの人々の斯くの如き結果に到達するはかの戀愛の運命が時に與ふる斥けがたき悲劇のためではなく、舊時代が新時代に對し人生に於ける戀愛の價値は極めて小なるものであるといふ見解を強ひた爲めである。戀愛が『神聖なる生產』の必然的基礎として宗敎的尊敬を以て取扱はれたる樣になれば、現在社會の救濟事業の大部分は無用となるであらう。且て人間墮落の原因と云はれた戀愛が人間の幸福の一手段と變ずる時は厭世、失望、墮落の數は遙かに減ずるであらう。現在に於て劣情の牢獄の中に禁錮せられてゐる曾つて偉大であつた力が性的生活を通じて無用の苦しみから開放せられたる時は現在社會にて浪費されてゐる種々なる勢力が人生の他の方面に活躍するのみならず、戀愛は覺醒し緊張した新しき諸勢力が更らにその上に加へられるであらう。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

併しながら私の戀愛といふのは人格的の偉大なる戀愛を指すのである。それは人生の無限の相を開放して人々に示すものであつてその變化を消滅せしむるかのふざけたる小さき戀の如きを云ふのではない。その戀愛は先づ第一に自己の存在と他の人々の存在が眞に偉きく計りがたいものであるといふ感じを呼び醒ますものである。それは家庭に於けるが如くその個人として又、社會としての事業中に現はれたる他人の人格に對する戀愛を意味するものである。それはまた人生の目的に關する永遠の疑問に現はると同時に歡樂の際にも現はるる人格の尊敬をも意味するのである。

かくの如きことを知らざる男女は到底人格的戀愛のなにものなるかを覗ふ事をすら許されざる人々である。かくの如き戀愛に浸れる人は自己の感情以外に何物をも省みるが如きことなかるべしと考ふる人は眞にかくの如き人を解せざる人である。人は徹頭徹尾それに由つて生活し又、存在せるものに關して最も少なく語り又考へるものである。健康なる人は自からの健全なることに關して語らず、無邪氣なる人は自己の無邪氣に關して語らない。

然しながらその健康と無邪氣とが自から其人を通じて語り、或は考へる。人格的戀愛がその力を發揮することを許され、ラスキンが國民の眞の富と呼んだ多くの健全にして充實せる幸福な人間を創造する時は、人生に横はる最大なる根本的矛盾の一つ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なる男女間の矛盾を調和せしむることが出來るであらう。其の時は又一般の期望は開展せられ樣々の痛ましき矛盾は調和せられ人道（ヒューマニティー）は現社會が未だその一歩をふみ出せしに過ぎない高峰に達し初むるであらう。戀愛は早晩その失墜せる權威と名聲とを回復しなければならない、何故なれば私が既に云つた樣に人類出產の不斷の連鎖に對する最大なる武器である。それによつて時代は時代を追ふて肉と靈との樣々なる力を繼承し移殖する、その力は次第に高尚となり、美はしき平衡を現はし男性と女性とは愈々堅く深く結び付けられるのである。

併し戀愛は既に進化して男性及び女性の諸性質を調和するに必須なる要素となつた。かくして吾人は社會問題の解決に協力する多くの男女を見るのである。然かし彼等の協力は通例單に男性及び女性の能力の機械的結合に過ぎないのである。勿論その協力は次第に組織的に赴むき男性と女性とは益々人生のあらゆる目的の完備に向つて結合せんとしてゐる。結婚は戀愛の繼續ならざるべからずといふ近代婦人の意志は男女間の精神的交通及びその日常生活が單に家庭生活の範圍以上のものを抱括しなければならないといふことを意味してゐるのである。それは又、男女各自が彼等の日常生活外の舞臺に於ける人格の發現を愛することを意味してゐるのである。かくして男子は從來男性的の思想及び行動の樣式

に從つて各自にのみ任かせられ長年月の間女子が人道に貢獻した新生命及び女子の深く美はしき感受性によつて創造せられたる新しき智力を浪費し來つた仕事の範圍に於て女子の勢力を奬勵するであらう。

例令へば同一事業に於てその夫の友としての婦人の數が次第に增加してゆくではないか。彼等は相互に相提携し補助して彼等一人にして能ふより更らに以上の仕事を完成して行くのである、この協力が戀愛を通じて行はるると同時に新しき思想を有する男女は最早戀愛をもつて他の目的を達するの手段と見做すことは出來なくなつて來る。彼等は戀愛をもつてそれ自からを目的として努力せらるべきものと考へる樣になる、何故なれば彼等は自己の戀愛をもつて最早完成せられたりと感ずることが出來ないからである。他の全ての場合に於けるが如く戀愛に於ても彼等は常により高き程度に到達せんと欲してゐるからである。

戀愛が女子の場合に於けるが如く男子にあつて全くその存在を充實せしむるものではないと男子は屢々主張するがそれは誠である。何故なれば男子は自然の要求にせまられて戀愛以外に人生の變化を求めるものである、其處に活動と創造とに對する男子の本能が絕えず新しき目的を發見するからである。然るに女子にあつてはその力が等しく內部に向ふの

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

が自然である。

其處に女子は不變の法則によりて母としての最高なる活動の範圍を發見するのである。『男は單に愛するのみ、されど女は愛そのものなり、』と詩人が云つてゐる。若し男子がこの點に於て女性的となり、女子が男性的になつたとしたなら性愛の精神的狀態である對照は消滅してしまふ。女子がその男子に愛せらるゝ『女らしきこと』とはその內部に向ふ性質を指していふのであり、男子が女子に愛せらるゝ『男らしきこと』とはその外部に向ふ性質を指していふのである。若し大多數の女子が安靜なる狀態に於て生の源泉に留ることを願はず男子と共に全ての海洋を航海せんと欲する時は性の對照はその調和を缺き忽ち單調なるものと化し去るであらう。

女子がこれを自覺する迄は例令へ數萬の女子が男子の得意とする仕事をなし能ふとも一方に於て人生と幸福の更らに偉なる事業なる人類の創造と心靈の創造とを閑却し若くは未成に終らしむるが如きことあらば社會にとつて、それが何等の利益でもないといふことが主張されなければならない。これ等の事業を適當に完成するには、女子は男子と同等なる權力を要求するのである。而して女子がこの權利を獲得するまでは『女性主義（フエミニズム）』は尙ほなすべき仕事を有してゐる。併しながら女子が選擧權――單にその狹き政治上の意味に於て

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のみならず、一般の選擇權といふ意味に於て――を得るに準じて彼等はそれを廣き人生の舞臺に向つて使用することを學ばなければならない。彼等は女子の力が『秤るべからざる』價値の創造せらるゝ領域にありて最大なるものであることを學ばなければならない。その價値はたとへ數字に表はさるると能はずとも人道(ヒユーマニテイー)を改善する上に最も功力多きものである。若し自からの小兒が乳母部屋に於て鞭韃せられ或は相互に相敎つが如きことあらば平和會議に關して喋々するも婦人にとつてそれが何の益に立つであらう。もし婦人にして哀れむべき獨力の境遇より一個の男子を救ふこと能はず、而して男子の生活に調和ある結合を齎らすこと能はずとせば徒らに倫理會議を口にするもそれが何の益にたつであらう。女性主義はゲーテの二個の格言中に極めて適當なる評言を發見する。『霜を以て自からを暖めんが爲め太陽より逃れんとするは愚なり。』『智慧の第一條件は何物をも見せかくることなく、全てのものとなるにあり』と彼は云つてゐる。

太陽は心靈の價値の生ずる處にその熱を放散する、霜は精神の氣づかざる功利の創造せらるゝ處を支配してゐる。

心靈の價値は感情の世界に發見せられなければならない。亞米利加に於ける近代の革新策が多くの婦人を迷路に導いたことは誠に悲しむべきことである。彼等はかの革新策なる

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ものが恰かもかの羽根のみ華麗にして歌ふこと能はざる亞米利加の鳥の如きものであるといふことを洞察することが出來なかつたのである。亞米利加の精神は未だ一般に樂耳を缺いてゐる。それは人生の全音と半音とを識別することが出來ないのである。亞米利加に於ける數萬の婦人が團體的事業にその家庭と小兒の世話を任かせ自からは各自の職業或は商賣に從事してゐるのは一見如何にも社會にとつて有益であるかの如く見ゆる。しかし人生を向上せしむるは實は功利の如きものに非ずして完全なる人間である。故に行政及び社會的事業を通じてなされたる全て外部の改善は竟畢何等の功果をも殘さないのである。何故なれば男子も女子も眞に有益なる事業とは道德的價値を有する範圍に於て行はれ精神的狀態の進步を計るものであるといふことを理解してゐないからである。

種々なる形式が精神狀態の上に影響することは事實である。然しながら精神狀態の方は更らに著しく形式の上に影響を與ふるものである。結婚、母の權利、小兒の保護等に對して如何に最善の形式が現はるゝとも女子がかのシユライエルマヘルによつて與へられたる十誡を遵奉すること能はざる間は無効に終るであらう、若しその十誡にして實行されたならば人道を內部より外部に渡つて一新する事が出來るであらう。その十誡中に含まれたる意義は左の如きものである――

汝は一人の戀人より他の戀人を有すべからず、又友人に對して媚を賣り、世辭追從をなすが如きことあるべからず。

汝は汝自身に對し或は汝自身の影像又は他の影像に從つて何等の理想をも創造すべからず、汝は汝の夫が如何なるものにもせよ又、如何なる道を歩めるにもせよ、只管夫のためにのみ夫を愛せよ。自然は嚴肅なる復讐者なり、少女の空虛なる羅曼主義（ローマンチシズム）は成熟せる婦人の情緒の第三若しくは第四期に於て必ず罰せらるべし。

汝は汝の戀愛の神聖を汚すべからず、何人にまれ利益のために自己を犧牲にするは——例令へ母たるべき律法上の權利のためである場合に於てすら尙ほ且つ美はしき感情を失ふものなることを記憶せよ。

汝は後に破らるゝが如き結婚の約束をば決してなすべからず。

汝は自から同等の程度を以て愛を注ぐ能はざる男子に愛せられんことを願ふこと勿れ。

汝は野蠻なる現今の慣習に美はしき衣をきせその言行に於て虛僞の證明をなすべからず。

汝は教育と藝術と智識と名譽とを求めざるべからず。

男女平等論を說くはまだしも、男子に比して女子の劣等なることを證據立てんと試むる

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

程無用なものはない。反省的生活は男子よりも女子の場合に於て遙かに强いといふことは男子の力が他の方面に發揮せらるゝと同じく必要なることである。男女の差異が自然的生活に於て缺くべからざるが如く又修養的生活に於ても最も根本的に必要なのである。實際に於て知らずぐ\女子は男子に男子は女子の仕事に協力してゐるのである。第三性といふが如きものは決して創造の事業に啄喙することは出來ないであらう。女子の精神が組織的に男子の事業と理想に結び付けられ、男子の精神が又女子の事業と理想とに結び付らるゝに從つて精神的に豐富なる狀態が次第に實現せらるゝであらう。男子の事業は比較的人生の個人的方面に從屬し生存努力となり分化となつて人生の進步と革新とを促がしてゐる、これに反して女子の事業は人世の社會的方面に屬し團結的粘着力を現はしてゐる。女子はビヨルンソンの云つた樣に『次第に人生に入込み來つた』暖かき感情のよりよき掩護者である。かくの如き議論はかの甲乙の差別によつて天秤の價値を上下するが如きものではない。

亞米利加主義は人生の全ての問題を極めて低級な立場から論じてゐる。而して婦人問題の如きも其の主眼とする處は自己保存にあると見做してゐる。自己保存といふことは男子にも女子にも單に權威ある人間の存在に對する初步の外面的先要條件である。未來の社會

主義がとるべき最も必要なる第一階梯は各人の最も得意とする仕事によつて自己保存の機會を萬人に與ふることである。かくの如くして初めて各自の仕事はその人の幸福を增進するものとなるであらう。この理由から云つてもかくの如き仕事は社會に最大の價値を齎らすものである。而して今より更らに深き修養により、これらの事に對する吾人の洞察力が益々深くなり行く時は現今に於て社會が陸軍と海軍とを支へ行くが如く婦人を維持して行くことが社會にとつて極めて自然なることゝ見ゆる樣になるであらう。何故なれば女子が新しき時代の教育者たる時は彼等は最大なる社會的職務のために盡瘁してゐるからである。若し新社會にしてベートウベン或はワグネルより機關師を造り出さんとするが如き事あらばそれは極めて悲しむべき現象と云はなければならない。而して若し又、その社會にして多くの母を心靈の教育者たらしむるかはりに家庭外の仕事に從事せしむるとせばこれ又等しく精力の大なる誤用である。然るに大多數の母たる人々には風琴を彈く事が音樂に對して全ての藝術が學ばれなければならないといふ事を單に證據立てるが如き教育法を用ゐてゐる。併しながらそれは女子の精力が更らに完全なる人類を教育することより他の仕事に適用せらるゝ時よりよく利用せられるであらうといふことを證據立てゝはゐない。かの人類教育といふ仕事に對する現今の全ての努力は單に未來の準備であり、未だ理解せ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

られざる一般の聯絡である。更らに完全なる人種とは更らに精神的なる人種である。更らに精神的なる人種とに戀愛に對して更らに大いなる能力を有する人種である。而してこの次第に成長し行く戀愛の力は男女間の戀愛、親子間の愛を中心にしてのみ人生の全般に流れ行くのである。

かくして最大なる希望を有する時代の最も顯著なる徵候は近代に於ける女子の智的發達及び男子の愛情的發達が新しき意義を以て女子の內的傾向と男子の外的傾向を包み初めんとしつゝある程度に到達したといふ事實である。女子が活動の形に於て、美の程度を高むることを男子より學び、男子が安靜の形に於て美を高むることを女子より學ぶ時、此處に始めて戀愛によつて兩性の美はしき綜合を見ることが出來るのである、例令愛の神(エロス)は同名の遊星の如く一般の人々には不必要に思はるゝも古きエロスはかの新しく發見せられたるエロス（星の名）が天文學者の注意を引くが如く人々の注意を奪つたのである。何故なれば多くの問題が天上のエロスに於けると等しく地上のエロスによつて喚起せられたからである。『男子は一般に戀愛を友とし或はそれに逆つて人生の職務に從事しなければならなかつた、』のである。斯くの如くエロスは實に容易に男子の行くべき道を左右し得たのである。

この經驗は恐らく女子に對する男子の古き憎惡の主なる理由であつたのであらう。男子は自から許したる戀愛によつて自から墮落したるが如く感じ、又何等の戀愛をも許さゞる時傷けられたるが如く感じたのである。現在に於ける女子の解放は女子の社會的活動及びその戀愛によつて喚起せられたる破壞を通じて男子に新しき逆境をもたらしたのである。斯くして父母はまた温かき家庭の缺乏より苦しみ始めたのである。女子はもはや終日家庭に座して夫の heures perdues (閑散の時)の爲めに待することに耐える事が出來なくなつたのである。斯くの如き男子は今まで家庭に全く捧げられた時間といふものを頭に置いてゐた。それは全く理由のない事ではなかつた。彼等は女子が青春時代には愛撫にこれ等の時間を消じ、老年には不平と愚痴をもつて過したのを親しく目擊したからである。

併しながらすべての場合に於て精神の親和と友誼の同情とが存在する處には戀愛は過去現在未來を通じて子孫の教育、その他すべての大なる社會的事業に父母の協力として現はれるであらう。若し斯くの如き兩親にして單にその子供に生命を與ふるのみにして子供の教育を全然社會に一任するとせば彼等はすべての教育より遙かに重大なる父母たる本分を剝奪せられたるが如く感ずるであらう。即ちそれは母に愛せらるゝ男子の人格と、父に愛せらるゝ女子の人格とに共通して流るゝ生命である。而して兩親が相互に成長するに從が

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つてその重要なる度はます〳〵增加せられるのである。

戀愛によつて得たる幸福は人生の最深の要求の一つを滿足せしめ、直接にその最善の力に衝動を與へて他の力をも增加せしむるが故に戀愛による個人の幸福は社會的價値を建設し個人の戀愛の標準が高めらるゝに從ひ社會全般は愈よ向上せしめらるゝであらうと云ふ結論に吾人は達するのである。

併しながら全ての人類は悉くみな戀愛の賜物を賦與されてはゐない。それを所有せる人にてすらなほ他の趣味嗜好を有してゐる。故に男女何れの場合に於ても幸福の觀念は戀愛の幸福と全然同一なりと云ふことは出來ない。又、大體に於てそれは個人が自から支配し能はざる境遇に屬する種々なる力の要求若しくは適用の滿足を意味することも出來ない。吾人の力のあらゆる發展を意味せざる幸福は極めてつまらなく見ゆるであらう。幸福の意義は全て偉大なる能力の完成であり更らに愈よ大いなる完成に對する要求を滿足せしめんが爲めの不斷の期待である。幸福とは畢竟愛し、働き考へ苦しみたのしんで次第に向上するをいふのである。この向上は時に『幸福』によつて達せられ、時に『不幸』なる境遇を通じて達せられる。斯くして最も深き意味に於ける幸福は人生に橫はる諸の運命を通じて人生が次第に向上發展せらるゝことである。この意味に於て幸福は人生そのものゝ內に生の目

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

的を發見する人の唯一の義務である。若し幸福の感情に變化せられざる唯一の義務があるとすれば個人の生活と團體の生活とは猶ほ充分なる意義を有せざるものと云はるべきである。

全ての人事關係中幸福はその目的であると同時にその手段でもある。併し他人の幸福を目的とする慈善事業に於ては少くともさうではない。慈善事業とか社會的事業とか云ふものは單に他人の幸福のみを目的としてなされるなら基督敎的慈善の失敗した樣に失敗するであらう。人は幸福に對する自己の要求並びにそれを滿足せしむる樣々の條件によつてのみ始めて他人の要求とそれを滿足せしむる條件の如何なるものなるかを知り得るのである。

義務としての幸福は戀愛との關係上健康と云ふ他の幸福の大なる價値と比較する事によつて說明せらるゝ觀念である。中世時代にあつて人々が自己の肉體を飢渴、汚物等によつて苦しめ弱めんと計り、疾病に神罰を認め苦行によつてその救濟を計らんとせる時吾人が今日有するが如き衞生上の觀念は微塵もなかつたのである。個人が健康を神の意志なりと認め、各自の健康を增進することを以てその義務なりと見做し地上の生命が善良なるものと認められ社會が科學の活動を健康の法則に適用し、疾病を征服し、生命を延長する事を

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

以てその義務なりと考ふるに至るまでは人々は健康衛生に對して何等の觀念をも有してゐなかつた。健康は次第にそれ自からを目的にするやうになつて來た、而して幸福はそれが他の目的の爲めに有用なるか或は無用なるかを問はずそれ自からの爲めに努力することを吾人は承認しなければならないやうになつた。然るに今日に於てもなほ自己の精神生活によつて病體を維持してゐる人々がある。又自己の健康を增進せんとする良心を有しながら不幸にしてそれを失つてゐる人も澤山ある、或は自己の健康に對して過大の注意を拂ふ利己的の人があり、自己の健康を更らに高き目的の爲めに犧牲にして惜しまざる博大の心を有する人もある。然しこれ等はすべて各個人が自己の健康を自己及び社會に大なる直接の價値あるものとして取扱ひ、單に他人の爲めのみならず自己の健康の幸福のために努力することを以てその權利でもあり義務でもあると考へてゐる一般の法則を破壞してはゐないのである。他の言葉を以て云へば中世紀に於ける觀念はこの場合に於て全く顚倒されたのである。

來るべき時代はこれと同じく現在に於ける戀愛の觀念を悉く顚がへすであらう。現在に於ける戀愛の觀念はかの中世紀の健康に對する觀念と等しく人生にとつて有害なるものである。この價値の轉換或は變化は健康に關して私の述べた場合と同じく戀愛に於ける樣々

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

なる條件の現出を妨げないであらう。併し要するに各個人が自己の戀愛を自己と社會に對し兩つながら大なる價値ありと信じ、この幸福のための努力を以て自からの權利であり、義務であると思惟する丈にその最大の主張が置かれなければならない。

私のこの見解に對してエルスター博士は懇切なる批評をせられた。博士は基督敎の禁慾的人生から見れば極めて自然のことである。氏の意見に從へば俗社會の律法並びに宗敎的權威に服從することが更らに高き進化に進む唯一の道である。自已の修養及び克己が成長の最上條件である。この見解によれば神聖と愛の權利のために說かれたる言辭は悉く『自然の崇拜』である。而して受難そのものがより高き修養に至るの道である。而しそれは自己の慴伏によつて到達せらるゝのである。最善の愛は信實と忍耐とである。それのみが獨りよく深遠なる精神力を釋放し、人間を神聖の域に結び付ける。結婚に於ける信實は人をして肉慾的の本能と情熱より自由にせしめ、高き意味に於ける人格發展の可能を彼に與へる。然るにかの『自由戀愛』はこれ等の精神狀態を發達させない、而して結婚以外の母は生れたる子供に安固たる家庭生活を送らしめず、子供に對して眞摯なる責任の威を喚起せ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ざるが故に排斥せられなければならない。かくの如き子供は又情熱によつてのみ生れ出でたるが故に母の愛は責任に面するの時消え去るのである。

かくの如き禁慾的人生觀より云へば私の逃べた如くこの見解は極めて自然である。併しながら人生の目的が人生そのものである人はその精神的要求と同じく肉體的要求に對して同一なる尊敬を感ずるのである。斯くの如き人は又不道德なる肉情が存するが如く不道德なる禁慾主義が存するといふことを知つてゐる。何故不道德であるかと云へばそれは人道と個人に對する向上でないからである。彼は二個の未結婚者が子供に生命を與へる時、自然はその子供に立派なる天賦の力を授けて『情熱』に報ゆるものであるといふことを知つてゐる。自然はこの『情熱』なるものを通じて神秘なる目的を追求してゐる樣に見える。それは義務の觀念といふが如きもの丶到底よく行ふところではないのである。

故に最も重要なることは吾人が精細に自然を研究し盡した後に吾人の權利の觀念を自然と調和せしむるが如く計ることがある。單に道德的觀念にのみ囚はれ、明らかに自然に反して無條件に自然を壓服せんとするは不必要である、より高き戀愛の修養は克己を戀愛と親たる責任に結び付くることによつてのみ達せられるであらう。戀愛と親たるの責任が兩性關係の唯一の條件となさる丶の時相對關係はその結果として生ずるであらう。

この理由により、全ての青年は戀愛に於て更らに偉なる要求をなし、父たる權利に對して更らに高き思想を抱く樣に敎育せられなければならない。克己は全ての關係中にあつて眞の戀愛及び健全なる親としての一條件として敎へられなければならない。併しながら自棄は戀愛に於ける完全なる幸福が個人の精神及び一般の人道の成長に資するの昨說かれてはならないのである。自由離婚の權利も結婚せざる母權も全くこの道德的見解から批判せられなければならない。結婚の有無に關せず母として無責任は常に罪惡である。母たるの責任は結婚の如何を問はず常に神聖である。離婚の自由は種々なる感情及び事情が母としての道に橫はる樣々の障害を除くことは出來ない。併しながらそれはかの他人のために犧牲たることは自己の精神を生かすの道にして、他人を犧牲にするは精神を殺すことである。故に自己の都合よき樣に犧牲の問題を決定するの個人は社會に於て無價値なるものであるといふ極めて不合理なる說を打破することが出來る。

不幸なる結婚に於ては結婚者の一人が他を犧牲に供さなければならないといふことは偏見なき反省の示す處である。行かんとする人は彼を止めんと欲する人を犧牲にする。又止めらるゝ人は彼を制抑する人の犧牲となるのである。時としては他を犧牲とするより自己を犧牲となすことの更らに罪の大なるものがある。時に又その反對の眞實である時もある。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

而して若し吾人はその罪の大小をば何人が定むるかを訊ねらるゝ時は左の如く答へる。――それは義務に於けると等しく困難なる爭ひを決定しなければならない個人の良心である。吾人のとるべき道は唯だ二つある、天主教的結婚か或は自己の責任を全うする自由結婚かである。

その他の諸問題に於てもこの疑問に對する答は各自の抱く人生觀に準じられなければならない。

吾人は人間がある權威の命令に對して自己の理性や意志や良心を曲げなければならないと信ずることも出來るし、屢々經驗を反復し力の樣々なる試錬を經て自己の道を發見することも出來ると信ずる。又服從は更らに高き修養に達するの唯一の道であると信ずることも出來れば反抗が服從と等しく要素的（エンセンシャル）なものであると信ずることも出來る。又肉情的本能は陷穽でもあり、障害でもあると信ずることが出來ると同時に理性や良心と同じく人生の向上的運動を指導するものであると信ずることも出來る。若し吾人が後の意見を持するとすれば性的生活に於て正不正成長衰退自己の犧牲及び他人の犧牲といふことが人生の他の局面に於けるより一層密接の關係を有するものなることを知るのである。又性的生活に於ては『正』は屢々『不正』となり、他を犧牲にするは恐らく秘かに自からの犧牲となつてゐる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ことであり『情熱』は義務のなし能はざる偉大にして美しき結果を生ずるものであることを吾人は知り得るのである。

要は唯だ人道に新しき存在を與ふる權利ある男女に對して常に偉大なる要求がなされなければならないといふことである。

この新しき要求が容れらるゝには現在の結婚制度に從屬せる親權を造る倫理的觀念が顚がへされなければならないのである。その時にのみ全體の道德的勢力が人間の生理的及び心理的性格の上に加へられるであらう。而して兩親は子供とその子供の繼承する特性に對して最も重要なる要素となるであらう。子供の性格が社會の道德的觀念を決定する要素となるまでは自然的道德は非自然の道德と入換はることは出來ないであらう。それは全ての禁慾主義が不必要になるといふ意味ではない、只だそれが人生の進步に與ふる場合以外には要求されないのである。而して又全ての信實が消え失せてしまふといふ意味でもない。その信實は個人的になり、夫と妻とは二人の友人の如く相互に親切とやさしさと思慮とを現はす樣になるであらう。即ち彼等はかくの如くすることを以て相互の戀愛を保存し、その戀愛が充分なる成長を遂げ得る唯一の道であると覺るからである。

靈性が發達するに從つて彼等は愈々強き肉體的情熱と最も偉大なる靈的戀愛を要求する

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

樣になるのである戀愛者はかくして自己のためにのみ自己の情熱の統御を自己より獲得し、自己のために共同生活に必要なる全ての條件の修養に盡瘁する、かくして心靈の精力は內部より外部に解放せられる。吾人の戀愛が更らに親しく、やさしく完全に進む程吾人の戀愛を通じてより多くの幸福を享樂し得らるゝことを經驗によつて學び得るのである。

かの唯一眞實なる道德と見做されんとして今なほその權利を主張して止まざる舊道德は神聖なるものは全く精神と意志の中にのみ存し、肉體、本能、衝動中には決して存せずといふ人生觀の上に立つてゐるのである。かくの如きは何等かの權威の保護を必要としなければならない觀念であつて、自己の法則の上に賴ることを敢へてすることが出來ないものである。然るに新道德は靈を以て肉に反抗するものとは見做さない。又自然の全ての現象をば『神聖』とは呼ばないのである。新道德は肉と靈に神聖なる二個の形を見るのである而して神聖なるものが一層明らかに自からを現はせば靈と肉とは相互に遍通するのである。動物的人間は靈肉の矛盾を感じない『精神的』の人のみ肉を壓迫して自己の感ずる二元より免かれんと欲求する。新道德の目的はこの矛盾を除かんとするにある。戀愛に於てはこれが眞實の戀愛によつてのみなされるのである。この意味に於ける結合の所有或は缺乏を通じてのみ各人は自己の戀愛の價値と正しきことゝを見ることが出來るのである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私が社會より全ての形式を剝奪せんとするものゝ如くいふは誤れる非難である。『戀愛と結婚』を通讀した人々にはこれはよく理解せられてゐることと思ふ。それは新しき形式を要求する人々に對して常に爲さるゝの非難である。私の提出した新形式の心理的內容と律法的堅實とを疑ふ人があるかも知れない。併しながら何人も私が何等の拘束なき自由を要求したものであると主張することは出來ない。私の云ふ束縛とは若樹を縛る麻繩の如きものであつて、かの將に倒れんとする老樹を辛うじて支ふる鐵の箍の如きものではないのである。(をはり)

伊藤野枝譯

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

舞踊研究會大會

會場―歌舞伎座
開演―五月二十四日(土) 二十五日(日) 午後五時

□新曲「玉ははき」
藤間勘十郎 振付
尾上菊五郎 振付
常盤津文字兵衛 節付
演者 舞踊研究會員

□歌劇「空華」
演者 市川猿之助等
奏者 鈴木鼓村
同 杵屋和三郎

□新曲「賤の小田卷」
演者 藤間龍

□「未定」
演者 藤間政彌

□「唐衣」
演者 政彌門弟

□「未定」
演者 花柳なつ
同 花柳冬次
同 花柳米松

會員券―特等 二圓、一等 一圓五十錢
二等 一圓、三等 五十錢

口會員券は五月一日より當日まで下記の所にて取扱ひ候口

京橋區新佃西町三丁目五 舞踊研究會
京橋區新富町丸五方 同事務所 (京橋二一九七)
京橋區木挽町歌舞伎座內 同事務所 (京橋二二八九)
京橋區佐柄木町 演藝畫報社內 (新三〇五七)

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

らいてう 平塚明子著

圓窓より

五月一日發賣
四六判四百頁函入
定價金九拾錢
送費八錢

著者が從來青鞜及各誌に執筆したる、「元始女性は太陽であつた」以下十數篇の評論感想及び數篇の隨筆小品を收む。本書出でゝ始めて著者の赤裸なる風貌に接し、また婦人問題に對する著者の氣鋭なる獅子吼を聞くを得べし。敢て婦人問題の云爲せらるゝ現時の社會に薦む。

東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地（京橋際）
東雲堂
電話京橋一六三九
振替東京五六一四

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

新時代女學的大雜誌

女學世界

第十三卷第六號
五月一日發行

□よしなしごと…小菊
□見台の記……黒髪百合子

● 新貞婦人と良妻賢母……西川文子

□病人の心理…若松柳子
□ノートブック……紅梅

● 變り易い男、執念深い女…くちなは

□見たファウストの印象…水野鋼子
□神眼通……澁夜叉

● 美を狙ふ惡魔のさゝやき　佐穂姫

□上流の家庭を横行する愛の動物……須藤孝太郎

● 女裝いろ〱草……小泉迂外

□電話交換手と社會　内田技師
□結婚式の流行……

● 評判女の顔の觀察……玄龍子

□女中志願者の新傾向
□貴婦人監禁生活の背景…

● 新時代の女の行くべき道……宮島五丈原

□令嬢訪問の印象　ひな菊
□ダリヤの栽培……

菊判紙數二百八頁
美麗口繪如例豐富
正價廿錢郵稅二錢

東京本町
博文館
振替東京二四〇番

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

本月三日發行

■原田琴子著

■岡本一平裝幀

歌集 ふるへる花

□袖珍洋裝美本

□新式ポイント活字組

□本文二百三十頁

□歌數四百余首

□木版刷中繪數葉

■價六十錢

■郵稅六錢

内容

■紅玉

■ふるへる花

■雨のしづく

若き女の心は銀盤の上にたえずまろべる紅玉の如く其の美しきひゞきはみな歌なり即ち女史がこの一卷はくしくなつかしき女のひゞきなり

東京淺草區下平右衛門町

岡村書店發行

電話下谷四二〇四番

振替口座東京一九〇六五番

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

諸名家執筆

現代小品叢書

菊判半截版裝幀頗る優美
約紙數三百頁餘
正價一冊金三十五錢
郵送料一冊金六錢

田山花袋氏著
椿
第一編
(既刊)

正宗白鳥氏著
青蛙
第二編
(五月十日發行)

内容から言つても形式から言つても、自由で、清新で、且つ讀むにも丁度手頃の小品文。書齋にある時は勿論、電車の中ででも、汽車の中ででも、散歩の時でも、寢轉んで居る時でも、一寸讀んで見られる小品文。さうして少しでも爲になる事、面白い事を知らうとする賢い人に向つて、茲に現代小品叢書は無比の廉價を以て提供された。皆な是れ名流大家が其の苦心の作より精選されたるもの、蓋し愛誦措く能はざるものあるに相違ない。今や既に其の第一編として田山花袋先生の『椿』出で、第二編として正宗白鳥先生の『青蛙』將に世に出でんとす。續々愛讀を賜へ。

第三編 途上 前田晁
第四編 砂丘 吉江孤雁
第五編 題未定 窪田空穗
第六編 題未定 島村抱月

發行所 東京神田小川町 忠誠堂 振替東京二〇四三一 電話本局四九六六

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

石井柏亭氏著

■埃及・伊太利亞・土耳古・佛蘭西の部■

新裝發賣！

歐洲美術遍路

上卷

四六版三百八十頁
凾入頗美裝
定價金貳圓
小包料十二錢

外遊二箇年、足跡殆んど歐洲各國に及びたる著者の紀行評論、見聞の全部を收む。歐洲美術の新鳥瞰圖也。

題目

ヱムヱム船中・入埃及記・ナイルの上流・カイロー博物館一瞥・君府の蔣・南歐の春・羅馬より・萬國美術博覽會・アッシシーより・ペルーヂアより・トスカーナ・トリノ雜觀・巴里小品・セイヌ、エ、マルヌ・續巴里小品・アンデパンダンのサロンとスアン、ドンゲンの諸作・サロン、ドートンヌを觀る・巴里の水彩畫展覽會

挿畫

■泰西新古美術品寫眞版……三十三枚
■著者水彩畫、素描畫寫眞版……三十枚

塔のいろ／＼、カイローの宿のとなりの小さな塔、スタンブールの丘を飾る鎗のやうな尖塔の數、ペルーヂヤの宿から見た、月夜の青い空に立つサン・ドメニコの角な塔、サン・ピエトロの尖つた塔、シエーナの廣場に立つマンヂアの塔、フロレンスはヂオットの鐘、サン・ヂミニャーノの「Belle Torri」さてはまたグロテスクな石の怪物が立ち居て巴里を瞰下す、ノートルダムの塔のいろ／＼。

發行所　東京市京橋區南傳馬町三丁目　振替貯金東京五六一四　東雲堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

與謝野晶子女史序
吉井勇氏序歌

原阿佐緒著

小形頗美本
著者肖像入
歌五百首
定價五十錢
送費六錢

歌集 涙痕

新裝發賣

内容

- 涙痕
- 戀と死
- 子雀草
- 悲しき母と子
- あきらめ

うき戀を根として奇しき百合咲きぬ白きまことの青き涙の

——與謝野晶子女史序のうち——

發賣所 東京市京橋區南傳馬町三丁目 振替貯金東京五一六一四番 東雲堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜社編　小笠原さだ装幀（自書自刻）

青鞜小説集

四六判三百五十頁
頗美本
定價金八十錢
送費六錢

新刊發賣

執筆者

野上彌生　岩野清
小笠原さだ　岡田八千代
水野仙　神崎恒
小金井きみ　神近市
荒木郁　森しげ
尾島菊　林千歳
加藤籌　茅野雅
人見直　藤岡一枝
加藤綠　木內錠

小説十八篇

發行所　東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替東京五六一四番）　東雲堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

北原白秋著及畫

本文黒と草との二度刷
「朱欒」形、紺と金、紙表紙
定價金壹圓送費八錢

東京景物詩 及其他

「邪宗門」以後
第一の詩集
五月中旬出版

内容
章目

公園の薄暮
S組合の白痴
青い髯
おかる勘平
柳の左和利
銀座の雨

發行所 東京京橋區南傳馬町三丁目 振替東京五六一四 東雲堂

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

故　石川啄木著

籔野椋十氏序

土岐哀果氏跋

四六判三百五十頁

著者自筆歌挿入

函入美本

定價八十錢　郵税八錢

啄木歌集

新刊

著者の第一歌集「一握の砂」久しく絶版となりて江湖の渴望に背くこと久し。今「悲しき玩具」と併せて啄木歌集と名づけ世に出す。蓋し數多からぬ著者の歌のすべてを網羅せるものなり。懷かしき著者の姿見なり。

發行所　東京京橋區南傳馬町三丁目　振替東京五六一四　東雲堂

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

故石川啄木著

啄木遺稿

〔五月上旬發行〕

四六判四百頁函入
著者肖像手蹟入
定價金九十錢
送費金八錢

詩と感想

□呼子と口笛（詩八篇）
□泣くよりも（詩八篇）
□花散る日（詩十四篇）
□心の姿の研究（詩四篇）

□散文詩五篇

□わかば衣
□閑天地
□秋風記
□綱島梁川を弔ふ
□雪中行
□新時代の婦人
□雲間寸觀
□卓上一枝

□手を見つつ
□百回通信
□食ふべき詩
□文學と政治
□きれ〴〵の感想
□評論
□性急な思想
□わが最近の興味
□硝子窓
□紙上の塵
□一利己主義者と友人との對話
□歌のいろ〳〵
□時代閉塞の現狀

年二十、すでに詩集「あこがれ」一卷を以てその鬼才を稱へられ、のち「一握の砂」「悲しき玩具」の二歌集を出して僅かにその片鱗を示し、二十七歳にして早くも世を去れる故人の變化多き生涯は知る人をして大なる暗示と、深き感激に入らしむ。然もその内生活に到りて[illegible]されたるを知るもの甚だ罕なり。今故人の遺稿より、「あこがれ」以後の詩作と感想とを整理して、これを公にす。蓋し、本書によりて始めて故人の思想生活及人生批評家としての抱負の一端に觸るゝを得んか。「人」としての啄木を知る好個の資料たるなり。

發行所　東京京橋區南傳馬町三丁目　振替東京五六一四　東雲堂

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

岡稻里氏著

歌集 早春

橋口五葉氏裝幀

木版刷表紙美本
四六版二百三十頁函入
著者小肖揷入
定價金七十錢
送費金八錢

山美はしく水清き郷土にありて、日夕靜かなる自然と相對し、自然の氣息に觸れて歌ひ出でたるもの、これ玉の如く曇なき著者の歌也。若き春のおとづれ、豪宕なる夏の讃歌、逝く秋のほがらかなる足音、しろがねの壺の底にあるが如く降りつもる雪、これらみな著者の好んで歌へる風物也、都會の喧囂なる中に生るゝ頽廢の藝術と相俟つて、著者の抱ける藝術境の如き素純なるもの、又吾等に一味の歡喜を齎らすを信じて疑はず。敢て現今の歌壇に本集を薦む。

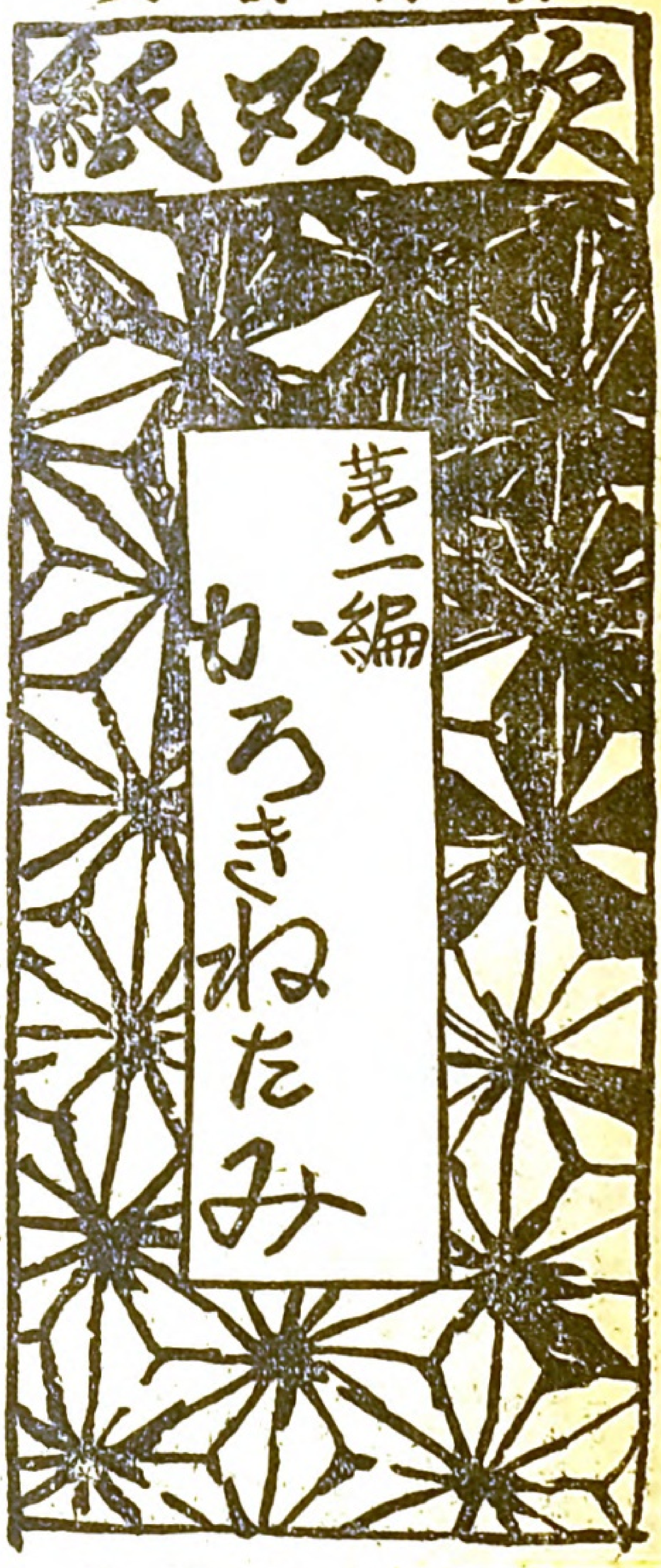
發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目 振替貯金東京五六一四番 東雲堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

岡本かの子著

（青鞜叢書のうち）

新刊發賣



小形美本
全部日本紙
木版手刷
挿畫一葉
定價貳拾五錢
送費二錢

この歌双紙は年四回刊行する全部本版刷の、純日本式裝幀に成る歌集で、本篇は女史の新作七十首を收めてある。「女なればか」「かろきねたみ」「袷の襟」「暗の手ざわり」「舊作のうちより」「いばらの芽」「むなおしろい」「淡黄の糸」「ひるの湯の底」「水のこゝろ」の十章。かろくやさしく、なつかしき女史の氣持ちは、頃合ひの年數を經た櫻の板につゝましく彫られて、稍々にじみ勝に刷り出された薄墨の色に、その情緒の顫へを窺ふことが出來る。

挿畫　和田英作氏
裝幀及裏畫　岡本一平氏
彫刻者　吉田悅太郎氏

發行所　東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替東京五六一四番）　東雲堂

THE PILGRIMAGE.

BY YONE NOGUCHI.

新英詩集

野口米次郎著

「東海より」以來過去十年間の英詩を聚む。二年前、此集英米詩壇に顯はるゝや好評嘖々、時の批評家著者を比するにメエレーン或は畫家ウヰスラーを以せり。ランソム氏が野口氏を評論せる一大論文（セーフオートナイトリーレヴユウ）は詩集の巻末に掲げらる。

新刊發賣

定價金壹圓

送費金六錢

◎今日より顧れば、詩のやうな時代は一度は、此のせゝこましい日本にもあつた。日本は當時に於て、十分の意義に於ての世界の日本では無かつたかも知れぬ。然れど世界は日本に對して、今日よりも平和であつた。「ヨネノグチ」は此の時代に、詩を胸に懷いて米國に渡つたのである。若し彼にして米國に渡ること、十年遲かつたならば、彼が胸中の詩は果して世に出づる機會を得たであらう乎。彼は此の點に於て、全く特殊の地位を占めて居る。

◎西洋人は、野口の詩に於ける及び文に於ける想像力の豐富を見て、野口の日本人である點よりして、日本人の富贍なる想像を稱して居るが、日本人は決して西洋人の輕易に想像するが如き、想像の富贍なる人民で無い。日本人の想像力は思ひ切つて貧弱である。日本に大なる文學無く、大なる哲學無く、大なる事業が無かつたのは、其の根本の理由は、實に此の想像力の貧弱に在るのだが、此の點に於ては野口は、眞に一の天才である。彼れの詩は詩趣に漂うて居る。或は彼れの詩は想像の翼に依つて蝶の如く舞うて居る。彼は其の詩趣饒き文詩を以て、每月或は每週、英米の文壇を賑はして居るが、紙と木とのマツチの函のやうな日本の家に棲み、風呂敷を細工としたるが如き日本の衣を着け、米を食ひ、茶を啜り、或は團扇を使ひ、或は火鉢を擁して日本語を話し、日本語を讀みながら、ペンを横に走らして出來上がつた原稿を、海は太平洋を超えて亞米利加に陸は西比利亞を經て英國に送る處、彼も亦日本には產れそこれた人間の一人である。

（東京魁新聞　若宮卯之助）

發行所

東京市京橋區南傳馬町三丁目

振替貯金東京五六一四番

東雲堂

參版發賣

抒情歌集

桐の花

北原白秋著及畫

歌八章四百餘首

- 銀笛哀慕調
- 初夏晩春
- 薄明の時
- 雨のあとさき
- 秋思五章
- 春を待つ間
- 白き露臺
- 哀傷篇

散文六篇

- 桐の花とカステラ
- 晝の思
- 白猫
- 植物園小品
- 感覺の小函
- ふさぎの蟲

本文二度刷 新形空前の美本五百頁
挿畫十四葉
カット二十個

定價壹圓 小包送料金八錢

發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目（振替貯金東京五六一四番） 東雲堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

"ZAMBOA"

朱欒

五月號

馬樂（歌）　吉井勇
腹痛（小説）　佐々木繁
まどりがる（詩）　川路柳虹
小景異情（詩）　室生犀星
ルバイヤツト（散文）　つじじやん
印度古詩（詩）　増野三良
埋草（詩）　よさのひろし
幼き春（小説）　西村陽吉
少女の歌（詩）　茅野蕭々
人形の安（小説）　邦枝完二
道心（詩）　吉川惣一郎
四月の眠り（小品）　河井酔茗
枯野のあそび（歌）　北原白秋
サイネリヤの畑（詩）　北原白秋
京橋にて（書簡五篇）　西村陽吉

■ 毎月一回一日發行　定價一冊金二十五錢　郵税金二錢 ■
■ 三ヶ月金七十五錢　六ヶ月金一圓五十錢　一ヶ年金三圓 ■

發行所　東京市京橋區南傳馬町　振替東京五六一四番　東雲堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

心の花

第十七卷　五月號　第五號

▽遺兒（小說）　水上夕波
▽母と娘（オード）　金子南冥
▽眠（小說）　天沼匏村
▽團重左（モリエール）　草野柴二
▽作業（小說）　竹友藻風
▽グーノーの歌劇ファウスト　竹井大助
▽ファウスト劇　小花清泉
▽譯本ファウストに就て　森鷗外
▽欟齋木村先生　佐佐木信綱
▽海よ海！（短歌百首）　原口愛子
▽梘の村（同上）　片山廣子
▽行餘集（同上）　三浦守治
▽病みぬれば（短歌）　沼波瓊音
▽鳳凰の眠（同上）　竹田寅三
▽塔（詩）　原田謙次

定價一部稅共金二十錢・半年金一圓・一年金二圓

東京日本橋區本石町一ノ一　竹柏會出版部

電話本局五一七〇番　振替東京四三〇〇番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

五月一日發行

毎月一回一日發行

美術新報

價三十錢 郵一錢五厘

第十二卷△第七號

要目

(時言)官民懸賞の厚薄
近東諸邦の毛氈 森田龜之輔
南洋の工藝(下) 朝倉文夫
セーラルの陶磁器(下) 沼田一雅
蠟型鑄物の話(下) 香取秀眞

繪畫

近東の毛氈(原色版) 高加索製
オキベル、スール、オワス、「四階段」(原色版) ゴッホ筆
華鬘鐶(アートタイプ) 興福寺藏
桔梗と梅の茶碗(細目版) 乾山作
風景(細目版) ポール、セザンヌ筆

要目

「畫譜帖」と「希臘式小箱」 岡田三郎助
光說と乾山に就て 坂井犀水
後期印象主義抄 河野桐谷
川端玉章翁を追憶す 塚本博士
諸展覽會 雪堂生
時報

發行所 東京本郷湯島切通 畫報社 振替東京一八一〇六番 電話下谷二四八三番

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

東西今古藝術之評論

藝術

五月號要目

■太陽（モーリス・ドニ）……（挿畫一葉）……田中喜作

■後期印象派の解釋に就て……矢代幸雄

■小林清親と其當時……（挿畫二葉）……木下杢太郎

■ウォルター・グリーヴス……（挿畫一葉）……石井柏亭

■江戸藝術之研究一二、露佛（挿畫二葉）……荻原直正

■街路動勢論（エミイル・マアニユ）……高村光太郎

■梅亭九老……（挿畫一葉）……西村靑歸

■時評……（挿畫二葉）巽畫會〇无聲會〇石井柏亭展覽會〇表慶館特別展覽〇大阪各展覽會……

■海外消息……（挿畫二葉）……仲田勝之助〇田中喜作〇木下杢太郎〇石井柏亭

■海内消息・前月論壇 新刊紹介 新聞雜誌一瞥……

■ベンベヌート・チエリーニ自傳……荻原直正

定價一部三十錢送料二錢半年一圓七十錢

藝術社

東京小石川區白山御殿町百十三

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

月刊美術雜誌

みづゑは本邦最古にして目唯一の水彩畫研究專門雜誌なり

水彩を描く人は勿論愛好する諸氏は坐右に本誌を欠くべからす

みづゑ

第九十九

五月三日發兌

送料共二十五錢

■蘇國の景（水彩畫原色版）……丸山晩霞
■おもちや（同）……相田寅彦
■植物園（同）……故大下藤次郎
■靜物（同）……吉田豐
■蘇國オーバー附近の雨（水彩畫寫眞版）……丸山晩霞
■カレドニヤ運河（同）……丸山晩霞
■其他寫眞版數葉……
■水彩畫と其描法……丸山晩霞
■繪具の耐久力……石川欽一郎
■水彩畫展覽會に就いての會話……戸張孤雁
■滞歐中の紀行と感想……丸山晩霞
■水野君に與へて藝術家の生涯を憶ふ……矢代幸雄
■記憶に殘れる水彩畫……三宅克己
■續々三脚物語……鵜澤四丁
■春の朝……後藤工志
■初學者の爲に……赤城泰舒

發行所　東京小石川關口駒井町十三番　振替口座東京六九六三番　春鳥會

第四卷 第五號　**俳味**　每月一回 一日發行

五月號要目

沒我の刹那…………（卷頭語）
對灯說法…………沼波瓊音
剃刀餘錄…………川島風骨
韵文にも文法を守るの要あり　久保天隨
芭蕉と兼好…………麻衣生
獨吟百韻 馬念佛…………小杉未醒
徒然草を讀む…………長尾素枝
俳諧昔の五月…………唯美子
俳句渡し守…………拂拭子
繪本小倉百句…（五代目市川團十郎）
草餅、春嵐…………（懸賞俳句發表）
俳句其他
菖蒲湯（口繪）…………（蕉齋筆）
達磨（裏繪）…………內藤鳴雪筆

定價　一部廿錢　半年分稅共 前金壹圓　一年分稅共 前金貳圓　郵稅一錢

發行所　東京市本鄉區西片町十番地　振替東京三四三四番　俳味社

自由講座會員募集

五月中の講義題目と講師氏名

●我等は近代文藝を自由に且眞面目に研究す
●研究範圍は小說戯曲詩哲學建築繪畫音樂等
●講義は每週火金午後五時より八時迄三時間
●男女を問はず會員たる事を得會費每月壹圓

第一科（五時より六時まで）
バアナードショオの『カンデイダ』　平田禿木氏
古希臘戯曲梗概　千葉鑛藏氏
近代思想より見たるレオナルド・ダ・ヴインチとシケル・アンセロ　中澤臨川氏
露國の國民性と文學　昇曙夢氏
バアナード・ショオの戀愛觀　野上臼川氏
支那小說講話（艶史の類）　千葉鑛藏氏

第二科（六時より七時まで）
トルストイの小說 where love is, god is.（用書講義）　鈴木三重吉氏
メレデイスの小說 the tale of chloe.（同）　平田禿木氏
ウエデキンドの小說 rabbi ezra.（同）　野上臼川氏
オイケンの『自然主義か理想主義か』（同）　安倍能成氏

第三科（七時より八時まで）
ベルグソンに就いて　廣瀨哲士氏
醫學上より見たる色情狂
ウイリアム・ジエームスの哲學　中澤臨川氏
泰西名家著作梗概　千葉鑛藏氏
私の人生觀　田中王堂氏
繪畫論　太田正雄氏
ベルグソンの『笑の哲學』　千葉鑛藏氏

●規則書は參錢郵券封入事務所へ紹介を乞ふ
●開講には四時より會場にて直に入會し得
●會場　本鄉區弓町一丁目　本鄉敎會
●事務所　淺草區三間町八　村上靜人方

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

■モザイク■

五月發行一周年紀念號內容

祖父の眼（小說・五十頁）……西田長左衞門
クラシック的氣分（評論）……太田善男
北國の王女（戲曲）……藤井伯民
洋妾後篇（小說・七十頁）……水島爾保布
微笑（小說）……五十嵐禎夫
扉の音（小說）……秋庭俊彥
ラ・フォスタン（小說・ゴンクウル）……武林無想庵譯
續「酒狂者手記」より（小說）……山本露葉
新著月旦其他（感想）……同人
表紙繪（ギリシヤ陶畫模寫）……小泉勝爾
裏繪……濱田葆光

本號特價四拾錢・郵稅貳錢五厘・普通號參拾錢

東京市下谷區　モザイク社　中根岸町六九

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

フユウザン

毎月一回 一日發行	第五號 〔五月號〕	一部二十錢 郵税一錢五厘

挿　絵

善きサマリア人（寫眞版）……………………ブアン・ゴーホ
村の隅　（〃）……………………同
椅　子　（〃）……………………同
フレスコの一部（〃）……………………ジヨツトオ
男の首　（〃）……………………岸田劉生
女　（〃）……………………故千家孝麿

記　事

反逆（ジヤン・クリストフ）…ロマンロラン（2）……高村光太郎
ウインツエント・ウアン・ゴーホ…マイエル・グレーフエ…木村莊八
湧き昇る心（感想）……………………岸田劉生
フユウザン會を見てより（〃）……………………成田秦欠郎
我實在の歡喜（詩）……………………木村莊八
ジヨツトオの藝術（譯）……………………齋藤與里
ル・シダネエの畫（詩）……………………眞田久吉
痴人の懺悔—ストリンドベルヒ（2）……………………木村莊八
消息・五人畫會・其他……………………

發行所　東京市牛込區水道町五三　振替口座東京四七三　日本洋畫協會出版部

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

現代の洋畫

第十四號　來る五月五日發行

定價三十錢

改革後の『現代の洋畫』（第十三號より）

本紙の體裁	優美にして充實せる事、恰も英國の美術雜誌スタヂオの概あり。全判の寸法竪八寸五分横六寸二分、紙質精良紙數四十有餘頁を算し內容の整然たる事、等に於て本誌の右に出ずるものなし。
挿入畫の數	掲出繪畫の都合により毎號一定せず、原色版の尠なき時は石版或は凸版、寫眞版を多く挿入し、原色版の多き時は凸版或は石版を省く。
挿入畫の筆者	毎號一定せざるも現代の大家を初め新進青年畫家が優逸作品の大小となく之を適當なる製版により掲出すべし。
原色寫眞版	原作の俤を其儘に傳へ得るは原色寫眞版の特色なり。毎號の本誌には竪五寸横四寸より成る原色寫眞版を五枚乃至七枚を挿入して提供す、
網目寫眞版	精巧なる製版術によりて作り成されたる寫眞版は毎號二三枚を挿入すべし此版面竪六寸横四寸、此他大少數拾個の寫眞版は記事中に挿入す。
石版と凸版	線畫即ちエッチング、ペン畫、毛筆畫の類は原作の筆意を現はすに特色ある凸版に付し、圖案、其他淡彩畫は見事なる石版印刷となすべし。
記事と執筆者	毎號一定せず、言論、傳紀、研究、紹介、報道は實に的確迅速にして新しく興味深き本誌の記事は精巧なる挿畫と相俟つて有益なるもの也。
發行日と定價	毎月一回一日を以て正確に發行し送本すべし、價は一部送料共前金にて三十一錢、數ヶ月分前納は別に割引あり。

本會には地方愛讀者のために洋畫材料販賣部の設けがあります
『販賣部目錄』御入用の方は御申込になれば速に差上げます

日本洋畫協會　振替口座東京四三七三番

東京市牛込區水道町五三

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第三年第五號

詩歌

價廿五錢 送費一錢

五月號內容

蠱惑の源（感想）……三木露風
戲曲「アラディン」と「パロミデス」（メーテルリンク）……野上臼川譯
歌……北原白秋
流るる砂（詩）……加藤介春
鐘（ステファン、ゲオルゲ）……川路柳虹譯
みじかきもの（詩）……山村暮鳥
生の斷片（詩）……服部嘉香
戲曲「亡靈」（イプセン）……髙橋泰譯
光りを怖るる者の歌（歌）……尾山篤二郎
父と居酒屋の娘と（歌）……矢代東村
小さきえぷろん（歌）……山田邦子
硝子商（散文詩）……ボードレール
ボール、ヴエルレーヌに就て（評論）……フランソア●コッペ
風景（歌）……新妻莞
濁れる空（歌）……前田夕暮

短歌

田村飛鳥、奥村博、熊谷武雄
寺井義、小野深雪、佐藤嘲花
古木青葉、小谷清子、中山雅吉
平島與志美

發行所 東京神田表神保町 東京堂

社友募集

白日社規則往復葉書にて申込まれたし。

發行所 東京市外西大久保 白日社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

純文藝雜誌

詩と劇

每月一回 一日發行

新綠號

毒藥の壺（感想） 相馬御風
チエホフの公開狀（飜譯） 米川正夫
無謀（戲曲） 井田絃聲
きやすめ（小說） 八橋有春
扉に凭りて（隨筆） 清浦靑鳥
別るる日（小說） 右田靑歌

詩と歌

へくささり 若山牧水
陽炎とエクスタシイ 福田夕咲
創造の種子 白鳥省吾
寵人の缸 尾竹紅吉
ふさぎの虫 辰己善次郎
狂人哀傷の歌 人見東明

自由（小說） 中村星湖
ファウスト劇の所感（評論） 廣政法天
後期印象派論（飜譯） 木村莊八
死と老婦（戲曲） 松本苦味
白痴を讀む（批評） 仲木貞一
曙光（小說） 小澤久雄

（繪畫） 正宗得三郎 清宮彬 木村莊八 村田實 大熊信行

第四年 第五號 五月號 定價金 廿五錢

（短歌） 天野鎌二郎 中川一政 上村千草 南くに子 樋渡花明

發行所 東京市小石川區雜司谷町百四十 詩と劇社

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

美裝全一冊
三百二十頁

畜生道

實價金一圓
郵税金八錢

平出修氏著

◎公判に於て六錢窃盜犯人を裁判する某國法官の心理描寫を試み◯計畫に於ては大逆事件辯護人たりし著者の感傷を披瀝す◯畜生道は人間の深酷なる科學的解剖にして◯未亡人には婦人問題の正面的解釋觀あり◯長者町鹽ばな一黑の己の三篇は無學にして直情なる「零丁の女」を描いて著者一流の觀察あり

東京銀座三丁目八
大阪南久太郎町三丁目
京都祇園萬壽小路

籾山書店

振替 東京二四一七
大阪一三六八六

第四卷
第五號

スバル

定價三十錢
郵税二錢

五月號要目

雁 小說 森鷗外
鷹の夢 小說 岡田八千代
忘れ得ぬ女 小說 川浪道三
アネモネの花 小說 江馬修
結婚前 小品 辻永
戀愛小品 小品 吉井勇
死の勝利 ダヌンツイオ作 石川戲庵譯
青い鳥 戲曲 齋藤寅一譯
歌 三ヶ島よし子
歌 堀口大學
はかなごと 歌 神尾光子
詩 茅野蕭々
詩 竹友藻風
むく鳥通信 無名氏
感想 灰野庄平
伯林劇信 平野萬里
紹介及消息

東京市神田區北神保町二番地
昴發行所
電話本局四二六四番

五月一日發行
定價廿錢

アララギ

第六巻第五號　五月號

内藤鋠策氏の「旅愁」　千樫
山の上の湖水　柿乃村人
背の手帳より　憲吉
其折々　長塚節
四月の歌壇　千樫
山家集私鈔　齋藤茂吉
イエッツの批評的研究（三）　山宮允
叫びと俳句（二）　伊藤左千夫
短歌雜論　茂吉
猶太人の詩　中村憲吉
記紀短歌小解　古泉千樫

短歌
土屋文明　金原夜汐
清水謙一郎　小林いさの
松島悟風　茅具子
齋藤勇　横山重
千樫　岡千里

定價半年壹圓拾錢○壹年貳圓貳拾錢（税共）

投稿注文共東京本所緑町三ノ三十古泉千樫宛
東京根岸短歌會

白樺

第四巻第五號

五月一日發行

定價卅錢送料一錢五厘半ヶ年前金一圓七十錢一ヶ年三圓卅錢

目次

▲一日のうち（小說）　長與善郎

▲雜感　武者小路實篤

▲自分丈けのこと（感想）　長與善郎

▲彼女の顏（詩）　長與善郎

▲葡萄の頃（小說）　正親町公和

▲君と私と（小說）　里見弴

▲編輯室　同人

挿畫

▲女のトルソー　ロダン

▲同　同

▲同　同

▲同　同

發行所　東京麴町二丁目二番地　振替東京二〇九一四番　電話番町四二五八番　洛陽堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

五月號

■旅立ち（戲曲）……宇高信一
■黒き瞬（戲曲）……谷崎精二
■寂しけれども（戲曲）……舟木重雄
■偶像の發葬（ニイチエより）……秋野優
■露西亞詩壇の新思潮……松永秋雄
■最近佛國畫界に於ける畫家……眞田久吉譯
■小說月評……M、M、M、
■表紙畫、裏繪……小林德三郎

第二巻第五號

奇蹟

（戲曲號）

定價貳拾五錢
（一ヶ年貳圓七拾錢）

現代傑作叢書

□橋口五葉氏装幀
□木版手刷五色
□輝く如き美本
□コロタイプ著者肖像入
□袖珍二百七十頁
□定價五拾錢郵税六錢

五月上旬發行

第一編
正宗白鳥著
心中未遂
□心中未遂
□白壁

第二編
島村抱月著
影と影
□平清盛 □運命の丘
□海浜の一幕 □復讐
□競争 □断片
□柏峠 □山繼ひ

第三編
岩野泡鳴著
ぼんち
□ぼんち□非常時
□巡査日記
□圓覺の眼玉

發行所
東京神田佐久間町四ノ二三
振替東京一二九五三番
電話下谷三四一九番
植竹書院

演劇雜誌

シバヰ

五月號

毎月一回
一日發行

定價
金卅錢

□レッシング座……楠山正雄
□ユウジエエヌ●ブリユウ……清見陸郎
□劇鑑稱の分野……市川又彦
□ベルグソンの喜劇論……本間久雄
□ファウスト評……下町二人娘
□愛蘭劇作家……森口柳歌
□越路の紙治をきく……近松秋江
□さくら畑（第二幕）……中谷德太郎

挿畫
□近代劇と舞臺面
□レッシング座
□エレオノラ●ドウゼ

東京市京橋區新佃西町三ノ五
シバヰ發行所

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

東雲堂藏版書目

歌集	桐の花	北原白秋	定價金壹圓
歌集	水荘記	吉井勇	定價金壹圓
歌集	別離	若山牧水	定價金七十錢
歌集	死か藝術か	若山牧水	定價金七十錢
歌集	黄昏に	土岐哀果	定價金五十錢
歌集	收穫	前田夕暮	定價金七十錢
歌集	啄木歌集	石川啄木	定價金八十錢
歌集	早春	岡稻里	定價金七十錢
歌集	かろきねたみ	岡本かの	定價金二十五錢
英詩集	The Pilgrimage.	野口米次郎	定價金壹圓
詩集	思ひ出	北原白秋	定價金九十錢
詩集	邪宗門	北原白秋	定價金八十五錢
詩集	東京景物詩	北原白秋	定價金壹圓
詩集	白き手の獵人	三木露風	定價金壹圓
詩集	霧	河井醉茗	定價金五十五錢
詩集	路傍の花	川路柳虹	定價金五十錢
詩集	夜の葉	森川葵村	定價金六十錢
小説	青鞜小説集	青鞜社	定價金八十錢
小説	新譯梅ごよみ	鷲谷爲蝶	定價金五十錢
戯曲集	午後三時	吉井勇	定價金壹圓
戯曲集	和泉屋染物店	木下杢太郎	定價金壹圓
論集	演劇新聲	小山内薫	定價金八十錢
評傳	哲人カアペンター	石川三四郎	定價金八十錢
隨筆	病める窓にて	らいてう	定價金九十錢
隨筆	啄木遺稿	石川啄木	定價金九十錢
隨筆	歐洲美術遍路	石井柏亭	定價金貳圓

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

昭和44年4月15日発行　【第4回配本】

青鞜第3巻　5月号

編著者	平塚 らいてう
発行者	藤原正人
発行所	(株)明治文献
印刷	江明印刷
製本	(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 3,800円

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
PL
756
S45
V.3
no.5

University of Colorado at Boulder
U18304 6746296

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雜誌規定

■毎月一回一日發行
■定價一册金貳拾五錢(郵稅壹錢五厘)
■前金購讀料(四ヶ月分)壹圓(六ヶ月分)壹圓五拾錢(八ヶ月分)貳圓(十ヶ月分)貳圓五拾錢(一ヶ年分)參圓
■社費は一ヶ月金參拾錢にして每月十五日迄に納附せられたし。取纏め納付せらるゝを便宜とす。
■廣告料(一頁)拾五圓　半頁(八圓)
■振替貯金口座は(東京五六一四東雲堂)に拂込まれたし。
■郵劵代用は一錢切手に限る(但し一割增のこと)。
■編輯事務、寄贈圖書雜誌、及研究會に關する事務は靑鞜社へ。
■雜誌購讀、社費拂込、廣告申込、交換廣告其他販賣に關する一切の事務は東雲堂へ。
■原稿〆切期日は每月十日限とす。

大正二年四月二十八日印刷納本
大正二年五月一日發行

禁轉載

東京府下巣鴨町字巣鴨一一六三
靑鞜社内
編輯兼發行人　中野初

東京市京橋區新榮町二丁目廿一番地
印刷人　佐藤保太郎

東京市京橋區新榮町二丁目廿一番地
印刷所　文祥堂

編輯所　東京府下巣鴨町字巣鴨一一六三　靑鞜社

發賣所　東京市京橋區南傳馬町三丁目　東雲堂書店
電話京橋一六三九番
振替東京五六一四番

本號特價金四拾錢

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER